
狐月/キツネツキ

天津 三夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狐月ノキツネツキ

【Nコード】

N4470R

【作者名】

天津 三夏

【あらすじ】

平成の大合併で生まれた「わたつみ市」。

しかし、器が変わっても、その中身は容易く変わる事は無い。その土地は、古くからの因習同然に腐敗と暴力に支配されていた。

主人公、小澤逸郎おみちろうはその街で裏社会の調査業 情報屋を営んでいる。

ある夏の満月の夜、小澤は道端で一匹の狐と遭遇し、それが切っ掛けだったかの様に女の幽霊を目撃する。それ以降、周囲に奇妙な、気味の悪い視線を感じる様になった。

一章 1

一章 1

月の綺麗な夜だった。

川伝いの路を歩いていた。

昼の咽せ返る様な草いきれの残り香が、流れる風で鼻をくすぐる夏の夜。

少し呑み過ぎたかもと思う。

土産物の紙袋を抱え、酒の余韻に揺れる。

右手には、宅地の間で荒れ放題の笹藪。

左手は、護岸の下、繁茂する雑草だらけの河川敷。月明かりに白く煌きながらも尚黒く澱み流れる広い河面。そのまた向こうは、悪夢の立体迷路さながらに偉容を誇って佇む、大きな化学工場。

そして中天には、象牙色に淡く輝く円盤。

夏の陽の名残を冷ます、心地好い風。

古い歌を口ずさみ、半ば意図的な千鳥足ステップで夜路を往く。

がさり

音につられて目を向ける。

錆びた有刺鉄線に阻まれながらも、それを無意味と嗤う様に突き出し、路の上を覆う、笹竹、笹藪。その狭間に一對の目が光った。

犬、か。

笹竹と、それが落とす濃い影に覆われながらも、満ちた月の明かりがその形を朧げに浮かび上がらせていた。中型犬としては大きな方だろうか。前足を揃えた、所謂お座りの形で、それは痩せて尖った横面を見せていた。ふと、鼻先がこちらを向く。ぴんと立った耳は意外な程大きい。

きらりと再び双眸が光る。そして、笹竹と雑草の隙間から、太く

長い尻尾がわさりと振られて覗いた。

ピン ポォーン

壁越しでも近く感じる間抜けで澄んだ音。

「葉菜ちゃんの部屋じゃない」

座椅子に深く腰掛け、コントロールパッドを両手で持つしほりやうじ斯波涼子は、モニターに視線を向けたまま視界の端の相手に問う。

「ああ」

一之瀬いちのせ葉菜は短く返し、やはりコントロールパッドを両手に握り、モニターを見詰めたまま。ただし、こちらは床に胡坐を掻き、猫背と言っよりも攻撃的な前傾姿勢。

「小澤君じゃない？」

現在時刻は二一時を回ったところ。こんな時間に呼び鈴を鳴らす人物は限られている。

「うんッ」

語尾に気迫のこもった返事。葉菜は鋭い動きで上体を斜めに倒し、素早く起こした。モニター内 ゲームの動きと連動している。

涼子は背中を座椅子に預けたまま、対戦相手の葉菜を見る。

「行かなくちゃ」

「いい」

短く否定した瞬間、卓袱台に置いた携帯電話が不服そうに唸り、かたかたと小刻みに踊り出した。それに虚を衝かれ、集中を乱した葉菜の操るキャラクター機体はあっさり爆散した。

「ンだよ、居ないのオ？ハアナーッ」

ケータイを切り、閉ざされた扉に向って呼びかけた時、隣の部屋の扉が開いた。

「うっせえッ」

髪をベリーショートにした女が不機嫌を貼り付けた顔を出し、睨

んだ。その下からまた、小柄で柔和な表情の女が顔を出す。

「今晚は、小澤君」

「今晚は。なんだ、斯波さんの部屋か」

紙袋を抱えて一之瀬葉菜の部屋の前に立つ男
堵の声を漏らした。

おさわいつろう
小澤逸郎は、安

「いつものことやん。はよ気付け」

言い捨てて葉菜は涼子を部屋へ押し戻し、小澤の目の前で扉を閉めた。

「キツネ？」

涼子は目を丸くし、嬉しそうに声をあげた。

促されるままに入った涼子の部屋。蛍光灯の明りの下、小澤の青ざめた顔を見た葉菜は片方の眉を上げ、何かあった？と、訝しげに訊ねた。その答えが狐。このアパートまでの道行きで狐に出くわしたと、小澤は告げた。

涼子の部屋で卓袱台を囲み、車座に座った三人は三角形に互いを見合っている。

「うん。この辺、居るのかな」

涼子と葉菜は視線を交わし、片や首を傾げ、片や首を横に振る。

「居るのかなって……あたしら地元やないし。あんたが知らんもん、知る訳ないやん」

学生時代の数年間離れていたとは言え、小澤はこの土地で生まれ育った。だがその限りでは近所に狐が生息しているなどと謂う話は聞いたことがない。だから二人が知らないのも尤もなのだが、

「最近、そんな話聞いたりしてないかなって どう？」

「知らん」

「わたしも聞いたこと、無いなあ」

「そっか」

「でも、居たら見てみたいねエ」

涼子の言葉に葉菜は、そおかア？と、疑問を呈す。小澤はそんな

二人の遣り取りをしばらく眺めていたが、やおら脇に置いた紙袋に手を伸ばした。

「あ、これ遅れ馳せながら、お土産。いつも葉菜がお世話になっちゃって」

そう言つて紙袋から取り出したビسケットの箱や蟹缶を卓袱台の上に山と積む。袋に残つたのはコンビーフが二缶とセブンスターが二カートン。

そんな気を使わないでと笑いながら涼子は言い、小澤の言い様が気に入らない葉菜は鼻を鳴らした。しかし徐ろに蟹缶を手に取る。

「カニチャーハン」

「ん、好いねえ」

言い様、葉菜と小澤は涼子に期待のこもる視線を注いだ。受けた涼子は苦笑気味に、はいはい、じゃあ今度ねと、答え、

「ところで、フェネックスはこの世で最も愛らしい生き物だと思うの」

唐突に、真面目な顔でそんなことを言った。

「うむ、あの愛らしさは最早犯罪やん。創造主のあざとさには、時々呆れを通り越して感心させられるわ」

葉菜は目を細め、眉間にしわをよせる。

狐の話は、そのまま小澤を置き去りにして流れ去った。

涼子に就寝の挨拶を告げ、小澤と葉菜は隣の葉菜の部屋に移った。背の高い葉菜は強い目であまり背の高くない小澤の童顔を睨む様に覗き込み、何かあつた？と、再度問う。小澤は二三度目を瞬かせ、え、何がと、問いを返した。

「しらばくれて。顔、青いよ。狐に遭つただけにしちゃあ」

ああ、うんと、煮え切らない返事をし、小澤は脂の浮いた顔を擦った。

「狸を見ても珍しいと思うだけなんだけどさ、狐はなんだか、ちょっと違うんだな」

「ウン？」

葉菜は戸惑い顔で首を傾げる。促されて小澤は少し間を置き、観念した様に話し出した。

「いや、前に見たんだよ。狸」

ある春の夜、ゴミの袋を提げてゴミ捨て場へと向うと、そこに先客があつた。

最初は猫かと思った。だが、ヒト《小澤》の気配を感じ取り、去ろうとするその影には妙な違和感があつた。丸い頭、短い脚、太い胴、太い尻尾。立ち止まり、去り往くその姿をしばし眺めてから、漸くそれが狸だと気が付いた。野生というよりは野良だな。と、その時は思つたのだが。

「この辺にも居るんだと思って、ちょっと嬉しくなつた。まあ、それだけなんだよ」

ベッドに腰掛け、アンプに繋いでいないギターを爪弾きながらその話を聞いていた葉菜は、ピックで尖つた鼻の頭を搔く。

「……今度のは、違つた？」

「うん」

笹藪の内からこちらを見ているモノが、犬ではなく狐だと気が付いた次の瞬間、別の気配を感じた。それは、視線。

「……視線つて？」

「文字通り、視られてるって感じたんだ」

「どこから？」

「真正面」

顔を戻すと、路の上に人影があつた。否、影ではない。月明かりの下、灰色に浮かぶ路上に人の姿があつたのだ。

身体が自由が奪われた。半覚醒時、夢現に訪れる金縛りとは違つ。地に足を付けて立ち、眼を見開き、現実に物を見ているとの実感がある。なのに身体はびくりとも動かない。

囚われた。眼前の、路上に立つモノの眼に。

髪の長い、裸足の女。

傾いだ首、半開きの唇、そして、虚ろな眼。まるで虚の様なものに、
それでいてもの言いたげな瞳が小澤を視ていた。
がさり

又も音がした。反射的にその方向 笹藪に顔を向けてから、身体
が動く事に気が付いた。

狐の姿は消えていた。

はっとして、視線を正面へ戻す。

女の姿も消えていた。

「……それで」

葉菜は強張った顔で続きを促す。小澤は疲れた顔で床を指差した。

「まっすぐここまで」

走ってきた。

嗤おうとして嗤えず、葉菜はしばらく口を徒に動かし、気を取り
直して一度深呼吸した。

「それ……狸と狐の違いは全然ツ関係ないじゃない」

小澤は、そうだよねと、小さく呟いた。

「ああ、毎度。今こちらから御連絡……いやいや、ホントですって。報告書だってもう纏めてあるんすから。ほら」

そう言って、携帯電話をプリンターに近付ける。ワンコインで購入した中古のそれは、ヘッドを忙しく左右させながら、電動鋸がしゃくり上げる様な騒音を放っていた。

「ね、只今絶賛印刷中。え？ちよッ、勘弁してくださいよオ？や、テキストデータで宜しけりやすぐにもメールで……でしょう？もうちよつとですから、はい、はい、そりやもう、え、毎度有難う御座いますウ、はいはい、失礼致しますウ、はい、それじゃ」

通話を切ると、小澤は顔を歪め大きく舌打ちした。

「しみつたれが一丁前に急かしてんじゃねえよ。経費水増しすッぞ」
そう叫び、携帯電話を壁に叩き付けようとして 溜息を一つ吐き、卓袱台の上の充電器に戻す。

ツたく、暇な時と忙しい時の差があり過ぎんだよな。

顎に滴る汗を拭い、グラスの底の温んだ麦茶を飲み干す。

不快指数が増した気がした。

呼び鈴が鳴り、続け様、扉を叩く音。

瞬間、緊張が全身を駆け巡り、続いて不快指数が跳ね上がる。

くそッ、今度は何だよ。

塀にしているこのアパートは築三十余年の檻樓家。全六室の入居率は五割。飛び込み営業も宗教の勧誘も来ない。訪ねてくる極少数の友人知己は、皆訪問の際の手順を心得ている。だから今、扉の向こうに居るのはおそらく仕事関係。友好的か、そうでないかは

「小澤君、居るか？飯尾いひおだけど」

その声に目を丸くし、扉に向かった。覗き窓で声の主を確認し、

錠を開ける。

「よお」

四十絡みで体格のがっしりした 開襟シャツにボタン留めのサスペンダー、右手にスーツの上着、左手にはレジ袋を提げた 男が立っていた。

「あれ飯尾さん、どうしたんですか」

「陣中見舞い。はいこれお土産」

差し出されたレジ袋の中身は五〇〇ml缶ビールの六本パック。それを呆気にとられた顔のまま受け取る。

暑いねえ、中いいかい？と問う飯尾を慌てて招き入れ、尚も理解できなかった。確かに仕事関係の人間だったが、飯尾はここへ来る様な人間ではない。

「急に悪いね。いや、前から一度様子を見に来ようと思ってたんだ」
そう言つて飯尾は部屋の中を見わたす。安っぽい小さな卓袱台と、その上にはノートパソコン、灰皿と煙草、充電器にささった二つの携帯電話。部屋の隅にはPCとケーブルで繋がったプリンター、そしてテレビとローチェスト、中型の冷蔵庫と扇風機。それ以外は何も無い、生活感の乏しい部屋。

小澤は客人の、センターラインのしつかりプレスされたスラックスを目にして、気まずさに顔を赤らめた。

「すみません、椅子どころか座布団も無い部屋ですが」

「ああ、いいよ気にしないで」

飯尾は気さくに手を振りながら毛羽立った畳に胡坐を搔く。

「顔色悪いよ。ちゃんと食ってんのかい」

「ええ、ちゃんと食ってますし、顔色悪いのはいつものことですよ」
土産のビールを出そうとすると、飯尾は、車で来てるから俺はいよと、断った。小澤は冷蔵庫から麦茶のポットを取り出し、湯飲みに注いで渡した。飯尾は礼を言い、気を使わなくていいよと、湯飲みに口を付ける。そしてプリンターから、慌しい割りに遅々として出てこない用紙に目を遣り、

「ウチの仕事だね。連中無理言ってない？」

「や、そんなことは」

「図星か、すまんね。いや、ここんこウチからの仕事を立て込んでるだろ」

実のところ、これ以上追加や催促の電話があれば、責任者である飯尾に直訴しようかとまで考えていた。だが、今は他に仕事の受け手がいないことも、その理由も知っている。

「連中、前の有る奴が多いですからね。ここんこ、軒並み雲隠れですよ」

この急な訪問は単なる御機嫌取りではなく、現状視察を兼ねているらしい。

「君が動ける分ウチは助かるんだが。そっちの方は、問題無いの」
小澤は先程空けたグラスに麦茶を注ぎ直し、一口啜ると飯尾の対面に腰を下ろした。

「どじを踏んだ覚えはありませんが、自覚が無いだけで、すぐ傍まで手が回っているんじゃないかってのは、始終考えてますよ」

その答えに、飯尾は苦みばしった顔に笑みを浮かべた。

「流石だねえ不良探偵。君は堅いからな」

ホントに堅実なら、こんな商売してませんで。

苦笑とともにその言葉を飲み込み、

「やめてくださいよその呼び方、つうか不良以前に探偵じゃないですから僕」

どこの協会にも所属していないし、公安委員会に届出でも出していない。そもそも開業すらしていない。だからこそ飯尾あたりは不良と呼ぶのだが、小澤は探偵と名乗ったことは一度もない。その手の仕事でどうしても自己紹介が必要な時は、単に情報屋と言っている。不良は認めるのかと問う飯尾に、まあ已む無しでしょうなどと答え、

「にしても、この街で暴追キャンペーンって 何の冗談かっと思
いますよ」

ここ数年、反社会的組織 暴力団排斥の機運が全国的に高まっている。

外国勢力の流入、組織間の抗争激化、重武装化、凶暴化。夜の繁華街での銃撃戦。白昼、住宅街での発砲事件。その果てに、無関係の市民が命を奪われる。

それだけではない。

薬物汚染の拡大は言うに及ばず、窃盗、強殺《強盗殺人》などの直接的暴力的犯罪、そして「振り込め」「フィッシング」から不動産の取引に至る各種詐欺行為にまで構成員個人ではなく、暴力団が組織的に関与する事件が見られる様に 否、目立つ様になった。

マスコミは黙ってはいない。

報道各社は各々他社を出し抜こうとセンセーショナルな報道を繰り返す。様々な分野の有識者が、画面に紙面にと憤り、憂う。そうして民意に火が点いた。

用心棒代やみかじめ料の徴収は暴力団の資金源として最も古くからあるものだが、そういつた不当搾取に延々耐え忍んできた者達も、怨嗟の声を上げた。行政の対応の遅れはそのまま政治、政権への不満となる。マスコミはやはり黙ってはいない。かくして、民間の後塵を浴びる形ではあったが、国家公安委員会と各都道府県の公安委員会が指定するところの暴力追放運動推進センターが組織される事となった。その組織が推進する運動が暴追キャンペーン。

「まあ、それだけこれも、他所からの人が多くなっただけなことさね。だが実際、冗談よりも性質たぢが悪いよ。当の筋者はほとんど野放し。狩られてるのは」

言葉を切り、飯尾は鼻を鳴らした。

「最近ちよくちよく話題になってて解かり易いですし。こないだも逮捕されてニュースになってましたからね」

暴力団員による不当な行為の防止等に関する法律　暴力団対策法。そしてそれに続き制定、施行されたのが暴力団の資金源を断つ策の一つ、探偵業法。それは小澤の様な裏社会と繋がり調査業を営む者を摘発するための法。今この街で狩りの対象になっているのは、悪徳や不良の二文字を冠する調査業者。

「腕と運の無い奴から落ちて行くつてのはどこでも何でも同じだがね、それでも馬鹿な話だよ。県議の鳥海、市議の南なんかも筋者抱えてやがるし、県警なんざア上から下まで連中とべったり癒着しきつてるつてえのに」

そんな連中がマスコミに煽られ、民意に圧されての暴追など片腹痛い。精々末端の枝葉を刈るばかりで、結局は形だけだ。

「君の周りは、本当に大丈夫なのか」

「大丈夫　とも言い切れませんが、僕は暴力団に使われてる訳じゃないですからね」

探る視線の飯尾は、その言葉に思わず喉を鳴らして笑った。小柄で童顔　時には十代の小僧にも見誤られるその男は、眼だけが異様に老けている。齢を重ねた野良猫を思わせる老獺な瞳。

「そりゃそうだ。ウチは任侠極道なんぞとほざいてる連中とは違う。気を付けろつてえのも言わずもがなだしな。それより」

刷り上った報告書の束を掴み上げ、飯尾はシャツの胸ポケットから煙草を出すと、一本啜えて火を点けた。

「相変わらず独りでやってるんだな」

「え、いやまあ」

「いやまあじゃなくて、そろそろ助手なり相棒なりを持ちなさいよ。この仕事、独りじゃあ敵しいって」

「いや、そう言われましても」

「だからこんなな仕事に溜まるんだ。さっきも言ったけどさ、顔色悪いよ。て言うか、やつれてるじゃない」

なんなら使えそうな若いの遣すけどと、飯尾は笑った。

「や、お心遣い痛み入ますが、独りの方が気楽なもんで。いやいや

ホントに

そんなにやつれてるか？

鏡に映る己が顔を繁々と眺める。洗面台、歯磨きの飛沫に曇った鏡面には、冴えない小男がいつも通りの間抜け面で映っているだけ。小澤は鼻を鳴らし、それでも鏡像へのアプローチを様々な角度で試みた。元々血色の悪い質なので、自分では判然としない。だが、言われてみれば顎が尖った感じがする。頬がこけた様な気もする。

飯尾が帰った後　この仕事が一段落ついたら何か美味しいもの食に行こう、奢るよ。などと調子の良いことを言っていたが、仕事の期限の猶予はくれなかった　小澤は何となく気になり、鏡を覗いた。だが、釈然としない気分に分かれただけだった。

夏バテかもしれない。無論、過労もその一因だろう。だが食欲はある。飯尾に馳走になる前に、少し奮発して栄養を付けようかなどと考える。それで少し気が紛れたが、完全に晴れはしなかった。

一月程前、狐だか幽霊だかに遭ったあの夜から、どうにも妙な具合になっていく。ふと気付くと、誰かに視られている様な気がして気持ちが悪い　などとは断じて認めたくない。認めたくはないが、一度気にするとどうにもいけない。

がりがりと頭を掻き、ばしゃばしゃと顔を洗う。外では、蝉時雨がわしゃわしゃと忙しない。

さあ、仕事しよ。

調子が良からうが悪からうが、期限は待ってくれない。タオルで顔を拭い、鏡を見ないようにしながら、小澤は洗面所を出た。

世に「悪徳探偵」「不良探偵」と呼ばれる者達がいる。ただの「

探偵」ではなく悪徳不良と冠するからには、お世辞にも褒められたものではない。だが、それ以前に「探偵」とは本来如何様なものと問われる向きも少なからず在るだろう。

俗に探偵と謂うと、数多の犠牲者を踏み台に、滔滔と推理を開陳して難事件を華麗に解決したり、一撃でも喰らえば死ぬか、そうでなくとも重大な後遺症を残しそうな暴力の嵐に度々遭遇しながらも人間離れたタフネスで事件の核心に無理やり迫る等、想像上の産物を思い浮かべられる事が多い。

実際の探偵とは、そんなものではない。

興信所の職員（厳密には興信所と探偵社は異なるが、現在その境界は曖昧であるため、ここでは類義ではなく同義とする。いささか乱暴な観は否めないが、御勘弁願いたい）や、保険の調査員を思い浮かべて戴きたい。

彼等彼女等の業務の基本は、足を使つての聞き取り、身边調査に尽きると言つてよい。

法人なり個人なりの依頼に応じ、仕事上の契約や婚姻関係を結ぶにあつての対象の経済状況、素行、交友、背後関係等を調べ上げる。所謂、信用調査、人事、身元調査。浮気、不倫調査も、それに連なる離婚裁判の証拠集めもこの範疇。家出人等行方調査にしても、その個人の情報が無ければ足取りは掴めない。足取りを追う過程で情報を得ることもままあるが、詰まるところは同じ。住所、携帯電話番号の調査、盗聴器調査等も、身边調査の過程で得たノウハウを活かしたものだ。

保険会社の調査員の場合は 損害、災害、傷害、生命、雇用、健康等、様々なカテゴリはあるものの、行うことは基本的に変わらない。調査対象者が嘘を吐いているか否か、その見極めである。原因調査と詳細確認、突き詰めれば、やはり対象の身边調査である。彼等彼女等の殆どは（若干の例外はあるにしろ）難解な推理や暴力禍とは無縁であり、只ひたすらに足で情報を稼ぐ。

警察の捜査官を思い浮かべて戴いてもいい。関西方面の古い隠語

では、刑事またはその捜査を探偵と呼ぶ。

交番勤務の平巡査は無論の事、刑事課の捜査員達にしても容疑者の現場不在を崩すべく交通機関の時刻表とニラメッコをしたりはしない。密室トリックの如きまだるっこしい事にも、まず、係わり合ったりしない。

場合によつては拳銃の携帯を義務付けられる彼等彼女等は、多少なりとも暴力に出くわす局面が在る。しかし、やはり殆どの場合、推理とは無縁だ。

状況証拠、物的証拠の丹念な収集により、数多の可能性を消去し、事実を炙り出す。

これが探偵の本来在るべき姿。

しかしそれが悪徳、不良の二文字を冠すると、全く話が違ってくる。

費用のぼつたくりは当然のこと、調査をせずに報酬を詐取する。調査内容を逆手に取つて依頼主を脅迫もする。調査したとしても、その手段の非道無法は言うに及ばず、調査結果の不正利用、果ては証拠の捏造等も平気で行う輩である。

そして、その手広い業務は昨今世間を騒がせる事が多い。強請集りを基本に、示談、縁組、破談に離婚わかれさせ。そして復讐。それぞれの単語の尻に「屋」を付けてみて戴きたい。それらが引き起こす事態が殺人事件にまで発展し、新聞や報道番組で取沙汰されることも少なくないとお気付き戴けるだろう。者によつては 場合によつては、姦計と策謀で対象を破滅と絶望に追い落とす。それが悪徳、不良探偵。

これらの事から容易に察せられるが、その背後には多くの場合において、反社会的組織 暴力団の影がある。

二〇〇六年 探偵業法が制定され翌年六月から施行された。これにより探偵業を営む者は、各都道府県公安委員会への届出を義務付けられた。無届で探偵業 聞き込み、尾行、張り込み等調査活動を行えば、それ即ち違法であり、逮捕されることもある。また、

現役は言うに及ばず、過去五年未満に暴力団構成員であった者の探偵就業も禁止している。悪徳探偵社と、それを資金源とする暴力団への対策として制定された法だ。取得した個人情報悪用する調査員は、それこそ公私を問わず調査業の始まりから居た。そういった輩とヤクザが結託することも、古くからあった。昨今ではそれが暴力団の凌ぎの一つになっているのだ。元々恐喝、闇金融等の非合法経済活動を行ってきた組織にとって、探偵業の悪用は馴染みの好いものだった。

そもそもが遅きに失した法制定化。それが施行された現在でも悪徳探偵社は消えるどころか、活発に活動を続けている。携帯電話でもパソコンでも、インターネットに繋ぎ簡単な単語で検索をかければ、たちどころに裏社会への窓が開く。掲示板に書き込み、メールアドレスを送れば、いとも容易く扉が開く。その容易さ故に、利用者はそれが非合法であると、ろくに認識出来ないまま墮ちる。

世に「悪徳探偵」「不良探偵」と呼ばれる者達がいる。黄昏時に飛ぶ蝙蝠の様に、ひらひらと世間の昼と夜を往き来し、脆く迂闊な獲物を捕食する者達。

印刷済みの用紙の束を整理し、大判の角封筒へ振り分けながら、入力したデータを整理し、別の報告書を纏める。キーを打ち、推敲し、またキーを打つ。校閲し、キーを打ち、出力された用紙をまた校閲。時に画像のトリミング。印刷用紙を差し替え、出力。

真面目に働いてるよなあ、俺。

皮肉。こんな時はよく発作的に笑いが噴き出しそうになる。瞬間頭の中で何かが弾けて真っ白になる。卓袱台をひっくり返し、本気でパソコンを窓から投げ出したくなる。

いや、しないけどさ。

普段は普段で何気に死にたくなる。誰かが傍に居る間は安定しているのだが、独りでいると『ただぼんやりとした不安』がいきなり心臓を鷲掴みにして、生きている事そのものを苦痛だと思わせる。

そのくせ 我ながら浅ましい程に まだ当分死にそうにない。
病院へ行けば、精神科だか心療内科だかが片を付けてくれるかも
しれないが、それはそれで面倒臭い。健全とは程遠いところに居な
がら、死にも病にも転ぶことの出来ない。中途半端のろくでなし。

はン、ホントに蝙蝠みたいだ。いやいやそれじゃ、蝙蝠は無
論の事、獣や鳥にまで失礼じゃないか。

か細いアラームが響く。

はっとして辺りを見渡す。プリンターのインク切れ表示が点灯し
ていた。

溜息を一つ。

パソコンに印刷中止の指示を出し、プリンターから印刷途中の紙
を吐き出させ、インクカートリッジを交換。試し刷りをして、途中
だったページから再印刷。ルーティンワークを淡々とこなしている
間に、夏の長い陽も翳りを迎えていた。

腹が減った。そう思った途端、今まで意識していなかった空腹感
が我慢出来ない程強くなった。印刷はまだ終わらない。食材も食料
も底を突いている。買いに行くか、食へに行くか。

外に出てから決めるか。

二つの携帯電話を卓上から取り上げ、ヒップバッグへ入れる。つ
いでに中に入れてあつた財布を取り出し、現金を確かめた。今日の
ところは驚沢出来ない。

ああ、インクカートリッジも買つとかないなあ……

やはり必要経費の請求額を、少し増やさなければならぬ。だが、
それよりも今は食事。

空腹に突き動かされ、玄関へ向かう。編み上げのハーフブーツに
足を突っ込み、紐を締めようと力を込めた途端 ぶつりと、嫌な
音がした。見ると、靴紐が切れていた。

死にたくなかった。

「狐を、見た」

我ながら間抜けな合いの手を入れてしまったことに、小澤は軽い自己嫌悪を覚えた。

「うん、狐」

しかし、斯波涼子はそれを帳消しにしてくれるかの様に、気の抜けた声で肯く。

同じテーブルを囲む涼子の同僚二人は、小澤と涼子に呆れた視線を向けていた。

長直径が一メートルを超える大きなオーバルトレイを肩の高さに掲げ、四人前のランチセットを運んできたウェイターがテーブルの脇で立ち止まる。

「お待たせしました、日替わりランチのお客様」

昼の繁華街を欠伸まじりに歩いてきた小澤は、制服姿のOLに呼び止められた。声の主は斯波涼子。ちょうど同僚二人と昼食に出たところだと言う。連れの二人とも小澤は顔なじみだった。概ね誰にでも会話を合わせることのできる男はそのまま道連れとなり、一緒に昼餉を取ることにした。そして、先の会話になる。昨日の晩、狐を見たと言った涼子は告げた。

「小澤君、前に見たって言ってたでしょ」

いただきますの意思表示で小さく合掌し、涼子は言った。パスタランチの鮭のクリームスパをスプーンを使わず器用にフォークに巻き取り、上品に口へ運ぶ。

「ああ、言ったねえ」

小澤は日替わりランチのチキンソテーにナイフを入れながら、相

槌を打つ。

「あれからは？」

「あれからも何も、今まで忘れてたよ」

「なんだあ」

つまらなさそうな返事。そんな涼子に小澤は内心の興味を気取られない様、さり気なさを装いながら、

「どこで？ やつぱりけづく川沿い？」

隣と斜向かいでは涼子の同僚二人がハンバーグステーキランチとカレーセットの吟味、評価に入っている。涼子を独占するのは座をしらけさせるかとも考えたが、やはり気になる。小澤の問いに涼子は、そうそうと肯いた。

「それ以外に、何か見た？」

”女”の姿が脳裡に浮かぶ。

「んん、どうということ？」

涼子は顔をあげ、目を丸くした。

もう二十代も半ばに入っているはずの斯波涼子だが、どうにも年齢不詳だ。小柄な事もあるが、兎に角若作りで、こうして会社の女子社員制服の姿を目の前にしても、中学生くらいにしか見えない。加えておっとりした性格で、一之瀬葉菜にはよくオモチャにされている。ただ、童顔で年齢不詳な点では小澤もあまり他人の事を言えないのだが。

それはさておき

様子から察するに、涼子は何の怪異も体験していない。ただ、自分と同じ場所で狐を見ただけらしい。ならば、今この場で不快な話題を持ち出しては

「あ、小澤君幽霊見たんだよね？」

涼子のその一言で、同席二人の視線も一斉に小澤に向けられた。

「……もしかし……なくても、葉菜から聞いたんだよね」

「うん、凄く縮み上がったって」

涼子は無邪気な笑顔で言い放つ。涼子の同僚達は無表情なまま、

瞳で笑っていた。羞恥と怒りで、一瞬頭が真っ白になる。

「ねえ、幽霊ってどんなんだった？」

「いやいやいやいや、ちょっと待ってくださいよホント。幽霊なんている訳ないっしょ？ 斯波さんだって何も見なかったんでしょ」

「うん、見なかったねえ」

涼子は残念そうに言い、パスタを巻く。

「見て気持ち良いもんじゃないよ。いや、見たとしたら、の話ね」
おどけた口調で言いながら、鶏の胸肉をフォークで突付く。さらに話を逸らすべく、

「それよりそのナンちよつと頂戴。ポテトフライとトレード」

などと隣のカレーセットの娘に話を振る。

「えー、どうしようかなーっ」

まんざらでもない返答。それから二つ三つと話題の誘導を重ね、幽霊話は立ち消えになった。ただ食事の間中、小澤は頭の片隅で、鬼魅の悪い視線をずっと意識していた。

その夜

時に戻った小澤は卓袱台の上に両脚を投げ出す格好で寝転がり、しばらく放心した様に宙を見詰めていた。

昼食後、涼子達と別れてから携帯電話のウェブ検索で昨日の月齢を調べた。

月齢14.5 (大潮)

ほぼ真円に近い衛星の図が画面に映し出された。あの日からほぼ一月の時間が過ぎていたのだと、この時あらためて思った。

これは何かの符合なのか。

心のどこかで、そう思っている自分がある。だが、今の所それは符合足り得ない。単に自分が狐を目撃した時と、涼子が目撃した時が満月期だっただけの話。彼我の間には、約一月の時間が横たわっている。その間にも狐は出現し、誰かに目撃されていたのかも知れ

ない。自分を含むその周辺の人間が、それを知らないだけ、否、知人の中にも目撃者がいる可能性すらあるのだ。自分の耳にその話が届いていないだけで。

パソコンを起動し、ブラウザを開いて検索エンジンサイトに繋ぐ。狐憑きと入力し、クリック。画面は一瞬のホワイトアウト。

狐憑きの検索結果 約78・000件

この時代でも、あるんだなあ。

検索結果の一番上に出たフリー百科辞典の項目を試しに開いて見て、すぐに閉じた。精神の錯乱、信仰、迷信、予想通りの言葉が並んでいるだけで、内容は薄い。検索画面をスクロールしてみても、取り立てて興味を引く項目は無かった。

狐憑きというのは現代都市伝説の中でも偶に聞く。小澤はこの類の話は好きではないが、それでも耳に入る程だ。

続いて、「狐 化かす」のキーワードを打ち込み、検索ボタンをクリックしようとして、ブラウザを閉じた。馬鹿らしい。狐憑き以上に間抜けで馬鹿らしい。

では、幽霊はどうだ。

昼の斯波涼子との会話 彼女は狐以外には特に妙なものは目にしていないらしい。仮にあの”女”の姿を見ていれば、ああまで暢気にしていられなかったはずだ。

それとも、俺が臆病過ぎんのか？

羞恥と怒りで口がへの字に歪む。

何が凄く縮み上がったのだ！

涼子の口からそれを聞かされた時、小澤は、何故昨日の内に死んでしまわなかったのかと激しく後悔した。

葉菜は嘲る顔で茶飲み話のネタにしたに違いない。確かにあの時、陰囊は硬く萎縮し、睾丸は二つとも体内に潜り込んでしまっていた。陰茎は言うに及ばずだ。しかしその時、話を聞いて竦み上がった女に陰口を叩かれる謂れはない。

一之瀬葉菜という女は、心霊やオカルトの類が好きで、しかも怖

がりだ。

小澤逸郎は心霊やオカルトの類が嫌いだ。根が臆病なのだと自覚もしている。臆病だから、幽霊を見たのではなく、狐に化かされたと思いたかった。何となく、その方が怖くないと感じたから。

いや待て、そう言えば。

斯波涼子は幽霊を見ていない。狐しか見ていないのだ。つまり、狐だけは実在する。

再びブラウザを開き、今度は「狐」の単語のみで検索をかけた。

まず気付いたのは、動物として扱う場合は「キツネ」。諺や伝承として扱われる場合は「狐」。勿論例外は多々あるが、概ねそう区分けされている。

そうか日本猿って表記は見ないもんな。

昔話や諺では単に「猿」。それは古来、この国に猿は「ニホンザル」しかいなかったから。厳密には亜種も存在するが、素人目にその区別は難しい。

それではキツネは

日本に居るのはアカギツネ。それが北海道のキタキツネと、青森以南のホンドギツネに分けられ、実はホンドギツネはアカギツネから派生した新種の可能性がある。等。それは兎も角、ネット上に掲載された各種の画像から判断して、自分が目撃したのは確かにキツネであり、イヌの見間違えではないと小澤は判断した。尖った大きな耳と、口周りから喉、腹にかけての白い毛。

あのキツネは野生だろうか。分布図を見ると、キツネは日本中に広く生息していることになっている。だが、ここは山野に囲まれた田舎町ながら、今までキツネを見たと言っ話を聞かない。キツネのペットと言うのもあまり聞かない話だが、どうやら（特殊ではあるが）ペットショップで入手も可能らしい。どこかで飼われていたものが逃げ出したか、放たれたか。その可能性はあるだろう。

念のため、動物関係とタウン情報系の掲示板も調べてみた。ネット時代の今、どんな田舎でも人里にキツネが出没していれば、やは

り自分と斯波涼子以外にも目撃者がいて、何か情報があってもおかしくないと考えた。だが、現在のところそれらしい書き込みは見当たらない。

ちよつと待て。俺は何を、何のために調べてるんだ？

ふと気付くと、パソコンを起動してから随分な時間が経っている。食い入る様にモニターを見詰め、キーを打っている。

溜息が漏れた。

翌朝

小澤は件の川沿いの道、キツネの目撃現場へ向った。目的はキツネの实在確認。

暇だった。仕事が一段落してしまうと、何とも手持ち無沙汰になってしまった。しばらくのんびりしようと思っていたのだが、いざのんびりすると 何もしないでいると、思考がマイナス方面へ急落する。

死にたくて死にたくて堪らなくなる。

それを煩わしいと、客観視はまだできる。だから だから取敢えず、キツネを探してみることにした。幽霊は気になるが怖いので手を付ける気になれない。实在を確認したいと言っても、夜行性のキツネ（生態についてもそれなりに調べた）が昼日中から人里をうるついているとは思っていない。だが、見ておきたい場所があった。住宅地の只中に在る笹藪。

幼い頃、よくここで遊んだ。有刺鉄線で柵をされているが、昔と変わらず、いや、老朽化の進行で昔よりもさらに進入防止の役に立っていない。

途中のコンビニエンスストアで購入した虫除けスプレーを身体中に振り掛け、密生する細い笹竹を掻き分けて奥へ進む。徐々に上りの傾斜になってゆく。植生も直径が一〇センチを超える孟宗竹へと代わっている。

そこは笹ヶ丘と呼ばれる、箕都竹山へ続く丘陵地帯。

息が切れる。暑さのせいもあるだろうが、消耗が早い。硬い落ち

葉で足が滑り、体力が無駄に削がれてゆく。子供の頃は同じこの場所を、延々何時間も駆け回っていたと言うのに。年だとは思いたくない。だが、運動不足は認めなければならぬだろう。

ああ、ガキの活力つてのは何を源にしてんだろうなあ……

したたる汗を拭い進んで行くうちに、記憶の中に触れるものがあった。それが何か思い出そうとしたが、曖昧で雑然としたものに埋もれ込み、上手く行かない。

ま、関係ないか。

記憶の復元を早々に諦め、竹林をしばらく進む。青緑の檻と黄色い床の狭間に、素朴な丸木を組んだだけの鳥居が見えた。そして、あまり大きくはない塊り。一見ただの岩かとも思えるそれは、荒い石造りの祠。

正面には一対の小さな　やはり、石造りの狐、阿吽。狛犬ならぬ狛狐。荒削りで素朴だが、何とも愛らしい。

しゃがんで合掌。小さく拍手を打つ。御無沙汰の挨拶のつもり。何故この場所を訪れたかと言えば、おそらく単純な連想だったのだろう。キツネ⇨御稻荷様と。だがこうして拝んでみると、必ずしもそれだけでは無かったらしいと気付く。

これ以上、怖い目に遭いませんように。

人気ひとけの無い竹林の中とは言え、やはり日中ではキツネとの遭遇など考え難い。それが解かっついてここまで来た理由は、勿論郷愁に誘われたからでもない。所謂超常現象が怖いのなら、神頼みは有効かもしれないと殆ど無意識に思っていた様だ。

油揚げでも持って来るべきだったかな。

そんなことを考えながら立ち上がった時、かつての遊び場のもう一つの顔を思い出した。すぐ近くに戦時中の防空壕と謂われる、小さく狭い横穴が在った。実際にそれが防空壕だったのかは解らないが、兎に角、そう呼ばれていた。

キツネは穴に住む。

昨晚仕入れた知識ではそうだった。もしかして自分は無意識にそ

のことに思い至り、それでここへ来たのではないだろうか。そんな都合の良い解釈まで浮かび上がってきた。

記憶を辿り、鳥居と祠の左手の斜面に廻る。一帯はなだらかな丘陵だが、そちらにはやや急な傾斜と、抉れた様なオーバールンクが出来ている。そこに、横穴の入り口が在ったはず だった。

無い。場所は間違っていないはずなので、どうやら埋もれてしまっただけらしい。

思い起こせば、数年前に子供が昔の地下壕で遊んでいて事故死したという事件があった。その際、各地の自治体が地下壕跡を調べ、塞ぐことになったともニュースで流れていた。これも、その結果なのかも知れない。

つまらない世の中になったね、どうも。

命を落とした少年達には悪いが、やはり思い出のある場所が消えるのは寂しいし、今の子供達の遊び場が無くなる事も面白くない。その内、同じ様な理由で公園からは一切の遊具が消えてしまうのではないだろうか。老朽化等、メンテナンスに不備があった件を除けば、遊具による事故は大半が誤使用によるものだ。故意に危険な使い方や落とした場合もあれば、その行為が危険に繋がるかの認識が全く欠落していた場合もある。どこまでが安全で、どこからが危険か。子供は遊びを通じてそれを理屈よりも先に体で学ぶ。そもそも好奇心の旺盛な子供は危険を好むものだ。過保護な安全の中で育つと、危機回避の勘は発達しない。ブランコも、シーソーも、滑り台も、砂場も、ジャングルジムも、雲梯も、のぼり棒も、使い方によっては危険な物なのだ。

屋外で遊ぶ子供が少なくなったとも言いが、屋外で遊ばなくなつた事も大きな理由だと小澤は思う。携帯型も含む家庭用ゲーム機の普及も理由の一つではあるだろうが、それ以上に安全の名の下に屋外の遊び場が少なくなっている。

昔、小澤と友人達のお気に入りだった「探検隊ごっこ」は今、その大半が禁じられた行為となっている。尤も、この街の自治体に危

険行為と見做された原因の内の幾つかには、当時の小澤自身が直接関わってもしるのだが。

おうツと、こんなところでノスタルジーに憤っていても仕方ないな。

穴が無い以上はここに居ても仕方が無い。

斜面を登る。折角来たのだから祠を一周してみたくなった。心のどこかに、これで見納めとの思いもあった。本当なら、ここはもう二度と訪れるはずの無い場所だったのだ。

傾斜を登り切り、祠の裏手に立つ。その時身体がぐらりと傾いだ。足元をすくわれる様な、不安定な不快感。

眩暈か？いよいよ運動不足が祟ったな。

いざという時の逃げ足が鈍ってしまっただけ、それこそ命に関わる。久しぶりにジヨギングでもしようかと考えていると、今度は本格的に倒れそうになった。足の踏ん張りが利かない。と言うより、本当に地の底に吸い込まれる様な感じがした。

ツツ……

何だ、今度は耳鳴りか？

一瞬そう思った。だが、すぐに違うと気が付いた。これは耳鳴りではなく、地鳴りだ。

「！？」

まともに悲鳴を上げる暇も無く、文字通り地の底に吸い込まれた。

「ツツ……」

呻きを洩らしながら上体を起す。実際には痛いと言う程の事は無かった。落下距離も二三メートルはあるだろうが、地面には落葉が厚く積もっていたし、崩れた土も硬くはない。ただ無防備な状態で落ちたので、内臓や脳が衝撃で揺れた。

落下距離……落ちた。

地面が陥没したのだ。どうやら横穴の天井が抜けたらしい。真上に立っていた小澤は当然一緒に落ちた。状況からみて、埋まらな

っただけ運が良かったのだろう。

「成る程こりや危険だ……じゃなくて、塞ぐんなら奥までちゃんと埋めるよ！」

クソッ、どこぞの役所か警察か知らんが、イタ電でもしてやるか？

腹立ち紛れにそんな事を考えながら立ち上がり、どこか上れそうな所はと探す。そして、嫌な可能性に思い至った。

まさか一人じゃ上れないなんてことは。

上を見る。まずは幅二メートル程の穴の縁。そして覆い被さる様に林立する竹の向こう、僅かながら蒼穹が覗いている。真夏の晴天でこれから昼になるうと言つ時間なのに、暗い。しよわしよわと蝉の鳴き声が、妙に遠くに聞こえる。

ヒップバッグから携帯電話を取り出す。嫌がらせの電話をするつもりが、助けを請うことになりそうだ。溜息を吐き画面を見て、右上に浮かぶアイコン 電波状態表示を目にして心が凍った。

圏外

独力で脱出できず、救助も望めなければ、じわじわと、誰にも知られずここで死ぬ。

て、やめやめ、マジで死にたくなっちまう。大体まだ何も解かっちゃいねえ。

携帯電話のモードを切り替え、スポットライトを点ける。ちよつとした懐中電灯ではあるのだが、夜中に鍵穴を探ったり、暗い部屋で手元を照らす程度のものでしかない。探検のアイテムとしては論外だ。つまり、現在の状況では無いよりマシ程度。

そういや、奥はどうなってんだ？

ふと気になり、そちらに淡い光芒を向ける。元々それ程深くはなかつたので、位置的にはすぐ突き当たりのはず

そこまで考えた時、黄ばんだ薄明かりが何かを照らし、そこに視線は吸い寄せられ、思考は中断された。数歩歩いて跪き、天井の低い狭い空間ににじり寄る。妙な胸騒ぎがする。それはどこか逸る様

な気持ちに近い。スポットライトを当て、顔を間近に寄せて眼を凝らす。そして、息を呑んだ。

それは、長い髪の狭間から首を傾げる様にして虚ろな虚^{うつろ}でこちらを見る、髑髏^{むくろ}。

枝葉 1

枝葉 1

「いったい何をしていた!？」

携帯電話と口元を手で覆い、押し殺した声で男は訊ねた。怒鳴り声　　と言つより、それは悲痛な悲鳴の様に聞こえる。

「おまえ達に高い金を払っているのは、こんな事態を巻き起こすためではないんだぞ」

空調の効いた室内に居るのに、満面に浮かんだ汗で眼鏡が鼻梁からずり落ちる。神経質な仕種でそれを直しながら、レシーバーから聞こえる声を、男は早口に捲し立てて遮る。それでも、相手の言い分に耳を貸そうとしたその時、

「ああああああああアアッ!」

長い板張りの廊下の先、角を折れた向こう側から罵声とも悲鳴ともつかぬ叫びが響いた。弾かれた様に顔を上げ、そちらに目を向ける。どすどすと鈍い音、陶器がガラスの割れる音、そして複数人の荒ぶる声。男はすぐに騒音の元凶を理解した。

くそッ、よりによってこんな時に……

否。こんな時だからこそなのだろうと、汗でスーツの腋に大きな染みを作りながら、男は溜息を吐いた。

「また掛け直す。それまでに精々今後の方針を練っておけ」

一方的に告げて通話を切ると、男は早足で騒音の元へと向かった。廊下の角の向こうから、若い男が一人慌てた様子で駆けて来て、男の顔を見ると安堵と非難の入交じった声をかけてくる。

「田村さん、今まで何を」

「マスコミ対策と予定変更の通達だ。遊んでいたとでも思うか」

男は手にした携帯電話を振り、より高圧な態度を取ることで若い

男の舌鋒をかわした。ひるむ相手に鼻を鳴らし、顎で方向を示す。

「もう、治まったのか？」

「ええ、何とか」

忌々しげに言う若い男の腕や頬は、ぶつけたのか擦ったのか、赤くなっていた。髪もくしゃくしゃに乱れている。

「いつその事、ふん縛って炭鉱跡にでも放り込んだ方がいいんじゃないですかね」

「おい、滅多な事を言うんじゃない」

「ですが……ありゃあ、誰にとつても爆弾ですよ！このままじゃ」

「馬鹿！いい加減にしろ」

田村と呼ばれた男は顔を真っ赤にし、半ば裏返った怒声を上げた。その剣幕に気圧され、若い男は失礼しましたと、口籠る様に呟く。

「私の方から辰野さんへ連絡しておくが、今はこの騒ぎだ。迂闊に動けん。迎えが来るまで時間は掛かるだろうが、なんとかおとなしくさせておけ」

言われた若い男は、舌打ちしそうな程の不満を顔に浮かべたが、

「はい。それより先生が呼びですよ」

「ああ、すぐに行くとも」

男はスーツの襟を正すと再び歩き出した。その後ろを、重い足取りで若い男が続く。

ふと、窓に目を向け、カーテンの隙間から外の闇を覗く。高い庭木の梢の向こう、夜空が、やや赤く染まっている様に見えた。

「妙な事になりましたね……」

背後の若い男が、萎れた声で独り言の様に呟く。

「ああ、長い夜になりそうだ」

返事の形にはなっていたが、男のそれもまた、独り言の様な呟きだった。

「クソッ！」

通話を切られた携帯電話を睨み、その男は罵り、舌打ちをした。痩せて背の高い若い男。バンの運転席に座っていたその男は、衝動的にハンドルを殴り付けた。

「あああ、何でこんな事なっちまうかねえ」

傍ら、助手席で身体を丸める様に座っている、頭髪を金色に染めた小柄な女が気だるげに言う。

「知るか！見失ったのは確かに俺達のミスだ。だが、この事態はクライアントの情報不足が原因だろう」

「そりゃそうだ。よもやあたし達も、ホントに……たあ思ってたなかったもんねえ」

女の声にはどこか茶化す様な響きが有り、それが尚更男の怒りを煽る。

「……クソツ、おい、奴の動きは？」

バンの後部、積み込んだ機材に埋もれる様にして座り込んだ小太りの男が顔を上げ、答える。

「あれつきり。今日はもう動かないだろ」

ふてぶてしくも、僅かに怯えを滲ませた声。

「勝手に決め付けるな、この間抜け」

運転席の男は、コーヒーの空き缶を後ろの男に投げ付けた。女はそれを鼻で嗤い、

「さあて、これからどうしたもんかねえ」

二章 1

二章 1

からからと、軽く乾いた音の鳴る格子戸を開け、暖簾をくぐる。午後を廻った店内は空いていた。

「おう、らっしえい」

蕎麦屋「藪金」の店主は、馴染み客向けのぞんざいな挨拶をよこす。

「おっちゃん暑いよ。冷やしたぬきうどん」

小澤逸郎は気急げにそう言っつて、カウンターの一番左側の席に崩れる様に座り込んだ。そこは殆ど指定席になっている。

「なんでえ、夏バテか」

ぐらぐらと湯の沸く寸胴に麺を落とし、店主は独特の寂の効いた声で唸る様に言った。

背は低いが筋骨逞しい老人。藪金店主を簡単に言い表すとそうなる。歳はもう八十に近いとか越えたとか言われているが、全体からくる印象では精々五十、多めに見積もっても六十代くらいにしか見えない。

小澤はうなだれ、出された冷たいおしぼりで顔を拭きながら、返事の代わりに短く、うつつと唸った。夏バテもあるのだろうか、それ以上に食欲が湧かない。

死体なんて、見るもんじゃないなあ。

ほとんど白骨化していたが、それでも本物は精神に堪える。腐った肉でも付いていようものなら当分の間、麺類すら喉を通らない事になっただろう。

三日前

這々の態で穴を抜け出した小澤は、それでも公道に出る頃には冷静さを取り戻していた。人目に付かない様、慎重に道を下り、自分の部屋まで戻る。汚れた服を着替え、幾つかの小物を携えて再び外へ。向った先は私鉄駅前の電話ボックス。鹿革のクラブをはめ、携帯電話に番号を表示し、テレホンカードを挿入。その相手は、新聞五社それぞれの県本部の社会部。そして、公共と民放の地方テレビ局六社の報道局社会部。

「一度しか言わない。よく聞け」

ボイスチェンジャーを使い、必要最小限の情報を一方的に告げて通話を切る。

まるで犯罪者だが、匿名を徹底して通報するなら仕方ない。見付けてしまった以上、黙っていても気が引ける。が、警察へ直接通報などは御免被りたい。一一〇番などもつての外だ。「飛ばし」の携帯を入手してからとも考えたが、妙に気が急いで時間が惜しかった。読まれるまでの時間が掴めず、無視される可能性も高い「捨てメアド」も使えない。公衆電話なら通話履歴から足がつくこともない。そしてこの街の私鉄駅前の電話ボックスは程好人通りの中に在りながら、どこの監視カメラの撮影範囲にも入っていない。人通りの少ない場所にある公衆電話は、使用中目撃されると記憶されてしまう危険性が高い。

新聞社とテレビ局への電話は全て同じ内容。

『警察への通報は自由。また、これと同じ内容を同業他社にも連絡済み、もしくは予定していて、即時実行する。連絡を取り合い、確認することも自由』

そう告げておけば、単なる悪戯として無視される可能性は減る。ガセネタ当然偽情報と疑われはするだろうが、ライバル社に出し抜かれるより、真偽の確認に人を差し向けた方が賢明だと判断させればよい。

かくして、埋もれた白骨死体は漸く陽の目を見た。

その日の夕刻、民放二局のローカルニュースでそれは流れた。内一局は東京キイ局の夜の報道番組での扱いになった。新聞はと言え

ば、夕刊の第一版には載らなかったが、最終版と翌日の朝刊には、どれも小さくではあったが全紙に載った。

小澤にとつて、その先はどうでもよい事だ。埋まっていた人物が何故埋まっていたか、何故死んだのか、どんな人間だったのか等、知っても仕方ない。ただ何となく可哀想なものだなと、思ってしまう。それだけの事。何より面倒な柵は避けたい。

しがらみ、か。

これであの幽霊おんりやは成仏してくれるだろうか。幽霊など信じるつもりは無かったが、こうなっては仕方が無い。

現状、はつきりしたことはまだ何も解からないが、小澤は、幽霊と死体は同一人物だろうと思っっている。何の因果かは知らないが、見込まれて、死体探しをさせられたのではないかと考えている。だとすれば、これで妙な因果からは解放されたはずだ。後のことは警察に任せたい。先にマスコミが動いた以上、警察も黙ってはいられなくなつたはず。これより先自分に出来ることと言えば、ほとぼりが冷めた頃合を見計らつて線香を手向けに行くくらいだろう。

ああ、御稻荷様にも、油揚げ持つていかないとな。

「冷やしたぬきお待ち」

顔を上げると、硝子の深皿に盛られた冷えたうどんが既に眼前に置かれていた。

「また何か厄介事か」

皺深い顔をくしゃくしゃにして笑う店主の顔をしばらく見詰め、

小澤はゆつくりと口を開いた。

「川沿いのさあ、あれは上風尾かみなざおだっけか、住宅街の一面に笹藪があるでしょ？」

「ああ、白骨死体の出たところか」

「うん、あそこさ、もう何十年もあのままだよ。何で拓いて家建てちまわないんだろうね？土地持つてんのは市かな、県かな？役所がちゃんと管理しないから」

「いやあ、ありゃあ私有地だ」

「……え、あれ保全緑地とかじゃないの？」

袈津^{けづく}狗川を下った海岸　　風浜海岸はその一部を都市緑地法により、海岸特別保全緑地とされている。海岸に限らず、その近辺は市民緑地が少なからず点在し、その旨を記した看板もあちこちに在る。だから、あの開発の波から取り残された様な一画もそうなのだろうと思っていた。

「なんでえ御前、新聞取ってねえのか？ テレビでだってやってるってえのによお」

店主の呆れ顔に、新聞なんてゴミになるだけじゃん、小澤は返した。件の報道に関しては、それが電波として流れ、紙面に載った事は確認していたが、その中身にはあえて目を通していなかった。詳しい事を知るつもりは無かった。

「ほら、山の東側に「とりうみ」って古い料亭があるだろ」

山とは、笹ヶ丘丘陵から続く箕都竹山。その中腹に地元のお偉いさん専用と言われる高級料亭が在る。

「うん、入ったことは無いけど」

当然だなと言って店主はがらがらと笑い、

「あそこ《とりうみ》は元々一帯の大地主様だよ」

小澤はうどんを手繰りながら、ふうんと気の無い合いの手を入れる。

「そう言やあ、あそこの馬鹿ぼんが御前と同じ年じゃなかったか？」

「……ああ、いたねえ、そんな奴。や、向こうが一ツコ上だよ」

「へえ、そうだったかい。それで」

「何、それでって」

「惚けんなよ。あそこで出た死体にでも心当たりがあるんじゃないかねえのかい」

藪金店主は皺に埋もれた細い目で小澤を見据え、片方の口角を上げた。

「知らないよう。そんなの」

ずるずると音を経てうどんを嚙る。薬味の塊りが喉を刺し、咽

た。

強い日差しに白く色褪せた路地を、ふらふらと覚束無い足取りで往く。

なんとか胃に収めたうどんが妙にもたれる。

頭の中を、得体の知れないものが交差する。

狐、幽霊、髑髏。

何だか少し、生臭くなってきたな。

胃にかかる過負荷に、思わず口元をを押さえる。そのまま、背後に感覚を集中し、探る。

やはり、視られている。

その日、部屋を出た時から、いや、それ以前から気配はあった。それまでは漠として掴みよしの無い感覚だったが、ここにきて明確に何かの視線を感じる様になった。それでいて、視軸の元を辿れない。人通りのない、昼下りの路上で、ただ視線だけが追って来る。気持ちが悪い

走り出したい衝動に駆られる。だが、相手が解からないまま闇雲に逃げてはならないと、仕事上の窮地を脱し、何とかここまで生き延びて来た経験がその衝動を抑え込む。逃げられないなら、やはり相手を知らなければならぬ。

くそ、結局柵が出来てやがる。

延々と抜け出せない柵で囲われてしまった感覚に囚われ、小澤は吐き気をもよおした。

部屋に戻り、取るものも取り合えずテレビを点け、パソコンを起動した。中途半端な時間だが、衛星放送なら運良くニュースにぶつかるかも知れない。インターネットなら、時間に囚われることなく、しかも検索をかけることで特定の情報を引き出すことが出来る。

知らなければならぬ。

ノートPCの黒い液晶画面にOSのメーカーロゴが鮮やかに浮か

び上がり、オーナー認証のパスワード入力画面に切換る。テレビでは、数日前に他所の国でおきた大地震の続報が流れている。右手でテレビのリモコンを持ち、左手でPCにパスワードを入力しようとしていた小澤は、その認証画面をしばらく見詰めたまま固まった。

全身が総毛立つ。

弾かれる様に立ち上がり、周囲を見回す。異質な視線が、部屋の中に充滿していた。

「幽霊が、出るう？」

腹にずしりと響く低く重い声が、僅かに裏返った。玄関の扉の縁を優に超える高さから、禿頭の巨漢は問う。

「うん、一人で部屋にいと恐いんだ」

小男は飄々と答える。否、表情、物腰こそ飄々としているが、その顔面は土気色。この男の顔色が普段から優れないことを、巨漢は知っている。今の状態は普通の人間なら即入院に違いない。それに、頭から埃を被ったかの様に薄汚れていて汗臭い。加えて、くたびれた紙袋まで携えている。ハウジングプアかと言いたくなくなった。

いや、形なりよりも、こうまで酷い面してるってことは、流石にこいつでも要入院なんじゃないか？

「取り合えず入れ。ここじゃあ、なんだ」

巨漢 俵藤謹悟たてはりたけふみこは巖の様な身体をゆすり、玄関への道を空けた。小男 小澤逸郎は溜息を吐き、俵藤を見上げた。五〇センチ近い身長差で間近からその顔を見上げると、首にかなりの負担を強いられる。そのまま頭を振ると、頸骨がばきばき乾いた音を経た。

海に面した高台。屋敷、邸宅の居並ぶ閑静な一画に、俵藤のアトリ工兼住居は在る。小澤はその玄関前に立っていた。ありがとうと礼を言い、促されて扉をくぐる。和洋折衷の、かつてはハイソサエティにあつて瀟洒でモダンと評されたであろう、今は陰気で薄暗く広い玄関から、やはり陰気で薄暗く広い廊下を巨大で強靱な背中に従い、進む。

「土居さん居るぞ」

「ウソン？」

「嘘じゃない。締め切りが近いんだ」

「何、締め切りって」

「前に言つたら、個展があるんだよ」

「うっわ、マジ絵描きの先生」

「うるせえ」

長い廊下の壁には、分解され束ねられた木枠やキャンバスロールが無造作に積み重ねられ、立て掛けられている。邸内に充満する空気は黴臭く感じるが、それは木材やキャンバス生地、その他画材の匂いが混ざり合ったものなのだと、以前に小澤は聞かされた。

「そんなことより、おまえホントにどうしたんだ。死人みたいな顔してるぞ」

先を歩いていた俵藤は振り返ると、小澤の顔を見下ろし、その顔を鷲掴みにした。ああ、熱はないなと呟く。小澤はじたばたと腕を振り回してそれを振り解き、

「苦しいよそれで死ぬよ馬鹿。それよりさ、君ン家新聞取ってるッしょ？ここ一週間分程見せて欲しいんだけど」

それは構わんがと言い、俵藤は己が頭をつるりと撫でた。ここ数日はアトリエに籠りつ放しで、新聞は新聞受けから取った後は手付かずのまま居間に積んでいる。

「さつき幽霊がどうか言ってたが、だったらウチは不味いんじゃないか」

「何がぁ」

「忘れたか。ここ、「曰く付き」だぞ」

この一帯は、所謂高級住宅地、御屋敷町である。そしてこの家はその一画に在りながら、長らく住み手が無かった。俵藤はそれを、約一〇〇坪の土地ごと購入した。ちなみに平屋建て離れ付きで延べ床面積は七〇坪。周囲の屋敷、邸宅の中では小さな方だし、田舎なので地価そのものが安かった事もあるのだが。

「君、幾ら稼いでんの？」

初めてこの家を訪れた時、小澤は驚き呆れてそう訊いた。身長二

メートル強、体重一〇〇キロの筋肉の塊りながら、俵藤謹悟は新進気鋭の画家である。東欧で画壇デビューし、ヨーロッパを中心に活動してきた。だが、数年前に日本に帰国してからは徐々に国内での認知度も高まってきている。金持ちではあるのだろう。

「多分、おまえが思ってる程稼いじゃあいない。ここが安かったんだ。格安だ」

不動産屋の話では、十数年前に陰惨な事件の舞台となって以来、ここは周辺では有名な幽霊屋敷となっていたそうだ。小澤がその話を聞かされた時は、恐怖で耳を塞いでしまったものだった。しかし今は

「問題無いよ、何回か泊まったけど、今まで何も出なかったし」
相変わらず、いい加減な奴だ。

そのもの言いに呆れながら、俵藤は小澤の態度に腑に落ちないものを感じた。

「先生、お客様ですか」
廊下に声が響く。声の主は居間から現れた。画商の土居貴子^{どいきこ}。土居は縁なしの眼鏡ごしに、冷たい一瞥を小澤によこした。

「あら小澤さん、いらしてたんですか」

「こりゃどうも、毎度御機嫌麗しゆ」

「土居さん風呂はもう入れましたっけ？」

「はい？」

小澤の挨拶を断ち切る俵藤の言葉に、土居は意表を突かれ戸惑った。しかしそれは挨拶を邪魔された小澤も同じ。

「おい、風呂つて」

「おまえ臭いよ。薄汚ねえし」

「や、それは、ならちよつとシャワー使わせてもらうだけで」

「着替え無いだろ、洗濯してやるからその間、ゆっくり湯に浸かつてろ。何か食いモンも用意しなきゃな」

「俵藤」

「先生」

情報屋と女画商は同時に声を発し、画家の言葉を止めた。俵藤は土居をやりわりと手で制し、小澤を見下ろし、睨む。

「血色悪過ぎだ、おまえ。何があつたかは知らんが、まずは疲れを落とせ」

苦笑を浮かべ、小澤は小さく溜息を吐く。

「じゃあ、その前に片付け事を済ませよう。でないと落ち着かないからな」

そう言つて、持ってきた紙袋に手を突っ込む。アンテナを長く伸ばした携帯電話の様な物を取りだすと、手の中でそれを弄り、そのまま歩き出した。

「念のため御被いさせてもらつよう」

訝しげに見詰める土居をよそに、居間に入ると中を一周し、また廊下へ出る。

「入つちやいけない部屋なんてある？」

背中越しに訊ねる小澤に、後を追う俵藤は、

「特に無い　いや、今土居さんが使つてる客間は」

「問題ありませんよ。私の荷物を物色したりしなければ」

画商の奇立ち混じりの呆れ声を背中に聞きながら、画家は前を行く情報屋の手中の物を覗き込んだ。勝手な真似をするなど文句の一つも言いたいところだが、それよりも興味の方が先に立つ。

「何だよ、それ」

「靈験あらたかな現代の大麻おおぬさ　つて、ちよつと違うか。まあ邪魔なモノが紛れ込んでても、大抵は看破出来るつてえ代物さ」

大抵とはまたいい加減だなと俵藤は素直な感想を漏らした。そもそも邪魔なモノの意味が解からない。

「まあね、技術革新日々是精進でさ、イタチごっこ已む無しなんだよ」

邸内から離れのアトリエまで一通り歩き回つた小澤は、リビングルームに戻ると背後の俵藤を振り返つた。

「君、相変わらずケータイ持たないんだろ？土居さんはこの家の中

で電話　ああ、仕事ですもんね、かかって来る事もあるだろうし……じゃあ魔除けは止めとくか。うん、あのね俵藤君、悪いけどこれからしばらく、電話は子機を使わないで。かける時も、かかって来た時も親機で。面倒だろうけど」

「何だその変な宗教、訳が解からん」

俵藤は溜息まじりに言葉を吐いた。

「そんなもんじゃないよ」

小澤は暗い眼で、ぽつりと返す。

「悪いとおっしゃるなら、まず、巻き込まないでいただきたいものです」

女の平坦な声が、刺す様に響いた。

土居貴子は東京の大手画廊に籍を置く絵画商で、俵藤のマナージメントやサポートを担当している。俵藤謹悟は絵画界において、世界的に評価を得ている一方、日本画壇においてはどこの派閥にも属さない、ぽつと出の駆け出しに過ぎない。

俵藤の友人である小澤逸郎という人物が、何か後ろ暗い仕事に手を染めていることは以前から気付いていた。そして、俵藤が何度となく危険に巻き込まれているらしいことも。今は大切な時期だ。友達面で、人の好き画家の善意に付け込むチンピラに、これ以上関わらせてはならない。

「いやあ、大変申し訳」

土居の言葉に応えようとした途端、小澤は鼻柱に衝撃を受け、視界を閉ざされた。顔面全体が覆われて、ぎりぎりとは圧迫される。

「土居さん、ご覧の通りこいつは馬鹿で、特に今は普通じゃない。ですがまあ、ちょっと休めば、なけなしの理性だって戻るでしょう。大丈夫、俺はスケジュールに支障を来たす様な事は絶対にしません。こいつにもさせません。勘弁してやってください」

俵藤は小澤の顔を鷲掴みにしたまま、深く頭を下げた。顔を握られ吊り下げられた方は手足をばたつかせてもがいたが、無駄な抵抗でしかなかった。

女画商は一瞬青ざめ、次いで赤面した。しばらく口を開け言葉を探していた様だが、そのまま何も言わず、ただ肩をすくめる。

一拍おき、頬を赤らめたまま微笑む。

「お顔を上げてください。私こそ、口が過ぎました。申し訳ありません」

気が遠のきそうな痛みと苦しみの中で、小澤は土居の意外と艶のある声を耳にした。

「ああ、風呂があんなに気持ち良いなんて忘れてたねえ」

缶ビールを呷り、上気した顔で言い放つ。

ふんと鼻を鳴らし、俵藤は眼前に広がるキャンバスから背後のソファーに目を向けた。それは、本来画業の合い間に俵藤が休憩を取るためのものだが、今は小男が踏ん返り返って、湯上りのビールをかつ喰らっている。

「やっぱ広い風呂は良いねえ。時々使わせてもらおうかなあ」

「おまえ何をお気楽な事言ってるんだ」

邸の離れを改装したアトリエ。F-100号のキャンバスを前に、俵藤は仏頂面で床に胡坐を掻き、小澤は巨漢用の椅子に、玉座の王様よろしく身体を埋めている。

「大体おまえ何しに来たんだよ。幽霊が怖いんじゃないのかよ」
「んん、怖いよおつ。凄く怖い」

小澤のどこか多幸症じみた返事に、俵藤は太い指で摘んでいた素描用の木炭を、思わず砕きそうになった。

「それで、これからどうするつもりだよ」

無然とした顔で問う俵藤に、小澤はそうだねえと生返事をし、立ち上がって鼻歌まじりに庭に面する窓に歩み寄り、それを開けた。

「暑ちー、もう面倒臭い事させんよね」

聞こえたのは、低く抑えた不機嫌そうな女の声。驚いた俵藤は体を起こし、庭に目を向けた。外は既に闇に覆われていて、部屋の明かりが庭の一面を四角く切り取る様に照らしている。そこに浮かび上がったのは、黒衣に身を包んだ一之瀬葉菜の姿だった。

「何だ、おまえが呼んだのか」

俵藤が小澤に尋ねる間に、葉菜は肩に提げていた軍用のシステムバッグを小澤に渡し、鬱陶しそうに上着を脱いだ。そして靴を脱ぎ捨てる様に転がし、部屋に上がり込む。

「何だとは御挨拶ね。それよりあんたン家危機感無さ過ぎ。この辺で警備のシステム入れてないの、ここだけやん」

せめて門柱にステッカーだけでも貼っとけばと、葉菜は言って、先程まで小澤の座っていたソファーにどかりと腰を下ろした。

「ウチには金も金目の物も置いてない」

「そんなの、押し入る側は知らんし。御屋敷町で警備が手薄な家っただけで、狙われるには充分なんだから」

外国人強盗は恐いように続け、葉菜はからからと笑った。その脇で、葉菜の荷物からノートPCを取り出した小澤は、持参したUSBメモリを繋ぎ、キイを叩く。

「ここに来るまで何も無かった？変な奴がうるついてなかった？アパートの方は？」

「特に問題は無いけど 今度は何？」

ソファーに座ったまま、葉菜は長い脚を伸ばして小澤の背中を小衝く。

「幽霊に付け回られてんだとよ」

そう言っただけで俵藤はキャンバスに向き直った。

「幽霊？幽霊ってこの前のアレ？」

葉菜はニタリと笑い、つま先で小澤の背中を捏ね回した。されるがままの小澤はUSBメモリを外すと、次いで携帯電話とPCをケーブルで繋ぎ、

「そうだよ。だから幽霊の正体見たりって、やってみたくなくてさ」

葉菜は目をしばたかせ、俵藤は首を捻じ曲げて後ろを見た。

「平山美貴、二二才。ああ、この年齢は失踪当時、つまり八年前のもので……結局彼女の没年齢になっちまった」

「それって、笹ヶ丘の白骨死体の」

葉菜の問いに、小澤は小さく頷いた。

「そう言やあ、何で幽霊に憑かれてんだ」

俵藤の問いに、葉菜は意外そうに、

「知らんかったん？一月くらい前だったか、こいつ狐だの幽霊だのを見たとか言つて縮み上がったちゃって」

狐 恐いのは幽霊で、それは早急になんとかしたいのだが、何故かそれ以上に狐のことが気になる。心に引つかかる。そのことに気を取られている間に、葉菜は粗筋を俵藤に話してしまった。若干脚色は施されていたが、今更それに構うつもりはない。

「川沿いの それでか。笹ヶ丘に近いな」

納得したと言う様に、俵藤は顎を撫でた。

「俵藤、君あの御稻荷さんの祠ン処、行ったことある？」

「御稻荷さん。どこだそれ」

「笹ヶ丘の竹林、入ったことない？ガキの頃の遊び場だったんだけどさ、僕は」

「俺は実家が尾住だからなあ。ちと遠い」

「そうか。まあ、在るんだよ。竹林の奥、死体の出た壕のすぐ脇に小さな石の祠が。白い、骨みたいな丸木の鳥居と一緒に」

自分の脳裡の光景に、小澤は墓標を見た様な気がした。

平山美貴 わたつみ市尾笹町（当時は箕都竹郡尾笹町）在住の短大生。八年前の七月二日、午後九時十五分。精環鉄道^{せいはんてつどう}尻浜線尾笹駅で友人と別れて以降消息を絶つ。家族は勿論搜索願を出した。

「搜索願が受理される件数は、年間で一〇万超えるんだって。受理されない、もしくは搜索願を出さない場合も含めると、その倍になるとか言われてる。内容だつて様々。警察を擁護する訳じゃないけど、一々とりあつてられないとは、まあ思うだろうね」

警察は家出人搜索願を受理すると、その対象を分類する。

一つは一般家出人。本人が自発的に家出したと見做される場合はこれに分類される。事件性が低いので、積極的に搜索される事は無い。故に殆どの場合公開捜査される事も無い。

もう一つは特異家出人。本人に家出の意志が無く、何らかの外的

要因によって行方不明になった場合、家出人に生命の危険がある場合等がこれ。本人の口頃の言動や、遺書の内容から自殺の可能性がある場合も含まれる。

何の足掛かりも無く突然消えてしまった平山美貴は、一般家出人に分類されてしまった。彼女が実家住まいの学生で、家出する様な理由を両親はもとより、周囲の誰もが思い浮かばなかったにも拘わらず。

「その拳句に八年後、戦時中の地下壕に埋もれていたところを発見された。事件性がなかったらそんな所で死んでないっての」

彼女が一人でそんな場所に行くとは思えないし、死因こそ不明だが、失踪当時彼女が所持していたとされるバッグやその中身、履いていた靴等が壕の中からは見付かっていない。

「白骨で所持品が見付かってないのに、どうやって身元の特定ができたんだ」

「歯の治療痕だよ。DNAもあるかな」

「成る程、でも……死因は何故解からないんだ？司法解剖されてるだろう」

「白骨だからだよ。刃物傷や骨折でもあれば兎も角、衣服はぼろぼろで着衣の状態、出血の有無も定かじゃない。殺されたとして、そこが現場とも限らんしね。それと、司法解剖じゃなくて行政解剖なんだって」

明らかに犯罪性があると断定された死体は司法解剖、そうでない例えば行き倒れ等の異状死体は行政解剖に付される。死因究明と云う点で両者に大きな違いはない。ただ今回の場合は、何故行政解剖なのか解からない。何らかの事件に巻き込まれた結果としか思えないのだ。

聞いていた葉菜はふうんと鼻で頷き、

「で、彼女が幽霊だとする、その根拠は？」

依藤は小澤の幽霊目撃現場と死体の発見現場が近い事に、両者の因果関係の成立を見た。だが、言われてみれば確かにそれだけでは

薄い。そもそも幽霊の都合など解かりはしない。それなのに　今、少し話を聞いただけで、小澤が見たと言う幽霊の存在を信じ始めている。そんな自分に愕然とした。

問われた当の小澤は、

「根拠なんて無いよ。それに、彼女が幽霊だなんて言っていない」

「そう思ったから、そんな話したんだろ」

依藤にとつて、それは当然の帰結だ。巧みな口調で人を信じさせておいて、自分は信じてない態を装うなど、小賢しい。

「何かの因果かなくて、思ってる程度さ」

あしらう様に小澤は答え、薄く笑う。依藤は持っていた木炭を小澤に投げ付けた。炭化した柳の枝は回転して小澤の頭に当たり、音も経てずに落ちる。葉菜はまたニタリと笑い、

「この事件が騒ぎになってるのって、死体発見がマスコミ数社の共同で、それも匿名の通報によるもの　だったからよね」

「だったら何」

「別にいい。あんたが見付けて通報したなんて、あたしは言っていないよお」

「何だ、そういう事か」

ここにきて、依藤は漸く納得が行った。

「そりゃあおまえ、撮り憑かれても仕方ないんじゃないか？ 普段の行いが悪いし、どうせまた罰当たりな掘り方したんだろ」

「勝手に決め付けるなよ知らないよ」

小澤は床に転がる木炭を拾い上げ、弄ぶ。

葉菜はするりとソファから降り、小澤の背後からPCを覗き込み、手を伸ばした。

「そう言やこの前、面白いの見付けてさ」

そう言つて、保存してあった動画ファイルを再生する。夜間の映像なのだろうが、暗い。解像度も低い。携帯電話付属の機能で撮影されたものだろうか。

「何だよ面白いのって」

「だから、幽霊」

耳元でくすぐる様に笑う葉菜の声に、小澤はたじろいだ。葉菜はネットを徘徊しては、背筋も凍る様な代物を蒐集している。そしてそれを小澤に見せて恐がらせる事にささやかな喜びを見出していた。

「ほらこれイツロー、あんたじゃない？」

画面を指差し、葉菜は言った。

15・6インチの液晶画面。その中に、全体の約四分の一程の大ききで動画プレイヤーが開いている。暗く粗い画像の中で、男が独り、立ち尽くしている。その人物が動き出す直前で、小澤は動画プレイヤーを閉じた。それは、五回目の再生だった。

「これ、おまえなのか」

再生中、傍で固唾を呑んで見ていた俵藤が訊いた。厳めしい顔を強張らせている。小澤はその問いに、うんと、肯いた。

「なら、これは実際にあつた事なんだな」

俵藤はさらに質問を重ね、小澤は、まあねと、どこか気の抜けた返事をする。

葉菜の話では、それは、ある動画サイトにアップロードされていたものだった。投稿者のコメントは無し。心靈動画として様々な物議を呼び、幾つもの掲示板サイトに多数のリンクを張られる程になつていたが、話題になり過ぎ、今は動画サイトの管理者が削除してしまつているらしい。

「なあ、この動画UPした奴、辿れる？」

背中に貼り付いている葉菜に訊ねる。

「なあに、晒し者にされた報復しかえしする気？」

葉菜は目を眇め、質問に質問で返した。

「違うよ。出来る？出来ない？」

「やってもいいけどタダはイヤ。それと、報復じゃなけりや、何のため」

「相応の報酬は支払うよ。理由はさっきも言つたら、幽霊の正体みたり、さ」

「それで報復じゃないって？」

まあいいわと、笑みを浮かべながら葉菜は了承した。

来た時同様、一之瀬葉菜は窓から帰って行った。静けさを取り戻したアトリエで、依藤はのそりと立ち上がり、

「これから、どうするんだ」

アトリエの一面に据えた小型冷蔵庫から、キューブアイスと水のボトルを取り出しながら、問いかける。

「どうって、明日からは通常業務だよ」

ソファアに胡坐を掻き、啞え煙草の小澤は気だるそうな口調で答える。

不良探偵と言えど、依頼が無ければ全くの暇と言う訳ではない。例えば地廻り。これは代表的な日常業務の一つで、パチンコ屋、パチスロ屋、雀荘等を、ひたすら経巡るルーティンワーク。暮れ時から夜間にかけては無論飲み屋等も加わるが、日中の遊戯施設の方に寧ろ重きを置いている。それらは表社会の住人にとって、裏社会への窓口となっている。定期的に顔を出し、主婦や学生、フリーター等、客層の把握をするのも大事だが、そこを拠点に活動する情報元との接触は、より一層大切だ。信頼関係を維持するための投資も必要不可欠だし、何より情報更新を怠ると、命取りになりかねない。

「出歩いて、問題無いのか？」

手渡された水割りのグラスに口を付けていた小澤は、不明瞭な声で何やら答えた。

「誤魔化すな。どのくらい逃げ回ってた」

依藤の認識では、小澤は綺麗好きの部類に入る。夏場に埃まみれのまま、シャワーも浴びない様なことは今まで無かった。昼間の汗臭さは、尋常ではなかった。

「うん、まあ三日程かな」

蕎麦屋で店主と話したあの日、部屋の内部にまで侵入してきた不快な視線に勘付いてすぐ、小澤は塀を飛び出した。そして着の身着のまま三日間、逃避を続けていたのだ。こんな訳の解からない逃亡

生活を強いらられるくらいなら、いつそ死んだ方がましだと、何度となく思った。

「何だつたら、しばらく遠くに　旅行にでも行けばどうだ？」

「それも考えたんだけどねえ」

事実、逃げようとした。だが、逃げてでも逃げ切れない事は解かっている。個人的な問題だが、逃げれば様々な形で他へ累が及ぶ。

「ま、色々あつて、やおいかんのさ」

グラスを揺すり、氷と液体を攪拌しながら疲れた笑いを浮かべた。小澤には銘柄は解からなかったが、俵藤の出したスコッチはグレンモルトの逸品だった。香りの高さ、口当たり、喉越しの良さ、それに続く熱さではつきりと解かる。小澤が普段飲んでいる、刺々しくて薬臭い安物のバーボンとは比べ物にならない。

「とりあえず、しばらくここに厄介になりたいんだけど、いい？」

「それは構わんが。なあ、この一件は本当に幽霊騒動なのか？」

「ん、その心は」

「さつき一之瀬に頼んでた、その動画に何か問題があるのか？」

俵藤の問いに、小澤は啞えていた煙草を灰皿にもみ消し、新たな一本を啞えた。普段の喫煙量は少ないが、何かに集中しているとチーンスモーカーになり、必然本数も増える。

「君はあれを見て、どう思った」

「どうもこうも　」

俵藤は告げた。正直言つて肝が冷えたと。

画像の中で路上に立つ男　顔こそ映っていないがが見る者が見れば、それは小澤逸郎の姿だと解かるし、何より本人が認めている。その目前、路上の先に何か滲むものが在った。暗灰色から灰色、明灰白色へ明度を上げてゆくと共に、大きさも少しずつ変化している。ぼんやりした滲みは、すぐに白いしみとなり、徐々に形を取った。

ひとがた

全身ではなく、明確にでもないが、それは人の形に見えた。

「うん、実際、怖いよね」

煙を吐き出し、目を閉ざす。

「で、幽霊の存在は信じないんだっけ」

「ああ、信じてない」

画像を見て恐いと思っただし、それは小澤の話を裏付けてもいる。

しかし、それでも幽霊を信じているとは言いたくない。

「でも、本心じゃ、いると思ってるよね」

依藤は戸惑った顔を小澤に向ける。

「その心は」

「作家はさ、想像性って言うか想像力って言うか、そんなのが大切なんじゃない？」

依藤はスーパーリアリズムと呼べる程の繊細で緻密な絵を描くこともある。しかしその名を世に知らしめた一連の作品は、どれも大胆な筆致の抽象的な作風で描かれている。見たものを見たままに描くことも好きだが、自分の想いを画面に叩きつける、荒々しい抽象画こそが、自分の中にあるものを現す術だと思っている。感受性と同様、想像性は創造に必要なものだとも思う。

「だからって、それが幽霊と関係あるか」

「君は顔に似合わずロマンチストだからねえ。神話伝説伝承って好きでしょ」

ロマンチストかどうかは兎も角、確かに伝説の類は好きだ。宗教そのものは嫌いだが、宗教美術には強く惹かれる。

「この家だって、曰く付きだからこそ買ったんじゃないの？」

「流石にそこまで物好きじゃねえよ。安くて広い家だから得だと思っただけだ」

口では否定したが、実のところ、それは購入を決めた一因に違いない。摂り憑かれるとか、祟られるとかまでは全く考えなかったものの、出るならそれは、必ず自分の創作のプラスになるとは思った。凡庸な日常に埋めると、創作意欲は減退する。欲するのは刺激と言っより、非日常を開く扉。形の無い不可視のモノに姿を与えるこ

とが、俵藤の絵に対する在り方。

俵藤は小澤の次の言葉を待ったが、発せられたそれは思っていたものとは違った。

「絵、描かないの？」

一瞬、心臓が凍った。

俵藤はアトリエに入ってから、一枚のキャンバスの前にずっと座っている。真っ白なF-100号（1・620×1・303ミリ）キャンバス。生地は極荒目のドンゴロス。

「描かないと、土居さんに怒られるんじゃない？主に僕が」

土居貴子は画家俵藤に心腹している。絵が描けないからと言って、画家を責めることはまずしない。その矛先は今アトリエに居る悪い友人　小澤に必ず向けられる。

俵藤は巨体を丸め、獰猛な肉食獣の様に唸り、キャンバスを睨んだ。しかし睨もうが凄もうが、キャンバスは白いまま。

今、俵藤は平凡な日常に、頭まで埋没してしまっていた。

正直なところ、小澤の体験から何か得るものはないかと思わないではなかった。いや、小澤の持ち込んだトラブルに巻き込まれた事にして、しばらく制作から逃げたいとまで思っていた。小澤に対しては相身互い身なので恥じ入ることも無いのだが、こつも見透かされると、流石に遣り辛い。

「平山美貴ってコね」

「ん」

無然として唸る。唐突に話題を変えられても、対応が付いていかない。だから俵藤が小澤の次の言葉を理解するには、少し時間がかかった。

「僕らと同じ高校の一個下なんだ」

背後の小澤を振り返る。小澤は、ソファアの上に膝を立て、そこに顎を乗せて宙を見据えていた。

「まあ君は実家がちよつと離れてるし、高校は中退しちまうしでアしただけ、僕は少なくとも、校舎や道端ですれ違ってくるの事は、

あつたんじやないかと思う」

「多少の縁ってヤツか」

「そうだね」

袖が擦りあつたかどうかまでは解からんけどねと、小澤は小さく
呟いた。

目覚めは、いつも不快で死にたくなる。

眠りすぎて見る嫌な夢の残滓や、半覚醒と覚醒の狭間　微睡みに不意に訪れる絶望感。

もう、生きるのは嫌だ。このまま眼を覚ましたくない。死んでしまいたい。

そんな想いに胸を締め付けられ、体を丸める。その時、アラームが鳴った。身体がびくりと跳ねる。

アラーム　警告　不吉な予感　いや、違う。これは

小澤は手探りで携帯電話を取り上げ、けたたましい目覚まし音アラームを止めた。口中が苦い。液晶画面に未だ光を拒む眼を向ける。表示された時間は午前九時一五分。

「起きたか」

男の重く低い声。小澤はソファの中で丸めて強張った身体を伸ばし、声の方を見た。依藤はまるで時間経過など無かったかの様に白いキャンバスを睨んで胡坐を掻いていた。また寝てないのだろうか。小澤は思った。依藤はかつて、睡眠障害で三週間程全く眠れなかったと漏らしたことがある。そして、その障害は今でも治っていないと、小澤は依藤との付き合いの中で感じていた。

「何か食うか」

背中を向けたまま、依藤は訊ねる。

「いや、すぐ出るから。外で食べるよ」

両手で顔を擦りながら小澤は答えた。そもそも朝は食べない。無理に詰め込もうとすると嘔吐感に苛まれる。

「そんなだからおまえは顔色悪いんだよ」

首を捻じ曲げ睨みながら、俵藤は見透かした様にそう言った。それを受け流し、小澤はアトリエを出る。

「トイレと洗面所借りるよ」

「んじゃ、ちよつと出かけてくる」

手早く身支度を済ませ、まだキャンバスの前に座り込んだままの俵藤に声をかける。

「ああ、帰りは」

「さて、夕方が夜か。遅くなったら直接こつちに来るから」

「母屋はいくらでも部屋空いてなのに、なんでここで寝るんだおまえは」

「独りじゃ恐くて、よう眠れん」

笑って出ようとする小澤に、俵藤は呆れの目を向けていたが、ふと声をかけた。

「そつ言やおまえ、原付はどうした」

「原付言つな小型二輪」

小澤は普段の足に90ccのミニバイクを愛用している。車に比べると場所を取らず、燃費が良く、小回りが効き、混雑に巻き込まれる事がないため、何かと使い勝手が良い。

「置いてきたよ。当面歩きだね」

その答えに俵藤は何故と訊こうとしたが、小澤は足早に出て行き、背中を見送るだけになった。

精環鉄道^{しゅうわ}風浜線は、その線路の大部分がJR福わた線と並走している。都心とのアクセスならJRだが、旧箕都竹郡当時から、地域住民の日常の足として、活用され親しまれてきたのは精鉄風浜線。

私鉄ローカル線によく見る単線で、どの駅にもプラットホームは一つ、一番と二番しかない。車輛も、平日朝夕のラッシュ時で六輛乗車率の少ない時間帯では二輛と編成は少ない。故に、プラットホ

ームも短く、自動改札機も無い駅舎はコンパクトに造られている。全十駅中六駅は午後十時をもって改札を無人化し、尾笹駅もその一つ。

改札口前の、椅子が四脚しかない小さな待合室に立ち、小澤は構内を見渡した。駅構内は八年前はおろか、小澤の記憶にある限り二十年以上ほとんど何も変わっていない。改札の右手に券売窓口と、さらにその右に自動券売機。改札口をはさんで向かい側の壁には、昔ながらの黒板式掲示板と、沿線観光地などのポスター。

八年前の七月の夜、平山美貴はここでの目撃を最後に消えた。同じ短大に通う友人と別れの挨拶を交わして。十時前だったので改札に駅員は居たため、その証言もある。彼女の家は駅から五〇〇メートルと離れていない。そして、彼女が変わり果てた姿で発見されたのは、八年の月日と約二キロの距離を隔てた笹ヶ丘丘陵の埋もれた地下壕の中だった。八年という時間は兎も角、この尾笹駅から笹ヶ丘の地下壕までの間、彼女に何が起こったのか。それ以上の情報は、マスコミ、ネットでは拾えない。恐らくは警察も掴んではないだろう。

それを、薄汚い裏街道専門の情報屋風情が、どうやって調べるって？

駅舎を出ると、すぐ隣の小さな売店の前で、TVクルーが撮影をしていた。午後のワイドショー辺りの取材らしい。

この事件は、社会的にじわじわと大きな広がりを見せている。兎に角、不透明な部分が多い。若い女性が一人、何の前触れも無く失踪し、数年後死体で発見されているのだからこれは事件に間違いない。しかし、発生から発覚への経緯が丸ごと抜けている。ミステリアスな事この上なく、マスコミにとっては大衆受けする格好の素材だろう。確実に事件化することを狙ったとは言え、これは小澤の自己保身が元になっている。その意味では上手くいったが、手出しも難しくなった。自分で調べるつもりなど、毛程も無かったのだから仕方無いのだが。

撮影していた男がカメラを下げたのを見て、小澤は火の点いていない煙草を啜え、ぶらぶらと売店へ向かって歩きだした。窓口の奥には、白髪まじりのパーマの女が退屈そうに座っていた。

「くださいな」

店頭の使い捨てライターを一つ取り、カウンターのの上に置く。マネークリップから千円札を引き抜き差し出しながら、

「今度はどこの局？」

ちらりと後ろの取材陣を振り返りながら、女に訊ねた。

「さあね、どこだか知らないけど、いい加減なもんだよ」

「いい加減って？」

お釣を受け取り、煙草に火を点けながら問いを重ねる。

「いやね、八年前に、警察とマスコミがこうやって動いてたら、あの娘も、もしかしたらって、思ってたね。死んでから騒がれたって、遅すぎるし、浮かばれないよ」

ゆっくりと、気怠げにそう答えた。

「ま、あたしがここでこんなこと言うのも、今更なだけどね」

「あのコの事、知ってるの？」

「話した事は無いけどね。あの娘の家、ここから遠くないし、高校三年間もこの駅から通ってたからね」

「あ、箕都高だもんね」

小澤がそう言うと、女は怪訝な顔をした。

「ああ、僕も箕都高生だったから」

ああ、そうかいと、納得を示し、女は警戒を解いた。これまでも何度か聞き込みを受けて、うんざりしているとの事だった。相手は警察だったり、得体の知れない雑誌も含むマスコミだったりで、何れにしる不躰で無遠慮なものばかりだったらしい。

「以前に何度もね、あの娘のお母さんが訊きに来たのよ。いなくなつたあの娘の事、何か知らないかって」

その時の憔悴しきつた母親の顔が忘れられないと、女は呟いた。

平日の、もう朝とは言い難い時間だが、午前中の電車内は空いていた。携帯電話を開いて画面を眺めながら乗り込むと、座席に座っていた行商らしい年配の女に睨まれた。携帯電話を閉じ、女から離れた席に向かう。

ピリリリッ

古めかしい警笛がなり、床を軽く震わせて扉が閉じた。

座席に腰を下ろし、ビロードを模した臙脂色の布地に掌を這わす。その感触は、何故だか子供の頃を思い出させる。天井で首を振る鉄の羽根の扇風機や、吊り革の止め具に表示された鉄道会社のロゴも、やはり古い記憶を喚起する。その色褪せて黴臭い記憶に、想像が重なった。

平山美貴は冬の装いで扉脇の手すりに掴まっている。学校指定の濃紺のコートに、茶系のタータンチェックのマフラー。黒革の学生鞆とナイロンの補助バッグ。髪はあまり長くない。

平山美貴の容姿はテレビでもネットでも散々流されて見ている。だがその殆どは彼女が失踪する直前　つまり短大時代に撮影されたもの。高校時代のものも少しあったが、それは冬の登下校時のものではない。だから今、小澤が幻視している姿は完全に想像の産物だ。どんなに記憶を探っても、彼女と面識は無いのだからそれは間違いない。

それに、あの満月の夜に見た女の姿とも違う。

そりゃあ想像だって、ちゃんと生きてた時を見て欲しいだろう。誰だって薄気味悪い姿なんか、晒したくないだろうに。

否、鬼魅悪い姿を見せ付けたい者はあるのだろう。自分をそんな姿にした相手になら、見せ付けて、己が罪を思い知らさなければ、逃れられないと思ひ知らさなければ気が済まないだろう。

勘弁してよ、僕は君と話したことすらないんだよ？

苦笑を浮かべ、胸中に嘆いてみせても、想像の中の少女は車窓の外を黙って見ているだけだった。

枝葉 2

枝葉 2

「やっちゃん、今何時い？」

ベッドにしどけなく寝そべった女が、寝惚けた声で訊いてくる。

カチコチと卓上時計が秒を刻む音が、部屋の澱んだ空気の中に響く。しかし、金本泰治かねもと やすじはそれを見ず、携帯電話を手に取り、画面に表示された時刻を告げた。

「そつかあ。あと一時間だねえ」

あと一時間

あと一時間もすると、兄貴分の高田たかたがこの部屋へやって来る。ベッドの上の女、美春みはるは高田の情婦。

我ながら、危ない事をしていると思う。こんなニアミスどころか、直接ぶつかりかねないタイミングでの密会など、正気を疑われる。それが金本の所属する裏社会での事となると、狂気の沙汰と言っしかない。下手をすれば、命を落す以上に恐ろしい目に遭うのだから。正気である間は、常に危機感に苛まれている。しかし、この女の肉に埋もれていると、すぐにぼんやりとした靄霧に包まれ、それ以外のことは考えられなくなる。他の事はどうでもよく思えてくる。

この女の肢体かいたいは、麻薬だ。

靄霧の晴れつつある思考。金本はじわじわと疼き出す危機感の中で、そう思う。だが、思う傍から女の肢体に逃げ込みたくなる。出洩らしの様に消耗し、床にへたり込んでいた身体の中で、欲望が鎌首をもたげる。

あと一時間も有りゃあ、まだできるな。

性懲りも無くそんな考えが浮かんだその時、手の中の携帯電話が鳴り出した。表示を見るまでもなく、着信音で判る。全身に激痛の

様な緊張が走る。高田からの電話だ。

動転して震える指で通話ボタンを押す。

『おう、今どこに居る』

「は、はい、ツレのトコです」

いきなり訊かれた。干乾びた雑巾の様な舌で、それだけ答えるのがやっとだった。

『おう、おまえ今月分はもう済ませたか』

さらに追討ちを掛けられた。今月分とは金本が任されている、あの集金業務についてだが、ここでもこの男は問題を抱えている。

「あ、はい。マエさんに渡してあります」

不正の発覚はまず無いと思うが、怯えが金本の口を強張らせる。

小心者のくせに小ずるく、自らの欲望を律することができない。それが金本という男だった。

『そうか。ならおまえ、今から出て来い』

頭部を強打された様な気がした。それは最早、死刑の宣告としか思えなかった。だから危うく、続く言葉を聞き漏らしそうになった。

『今手隙の奴が少なくてな、うぜえ仕事だが、まあ付き合えや』

「ねええ、何だったのお」

呆けた顔で通話を切った金本に、美春が寝惚けた声かけた。

「さあ、何か変な仕事が入ったみたい」

「変なあ？」

美春の気の抜けた声を聞いている裡に、金本は思い出した。今、組の一部の者達が奇妙な探索行に駆出されている事を。金本の同輩も一人、それに奔走しているのだが、緘口令が布かれているらしく、何をしているのか話してくれない。ただ、どうにも理不尽な命令が下っているらしいことは、その同輩だけではなく、関わっている者達全ての態度から察しが付く。

理不尽で理解し難い命令は、当然成果の上げようが無い。だが、上は責つ付いてくる。憤懣遣る方無いその同輩は、通常業務の相手

ゴト師グループの繋ぎ役に八つ当たりをして、問題になっているとか。

少し前までこの街は暴追キャンペーンという微妙な状態にあった。その機運の盛り上がりは新興住宅街の住民を中心に、未だに続いている。それだけでも愉快ではないのに、上からの命令とは言え、訳の解からない事に従事させられるのは、ただでさえ忍耐力の乏しい彼等には苦痛以外の何ものでもない。

「何だか面倒な事になってきたなあ」

金本自身、その仕事に就かされるかは未だ判らないが、何れにしろ、その類の面倒事の様な気がする。

「ま、仕方無えや、俺、そろそろ行くね」

「うん、いつてらっしゃあい」

頭を搔きながらシャツを羽織る金本の後姿を見て、美春はこの男の間抜けさ加減に呆れていた。

これがリンチの呼出しかもしれないとあって、ちょっとは考えないのかな、コイツ。

美春自身は既に逃亡の準備は済ませてあるし、その気構えも常にしている。やくざのイロなど、いつまでもやっているつもりはない。

ま、バカは死ななきや治らなあいつと。

危険を犯しながらそれを管理できない金本を、美春は少しだけ哀れに思った。

三章 1

三章 1

路面のひび割れた、二車線ぎりぎりの細く長い道。その左右には、まるで道行く者を抑圧するかのようにフェンスが走っている。だが、当然それらが囲っているのは道路ではない。片側はJRの操車場。その向かいは、金網の内側をさらに木立で囲う校庭。小澤逸郎は確認のため目を走らせていた携帯電話を閉じ、木立の隙間から覗く光景を眺めた。

県立箕都竹高等学校 通称箕都高。

二学期が始まって間もない放課後のグラウンドでは、女子ソフトボール部とサッカー部が強い日差しの下で砂埃を上げながら練習に励んでいる。懸命に走る学生を脇目に、小澤は正門から来客用のエントランスホールへ向かった。しかし、校舎へ辿り着く前に、
「おいこら、おまえ何してる」

声の方向に目を向けると、白Tシャツに短パンの男が、グラウンド隅の木陰からこちらを睨んでいた。髪は短く刈り込み、筋肉でなで肩になった、体育教師を絵に描いた様な男だと小澤は思った。

「失礼、こちらに御在籍の高荷^{たかに}先生に所用が在って参りました。面会の申し入れも御了承戴いております」

小澤は意表を衝く素早さでするりと近寄り、丁寧に腰を折り、饒舌に申し出た。

男は、訝しげな顔のまま目を丸くした。

おいこら口調こそ引つ込めたものの、信用した訳ではないと言いたげな男に同道され、小澤は漸くエントランスホールの事務所窓口

まで辿り着いた。再度来意を告げると、程なくして開襟シャツを着た初老の男が現れた。

「ああ、来たかね。小澤君」

それを受けて、”体育教師”は顔を赤らめ、何か詫び言の様なことをぼそぼそと言って立ち去った。小澤は思わず鼻を鳴らしそうになったが、目の前に立つ人物が重たげな瞼の下で、自分以上に冷たい眼を立ち去る男の背中に向けている事に気付き、止めた。

「お久しぶりです、高荷先生」

かつて古文を教わった教師、高荷は白髪の量こそ増えたものの、頭髪そのものは減ずることなく、ひよろりとした長身瘦躯もそのままに、ほぼ昔と変わらない姿だった。

応接室へ連れて行くとする高荷教師に、結構ですからとそれを固辞し、結局二人して校舎の軒下の日陰に腰を下ろした。

小澤は先に渡した手土産の菓子折りとは別に、自販機で買った缶コーヒーを高荷に手渡し、自らも冷たい缶を振って攪拌する。

「ちゃんとアポ取って来てんですから、いきなり不審者扱いは無しですよ」

「ああ、申し訳ない、不愉快な思いをさせてしまったな。あれで人にものを教える立場に在るかと思うと泣けてくる。まあ、昔からあの類は居たがなあ」

老教師は溜息を吐き、いただきますと言って缶のプルタブを開けた。

「だが君は不審者と思われたのではなく、生徒が私服で何しに来たのかと思われた様だ。変わらんなあ君は。血色は前より悪いか？」

先生は眉毛が伸びましたかと、笑いながら返し、しばらく旧交を温め合った。

「それで、十年以上経った今、担任でもなかったこの私に何の用だね」

「いやあ、十年以上経っちゃうと元担任どころか、知ってる先生がことごとく居なくなってますからね。高荷先生がまだ居てください」

て助かりました」

「まあそうだな。私くらいのものだなあ」

「でも先生こそ、担任じゃなかった生徒の事、よく憶えていてくださいましたね」

「ああ、君の代はいささか特殊だったし、ほら、あの失踪して中退扱いになった生徒、海を渡って画家になっていたとはなあ」

その生徒は故郷に錦を飾り、今や地元の名士である。小澤は肩を揺すって笑った。

「ま、中でも君は特殊な部類だったなあ」

「嘘ですよ。僕は優秀でこそなかったけど、至って普通な生徒でした」

ああ、確かになと、高荷は笑った。しかし、その眼の奥には鋭い光があった。

「君の名が問題になったことは表向き無かった。だが、君が幾つかの問題の裏に居た事に、気付いている者も居たのだよ。極少数ではあったがね」

小澤が目を丸くすると、何をわざとらしいと、高荷は鼻で笑い、

「まあ、問題にしない方が賢明だと皆、判断したのだがね」

「そりゃあ、どうも」

笑いで返し、コーヒーを啜る。

「ところで先生、その、僕の代は特殊だったって事ですが」

「ん？」

「あの当時、一番の問題は何でした」

高荷は立膝に肘を付き、頬杖にして横目に小澤の顔を凝視した。

「そんな事を訊くために、わざわざここまで来たのかね？」

「十年一昔って言うでしょ？つまり、今は昔で語れることですよ。今昔かねと、呟き、高荷は視線を外した。

「君は確か調査業をやっていると聞いたか」

「ええ、御迷惑になると思いますんで、名刺はお渡ししません」

「そんなものはいらんが、何故それを私に訊く。立場は違えど、あ

の時ここに君も居た。何がどう問題だったか、憶えてないのかね」
視線を外したまま、高荷は問いを返す。

「忘れちゃあいませんがね、僕としちゃあ、先生おっしやるところの、違う立場の意見をお聞かせ願いたかったんですが」

へらへらと暢気な顔で笑う小澤に、高荷は沈黙で応える。

「では、ちよいと話を変えましょうか」

小澤は、これも高荷の方を見ることなく、膝を抱える様に座りなおした。

「さつき、失踪した生徒の話が出たでしょ？僕やそいつの一年下になるんですが、失踪したコがいましたよね。まあ、そっちは在学中じゃなく、卒業後でしたが」

「平山君のこと、か」

「平山、そうそう、そんな名前でしたねえ。そのコも最近になって消息が」

「無残な結末を迎えていたと、解かっただけだ。消息が掴めたとは言い難い」

「御尤も。これは失言でした」

「何故そんないきなり彼女の話になるんだね。さっきの話と何か関係あるのか」

「いきなりってこたあないでしょ。今何かと話題だし、彼女この卒業生だし、さつきも言いました但僕の一箇下な訳だし。それと、話を変えると前振りはしましたよ」

「しかし何故私に」

「高荷先生、一、二年次の彼女の担任だったそうですね」

「調べたのか」

高荷は驚愕と困惑の入り混じった複雑な表情で小澤の顔を見た。

当時の学級内連絡名簿が卒業アルバム同様に流出していたのかとも思ったが、一つ違いの卒業生なら、当時の生徒関係に直にあたりたと考えた方が妥当だと気付いた。少なくとも、この学校の事務に訊ねた訳ではないはず。

「どんな生徒でした？彼女は」

それまでとは違う静かな声で、小澤は問う。

「君は何を、何のために調べている」

吹奏楽部が練習しているのだろう、トランペットやクラリネットの調子はずれな音が校舎の中から散発的に響いてきて、それは時に聞き覚えのあるメロディーを奏でる。体育館からのホイッスルがそれに交じる。

「先生」

「何だ」

「何か、御存知なんですか」

「何を言つとるんだ君は」

「彼女の話が出た途端、様子が変わりましたね。ベテラン教師としちゃあ、ちよつと如何なものかって感じですよ」

「巫山戯るな」

高荷の声には、隠し様の無い苛立ちが滲んでいた。

「失礼しました」

頭を軽く下げ、小澤は笑顔を高荷に向ける。しかし、高荷はそれを受け止める事ができず目を逸らした。

「ええつと、何を何のために調べてるってことでしたか。ここんところ、よくそれを訊かれるんですよ」

こりを解す様に首をぐるりと回し、小澤は空になった缶をコンクリの床に置いて立ち上がった。

「何のためにつて訊かれりゃあ、そりゃ自分のためです。何をつて訊かれりゃあ、彼女が浮かばれるために必要な事を、です」

空が朱く染まり、法師蝉の音が間遠に響く中、小澤は重い足取りで校舎を後にした。操車場の線路を跨ぐ長い陸橋を渡り、啞え煙草の無然とした顔で私鉄の駅へ向かう。

ああ、まいったな。

整理が付かない。今しがた入手した情報があまりに重要だった事

もあるが、それよりも感情が頭の回転を阻害している。

少し話題に乗せるだけのつもりで振ってみると、妙に様子がおかしくなった。つい、いつもの調子でハツタリをかますと、予想外に喰い付いてきた。そして

畜生、何なんだよこの胸糞悪さは！

煙草のフィルターを噛み潰し、苛立ちまじりの溜息と共に煙を吐き出す。

重い足を投げやりに持ち上げた時、膝のポケットの中で携帯電話が着信を告げた。それは、仕事専用端末の振動だった。

「何か言うべきことは」

机の向こうの男は静かに訊ねた。

「ありません」

机を挟んで立つ小澤も静かに答える。

窓の無い薄暗く狭い部屋の中で、小澤は直立の姿勢を維持するだけの力を残し、身体を弛緩させる様に努めて立っていた。もし、僅かでもそれ以上の力がこもれば、殺意が弾けてしまいそうだった。

「無いのなら、出て行け」

小澤の返答からは、僅かな間しかなかった。だが、男は声を荒立てこそしなかったが、鬱陶しそうに言う。

「失礼します」

頭を深く下げ、小澤はゆっくりと踵を返した。手は拳を握りそうになり、足は強く床を打とうとする。大きな労力を費やし、それを堪える。

「当分、貴様の顔は見たくない」

部屋を出てドアを閉じる間際、その言葉が聞こえた。ドアノブにかける手から力を抜き、ゆっくりと静かに閉める。

ぶち殺すぞこの野郎。

胸中に呟く。噛み締めた奥歯がぎしりと音を経てる。胃酸が過剰に分泌され、腹中が燃えている様な錯覚に囚われる。それでも湧き上がる衝動を抑制し、小澤は白い壁と天井、灰色の床の無機質な廊下を静かに歩き出した。

気分が悪い。一刻も早く落ち着けるところへ行きたい。平静を装う分、怒りは拭かれて焦りを生み、それは自らをはめる陥穽と化す。

「何だあ、おず屋じゃねえか」

階段を下りようとして、上の階から下りてきた若い男と鉢合わせになった。青いシャツにネクタイ、スラックス。装いは普通の勤め人だが、その男の態度には、わざとらしく粘り付く馴れ馴れしさと粗暴が滲んでいた。

「ああ、こりやどうも、お久しぶりで」

「お久しぶりじゃねえよ。こんなところで何してんだよ、ああ？」

内心臍を噛む。普段の小澤ならこの手の輩を相手に、言葉を断ち切られる様な事は絶対にしない。時候の挨拶だろうが追従だろうが、兎に角言葉を重ねて自分のリズムを作り、相手を煙に巻く。この手の輩には、付け入る隙を与えてはならない。なのに

「なあ、まだあの女飼ってんの、ああ？」

男の顔に、下卑た笑みが浮かぶ。

「惚けんなよ、あの糞ハツカーだよ。ツたく、散々引つ掻き回されたってえのに、てめえが発情して」

男の腕が肩に回される。それは無遠慮な馴れを越え、最早首を掻き込む拘束だった。

不愉快だった。男の体温も体臭も、口臭も、首筋を圧迫する力も、何もかもが疎ましく不愉快だった。無論、男の声も、言葉も不愉快極まりない。あまりの不快さに、それは意味を無くし、神経に障る騒音としか認識できない。小澤はほとんど機械的な幫間口調で男から逃れようとしていたが、不意に頭に引き攣る様な痛みが走り、クリアな声が脳に届いた。

「すかしてんじゃねえぞ、てめえ」

頭髪を掴まれ、揺さぶられる。怒気を露わにした男の顔が間近に迫る。男は鋭く舌打ちし、小澤の顔を壁に打ち付けた。ごっと、鈍い音がして顔面に衝撃が走り、脳が揺れた。そしてすぐに掴んだままの髪を引つ張られ、引き戻される。次は顔を殴られるか、腹に膝が入るか、危険を回避するため本能的に身体を丸めようとするが、依然頭髪を掴まれたままなのでそれも出来ない。頭の回転は完全に

止まってしまつて、何も考えられない。また身体が揺れた。頭髪ごと引つ張られる。だが、今度は少し様子が違つた。

「何やつてるの、君」

まだ頭髪を掴まれていて不自然な姿勢を強いられていたが、かろうじて目を声の方へ向けることは出来た。そこに居たのは、飯尾だつた。小澤にからんでいる男は、どうやらいきなり殴られたらしく、口元を押さえていたが、何かくもつた声で言おうとした。しかし、そこへまた鋭い拳が飛ぶ。男は仰け反つて頭を壁にぶつけ、小澤の髪を離した。

「外注の業者さんからんで暴力振るうつて、何者だよ君。どこぞのヤクザか？ ねえ、聞いてる？」

男はまた何か言おうとした。恐らくは謝罪の類だつたのだろうが、その言葉はやはり拳で塞がれた。男は唇を切り、血を迸らせながら崩折れた。

「なあ、俺は訊いてるんだよ。何か答えなさいよ、ほら」

そう言つて飯尾は這い蹲る男の顔面に蹴りを放つた。靴の硬い爪先がめり込み、男の口元は潰れたトマトの様になつた。

飯尾は軽く溜息を吐き、小澤に目を向けた。

「すまんね、教育がなつてなくて」

飯尾は小澤の腕を取つて立たせ、何も言わず足早に階下の駐車場へと向かつた。

「らしくないね」

車に乗り込み、イグニッションをかけてから、漸く飯尾は口を開いた。

「いつもの君ならあの程度、難なくあしらつてたたる？」

「見てたんですか、最初から？」

「聞いてたんだよ」

暗い地階から、照明で燈色に切り貫かれたかの様に見える地上へのスロープに入る。滑り止めで刻まれた段差を越える度に、柔らかいサスペンションが気味悪いほどにふわふわと身体を揺すつた。

地上は、既に駐車場よりも暗くなっていた。

「部長に随分しぼられた様だね」

ステアリングを取りながら、飯尾は煙草を啜え火を点けた。後部座席の小澤は髪を掻き上げ、手櫛を入れる。

「どうやら、全てお見通しらしい。精神的に自制が効かず、三下相手に凡ミスを繰り返し、あれしきの暴力で頭が真っ白になってしまった。小澤は荒事は苦手で腕っ節はまったく立たないが、それなりに場馴れはしている。殴られ慣れ蹴られ慣れているので、ダメージを最小限に抑えるコツを心得ている。どんな状況でも、冷静な観察力を失わない自信はあった。それが、何もできなかった。自己嫌悪で死にたくなる。だが、見透かされてそれをあっさり認めては、負け犬以下に成り下がってしまう。虚勢は張らなければならぬ。」

「いつも通り、淡々としたものでしたよ」
飯尾はバックミラーで小澤を見て、微かに笑った。

「さて、どこまで送ろうか」
「あ、申し訳ないんですけど、ちよいと遠くまで、東橋の地下駐車でいいですか」

「尾行対策か」

「飽く迄念のためですけどね……お願いできますか？」

「ああ、賢明な判断だ」

快諾し、飯尾は車を指定の場所へ向けた。東橋とは山向こうの地名で、そこには郊外型の大規模ショッピングモールが在る。その地下駐車場は広大で複数の出入り口を有し、シネマコンプレックスも在るので、平日の宵時でも利用者はそれなりにある。駕籠抜けを行うには、近隣では最も適していると言える。

「じゃ、ドライブと洒落込むかい」

笑ってそう言ったが、飯尾の笑みはすぐに消えた。

「巻き込まれ、なんだろうけど妙だね」

笹ヶ丘の白骨死体発見についての捜査で、警察が小澤の名を掴んでいる。それが今回の呼び出しの理由だった。

「僕の名前つてのはどこから出たんですかね。いや、僕は誰にも言っていないし、見られた憶えも無いんですけど」

平山美貴の死体発見者が小澤である事は、既に飯尾も了承済みの事。事態が事態だけに、話さざるを得なかった。何故そんな場所へ行ったかは、少々ぼかしはしたが。

「あの川筋の田中つて家、そこに九十を越えるお婆さんが居るんだけど、知ってる？」

「……あのババア、まだ生きてたんですか」

「君が汚れた格好で笹藪から出てくるところを、家の中から見ただと。小澤の悪ガキがまた悪戯してやがるって、聞き込みに来たお巡りさんに言ったらしいよ」

「何十年前の記憶で言ってたよ」

顔を覆い、うんざりした声をあげる小澤に、君はよっぽど子供の頃から変わらないんだなどと、飯尾は笑った。

「でも僕の周り、警察の気配は無いですよ」

ただし、ここしばらく警察以外の気配には、いささか悩まされているのだが。

警察の捜査は、それが私服警官であっても一種異様な、独特の気配がある。どうしても一般人から浮いてしまう強烈な力場を持っている。周囲に無関心な都会なら兎も角、コミュニティで結束し排他的な田舎では、特にそれが顕著に出る。有態に言えば下手なのだ。よほどの手練か老練な捜査官が相手でなければ、気を配ってさえいれればすぐに判る。

「こつちにリークがあった以上、君の事は捜査会議に挙がってるはずなんだが」

しかし事実、小澤の周囲に警察の手は及んでいない。それは飯尾の側で確認済みだ。もし少しでもその兆候があれば、絶対に直接接触はしない。それ以前に連絡も取らない。こうして接触を持ったのは、多少のリスクを犯しても、小澤には警告し、釘を刺す必要価値があると判断されたからだ。

「どうする。しばらく様子見で休業？」

飯尾の言葉は質問でも意見でもない、忠告だ。尤もだと小澤も思う。しかし、

「ちょっと、やりたい事があるんですけど」

そう言っつて、ミラーに映る飯尾を見た。

「ほう、聞かせてもらえるのかな」

進行方向を見据えたまま、飯尾は言った。

「何だ、もう起きるのか」

重い瞼を無理やり持ち上げながら身体を起こすと、未だ紗のかかった視界の中で、筋肉の壁がそう言った。目を凝らさなくても、それが俵藤の背中だということは解かる。

「そつちこそ、少しは寝てんの？」

小澤は乾いて貼り付いた唇に難儀しながら問い返す。アトリエの俵藤は相変わらず、白いキャンバスを睨んで固まっていた。

携帯電話で時刻を確認する。現在午前七時五分。俵藤邸のアトリエに戻り、そのままソファーに倒れ込むように眠ってから五時間程経っている。睡眠時間としては充分だ。

「忙しそうだな」

俵藤のその言葉は、皮肉とも羨望とも取れる響きがあった。何でもいいから早く描けと言ってやりたくなかったが、流石に居候の身ではそれも憚られる。

「息も吐けぬ急展開の連続だね。ホント、参ったよ」

昨日発覚した予想外の問題を思い起こすと、連鎖して殺意を覚える程の自らの醜態を思い出してしまい、眩暈がするほどの怒りに襲われた。だが、今はその怒りに身を任せる訳にはいかない。気を落ち着かせ、内臓感覚の沈静化に集中する。

ふと気付いて顔を上げると、首を捻じ曲げてこちらを見る俵藤と視線がぶつかった。

「おまえ、隈が浮いてるぞ。ただでさえ顔色悪いのに、すげえ険相だ。本当に撮り憑かれていますみたいだな」

「はッ、笑えないね、そりゃあ」

小澤は鼻にしわをよせ、茶化す様に言つて洗面所へ向かった。

「あれ、おず屋さん？」

国道沿いに建つ大型パチンコ店の休憩室。自動ドアをくぐると、いきなり声をかけられた。目を向けると、そこに湯気の立つ紙コップを持った長身の青年が立っていた。茶色い長髪を首筋でゆるく結び、発達した胸筋や三角筋を誇示する様に黒いタンクトップを着込んだその青年は、細い目を人懐っこそうにさらに細め、小澤を見ていた。

「おず屋」とは小澤の仕事関係での呼び名で、以前適当に付けたネット上でのハンドルに、小澤の姓や、自身が名乗る情報屋が合わさり、本人も知らない間にそう呼ばれるようになっていた。この呼び方は本意ではないのだが、今目前にいる相手の様に、悪意無く使われると、咎めるのも難しい。結局うやむやの内に、「おず屋」が仕事関係や仲間内での通称になってしまっている。

「やあ池君」

「どうしたんすか、今日は打ちに？」

「うん、池君がいなかったら少し打とうかなと思つてたけど」

池と呼ばれた青年は小澤をテーブルの一つに促し、コーヒードいんですかと、訊ねた。小澤はクーラーが効いた店内なのに、草いきれを感じた様な気がした。

「何か御用で？」

「ん、特に何てことないよ。たまには何か美味しいもの食つて、いい酒呑みたいかなって。ほら、この前紹介してくれたお店、マッコリが美味かった」

「いいすねえ、行きましようよ。あそこレバ刺しも美味かつたツしょ？おず屋さん、もつと血になるもの食わなきゃダメツすよ」

しばらくそうして酒や食べ物の話に花を咲かせ、いつにしましよつかと、池はスケジュールを確認すべく携帯電話を開いた。小澤は、

僕はいつでもいいよと言い、

「ところでさ、ここんとこどう？」

訊かれた池は、何がとは問わず、少し考え、

「そうすねえ、白骨発見で全体にざわついているツしよ、狭い田舎すから。その分、裏稼業の奴等は大方鳴りを潜めてンすけど」

池の言葉には、それは承知の事だろうとの含みがあった。だから小澤も肯くだけで応える。池はゆっくりと身を乗り出し、テーブルに両肘を突いた。そして低い声で、

「鬼丸の連中は、ちよつと妙な模様で」

山香会系鬼丸組。

橘・箕都竹連山に炭鉱が在った時代に炭鉱労組と共に発祥した古参暴力団の一つで、現在は新興勢力に圧され衰退の坂を下っている。しかし、背後に大立者が居て、その勢力が一定の水準を割ることは無いとも言われている。それでも小澤の認識は、昔は兎も角、今は落ち目。だが今の小澤にとっては、無視出来ない組織ではある。

「妙つて、どんな？」

小澤も片肘を突き、耳を寄せ、声を低くして訊ねる。青臭さい臭いが鼻をかすめる。

「俺もちよいと関わりのある、流れのゴト師がいるンすよ。そいつ、ここじゃあ鬼丸とつるんでンすけどね」

ゴト師とはイカサマ師のこと。そのゴト師が暴力団とつるむとは、店や台の情報を売買したり、打ち子の斡旋を受けたりしていると言ふことだ。

「連絡係につなぎ付けようとしたら割り振られた番号が繋がらないツてんで、連中のヤサ いや事務所じゃなくて、下っ端の溜まり場の方 に直接行ったそうなんすよ。そしたらいきなりぶん殴られて、今それどころじゃねえつて、追い返されたそうツす。そいつ、青丹顔で俺ンとこに何事だつて訊きにきましてね」

訊かれた池にしても何も答えられなかったが、その後、似たような話がぼつぼつと聞こえてきた。どうも鬼丸組の連中は、何かを探

している様だと。

「ほら、ただでさえ暴追で、そっち系の情報屋はほとんど潜っちゃまってるッしょ。忙しそうにしてたの、おず屋さんくらいでしたからね。そう言や、連中そちらには　ああ、やっぱ行ってないッすよね。で、三下どもが族ヤンのガキまで使って」

ふうんと、頷き、小澤は椅子の背もたれに寄りかかった。

「ただ、どうも下っ端の連中は自分達が何を探してるのか、ちゃんと解かってないらしいンすよ。それで余計に混乱してるっつーか、訳解かんなくしてるみたいなんすけどね」

馬鹿な話ッすよねと、池は笑った。

「それ、いつ頃の話？」

「俺のは一週間前ッすね。周囲から拾った話は、古いので一月程前新しいので三日前ッすとこッす。進行形だと思っすけど」

「何かつてのはヒトかな、モノかな……」

「さてそこまでは　何なら、少しあたってみますか」

池は小声でそう訊ねた。

「筋モンの問題に首突っ込んでても良い事無いけど……場合によっては御願いするかも。また何か変わった事耳に入ったら宜しくね」

笑顔でそう言い、その話は打ち切った。

「時に君、大麻^{ハッパ}を栽培^{うえ}てるね」

小澤のその言葉に、池は見事に固まった。

自称パチプロの池はテコンドー使いの荒くれ者としても知られる、一端の小悪党。仮に、他の誰かに同じ事を言われたら、良くて受け流す、と言うより無視する。悪くすると、と言うより普通なら敵意を剥き出しにする。いきなり殴りさえる

「部屋で大量栽培は拙いよ。どうしても臭いが付いちゃうから」

「……判り、ますか」

「判るねえ。それもパチンコ屋ではつきり判るようじゃ、かなりやばいよ」

池の髪や衣服に付いた一種独特の青臭い臭いはインド大麻のもの

だと、小澤はすぐに勘付いた。町のお巡りさんは兎も角、県警の暴力団対策部、所轄の捜四、薬物対策課等の捜査官、そして厚労省厚生局の取締官なら確実に判るだろう。

「点数稼ぎなんかで摘発されたらバカらしいよ。もしかして、自分でもやってる？」

「いえいえ、ちよいと小遣い稼ぎで植えてみただけで」

「ああ、勘違いしないで」

慌てて言い繕おうとする池を、小澤は苦笑いで止めた。小澤自身は吸わないが、大麻程度を違法薬物として取り締まるのなら、国はそれ以前に禁酒禁煙を法制化すべきだと考えている。

「でもホシさんは好い顔しないツしょ？」

「ああ、ホツシーは健康馬鹿だからねえ」

二人はその場に居ない共通の知人をネタにしばらく談笑し、小澤は呑み事の約束を交わしてからパチンコ店を出た。

効き過ぎた空調で冷やされた身体に、残暑の熱気と、重苦しい湿度が纏わり付いてくる。その不快の中に、さらに不愉快なモノが雑じっている。小澤は苛立ちのあまり、思わず立ち止まった。

相変わらず、視られてるな。

後頭部、首筋を中心に皮膚感覚がざわめく。視線は、相も変わらず付き纏ってくる。鬼魅が悪いと言う感覚は流石に薄れたが、慣れた訳ではない。怖気が嫌悪に変わったのだ。

これなら、ヘタレた連中の方が、まだ可愛げがあるな。

鬼丸組が何かを探している。一月も前から。

その鬼丸組の背後に居る大立者とは、県議会議員の鳥海征一郎とりうみせいいちろう

正確にはその父、料亭とりうみの大旦那、鳥海喜助とりうみきすけ。

昨日の高荷の話もそうだが、何か符号めいたものを感じる。

肩に力が入り、舌打ちが漏れそうになる。それを抑え込み、溜息に変え、肩を落とした。

いっその事、こっちから一歩踏み込んでみるか。

だが、踏み込むためには、まだそれに十分な取っ掛かりを見い出せていない。少し体重を預けただけで崩れてしまう様な脆いものは駄目だ。しかし、後手に回っている限り、いつか喰われる。それが嫌なら、今すぐ全てを投げ出して逃げるか、一步踏み込んでより深い情報を入手し、状況掌握に努めるか。

警察は、小澤逸郎の名を掴みながら動いていない。

まず浮かんだのは、小澤を餌にクライアントを釣上げようとしている警察内の他の部署が横槍を入れたという可能性。小澤に警告を発したクライアントも、そのことを危惧していた。この手の捜査員は流石に侮れない。だからその可能性は今も消えていないし、用心はしている。

次に浮かんだのは、県議会議員の鳥海征一郎が県警に圧力をかけて止めさせているという可能性。この場合、鳥海は小澤が自分にとって、非常に都合の良い情報を握っていると判断していて、当然それを公にしたくないと考えている事になる。その情報が県警に渡るだけなら握り潰せもするが、下手に法廷にでも持ち出され、マスコミ沙汰にされたりしては困るという事だ。

蓋然性　とまでは言えないが、可能性が高いのはこちらだろうと、小澤は思う。

小澤は鳥海征一郎自身とは接点を持たない。接点があるのはその息子、鳥海力也^{とつみりきや}。

この男の事は子供の頃から知っている。小中学校は学区が同じだったし、何の因果か高校まで一緒になった。一学年違うが、十年近い付き合いだったと言える。しかし、その関係の密度は希薄そのも

の。直接会った事は数える程しかない。

鳥海力也は当時から馬鹿ほん、馬鹿大将と陰口を叩かれていた。不良の取り巻きは多かったが、本人に人望があった訳ではない。兎に角尊大で粗暴、そして騒ぎを好む割に陰湿な面を持つ男だった。

箕都竹高校の老教師高荷は、鳥海力也の過去の悪行も含め、重要な情報を大量に抱えていた。その内容に、今も小澤は当惑している。鳥海力也が何をしてもお咎めなしだったのは、県議である父が学校に圧力をかけているからだ、小澤が在学中の頃から学生の間でも囁かれていた。実際には、鳥海征一郎は県教育委員会と癒着していた。

公立校教師は各都道府県の教育委員会の支配下にある。唯々諾々と従う以外の選択は、仕事を変えるか他所の土地へ行くか。そしてどこでも同じ様なものだという諦観の言葉が、彼等が無気力に押し流す。鳥海力也が在学していた三年間、箕都竹高校は県教委幹部からのお達しで随分無理を通さなければならなかったそうだ。小澤のような職種の間が高荷と接触したと知り、鳥海征一郎は不愉快極まりないと感じただろう。だが、問題はそれだけでは収まらない。高荷は平山美貴が二年生の時、ある相談を受けていた。

「平山君は鳥海力也に付き纏われていたらしい。今で言うストーカーだな」

小澤にそう告げた高荷の顔は、再会した時点より格段に老け込んで見えた。八年前、平山美貴の失踪を彼女の家族が作ったピラにより知らされて以来、高荷は心に蟠りを抱えていたらしい。当時は繋げる事も出来ない程に、情報が欠落していた。白骨死体の身元が判明した時、漸くそれは連結し、小澤の訪問は啓示の様にその連結を補強した。だがそれでも確証は無く、高荷の告白を得るまでには、小澤も腹を割って話さなければならなかった。

「彼女は家族や友人にはその事、言っただけですかね」

家族が知っていたのなら、捜索願を提出した時点で警察の生活安全課にもその話をしたはずだ。そして彼女の捜索は、もう少しまし

なものに 否、大して変わらなかつただろう。それは誰かを責めたい気持ちが生んだ、希望的観測だ。高荷を責めることもできない。「彼女にしても相手が相手だったからな。おそらく相談を受けたのは私一人だ」

そして高荷も、その事を今まで誰にも言わなかつた。でなければ、今頃マスコミがそれを流している。

「ストーキングは、続いたんですか？」

「平山君の言葉では、私に相談してしばらくしてから止んだそうだが、少なくとも私はそう聞かされたし、安心もしていた」

その言葉に嘘はないだろう。ここまで話せば、中途半端な言い繕いは無意味だ。

「でも、先生は鳥海力也を疑っている。そうですね？その根拠は？」

「あの男は、執念深い」

忌々しげなその言葉には、積年の感情が重く凝っていた。

小澤の知る限りでも、現在に至るまで鳥海力也の性質、行状は改まっていない。聞いた話では、とうに一族からも見離されているらしい。ただしお目付け役として、鬼丸組から何人かが付けられているはず。

ここ数日、小澤は自らの周辺に監視の姿を見ていた。それが鬼丸組の構成員だということはすぐに解かつた。仕事上、近在の暴力団、その構成員の顔は概ね把握している。仮令知らない顔でも調べる術は有るし、窓に偏光フィルムを貼った車を使われても、その車が看板の様なものだ。しかも、彼等の監視尾行は警察のそれに比べてもはるかに無様で稚拙。だから巻くのは簡単だし、俵藤邸への出入りや、昨日の様にクライアントに呼び出される等、その必要があつた場合は実際に巻いた。それもこちらが監視尾行に気付いていると気取られない様に。そして、律儀に彼等の監視下に何食わぬ顔で戻る。鬼丸組の監視達は、小澤をしばしば見失う事を上へは報告していいのではないだろうか。隠れ家を見付ける事も出来ないで、上から叱責を受けないのかと他人事ながら心配になる。半分はそれが目的

でやっているのだが。

何故鬼丸組が自分を付回しているのかが解からなかった。当初は鳥海の私有地に入り込んで死体を見付けた事が怒りに触れたくらしいか思い浮かばなかったから。だが、それにしても遣り口が妙だ。嫌がらせをするでもなく、遠巻きに見張っているだけ。

監視に余人を使わない理由は先ほど池も言っていたが、暴追キャンペーンの影響で子飼いの情報屋が皆使えないから。

問題は、荒事が本業とも言える組織成員が、直接攻撃的な手段に訴えることなく、慣れない監視に甘んじて耐えている事。暴力団構成員とは、地道な辛抱や忍耐とは縁遠い存在。上から余程強制力の高い命令を受けなければ、地道な辛抱と忍耐を大いに必要とする監視活動など出来ない。

まあ、出来てないから丸判りなんだけどさ。

そもそも箕都竹高校を訪ねたのも、特に平山美貴の情報を求めての事ではなかった。何か拾えればそれにこした事はないとは思っていたが、本来の目的は鬼丸組の監視を引き摺り回し、ボ口を出させ、何が進行しているのかを掴む。その段取りの一つだった。そのためには幾つかハズレを重ねて引いた方が良く。いかに自分達が無駄な事をしているか思い知らせてやるつもりだった。ところがいきなりアタリを引いてしまった。

鳥海力也は平山美貴失踪に関わっている可能性が高い。そして、鳥海征一郎がそのことを知っている可能性も同じく。だから彼女の死体を鳥海の私有地で発見した小澤を鬼丸組が付回し、鳥海征一郎は警察が小澤に事情徴収をすることすら止めたのではないだろうか。仕掛けるなら、鳥海力也だ。

とは言え、これはまだあまりに短絡過ぎて穴だらけの憶測に過ぎない。だが、この土地に生き、鳥海の一族を知る者には有り得ると思わせる説得力がある。

しかし、違っていたら馬鹿ほんがどうなるうと知った事ではないが、隠然たる力を持つ古参県議と、その力の具現である暴力団

をさらに怒らせてしまつ上、クライアントも小澤を切り捨てるだけでは済まさないだろう。

それでも、小澤はこの線で大きな間違いはないと考える。否、ほぼ確信している。

幸い高荷が平山美貴からストーリーカーの相談を受けていた事を知るのは、高荷と小澤の二人だけ。小澤が高荷に接触したと鳥海が知つても、ここまでの話が出たとは思うまい。鬼丸組の無能な監視では盗聴でそれを知る事も叶わない。ただし県議と県教委の癒着は今も続いているだろうし、それも鳥海にとって好ましくない話題には違いない。これまでは鬼丸組も遠巻きに見ているだけだったが、すぐにでも強硬手段に切り替えてくるかもしれない。

そしてここに来てもう一つ謎が浮上した。池がもたらした鬼丸組の不可解な行動についてだ。少なくとも一月程前から何かを探し続けているらしい。それが今も続いていると言つからには、対象は小澤ではないと思われる。これは鳥海絡みではなく、鬼丸組だけの問題なのかもしれない。しかし、根は繋がっているかもしれない。

一月前に、何があつた？

その頃、何か変わった事はなかつただろうか。誰かからそんな話を聞かなかつたか。そう考えて、小澤は一つの可能性に辿り着いた。道端で、しばし呆然と立ち尽くす。だが、やおら携帯電話を取り出し、今別れたばかりの池に宛ててメールを打ちだした。それが済むと続けざまに一之瀬葉菜にもメールを送る。

その可能性自体は、前に、少し違う形ではあつたが一応考えていた。よもや、今頃になって、しかもこんな形で再浮上してくるとは思いもしなかつたが。

三章 5

5 a

呼び鈴が鳴る。

インターフォンの通話ボタンを押す。

『こんにちはあ、ピザラットです』

「ああ、はいはい」

今日は早いな。

そんな事を考えながらドアを開ける。

「毎度お」

ドアの向こうに立っていた人物は、そう言っただけで微笑んだ。だが、その人物はピザの配達員ではない。はっとして、慌ててドアを閉めようとしたが遅かった。その人物は、ドアと入り口の間に頑丈なワーカーキングブーツを差し込んでいた。脛を蹴って押し出そうとすると、ドアノブを掴んでいた手に爆発の様な衝撃を受け、それは全身を走り抜ける。ノブを掴んだまま身体を仰け反らせ、半ば飛ばされる様に後ろに倒れた。

スタンガンか!?

玄関に倒れたまま顔を上げると、ドアを開けて人物がゆっくり入ってくるどころだった。

「どうもどうもすみませんねえ。でもまあ、お互い様だよな？安全靴履いてたってスチールドアに挟まれたら痛いんだよ？」

僕のこれ、オサレブーツなんだからと、人物は芝居じみた苦笑を浮かべる。

「だ、誰だあんた」

「ありや、そりゃあ無いでしょ？つーか、お互い自己紹介なんて今更じゃない」

「知らない！俺はあんたなんか」

「もうじきピザ屋が来るでしょ？ああ、御相伴に預かりたいんで、勝手ながら追加注文しときました。ささ、中へ中へ」

尚も非難を続けようとすると、人物は小首を傾げて微笑み、口を開いた。

「ポテマヨグラタンのLにチーズフォカッチャ、チキン2ピース。豪勢だねえ。僕はベーコンマッシュルームのMにビール頼んじゃった。あ、因みにログインIDは」

淡々とそれらを諳んじ、光を返さない暗い瞳で見詰め、言葉を繋ぐ。

「何ならパスワードも言おうか？」

宅配ピザの注文は電話ではなく、ネットのケータイサイトで行っている。つまり

「ハッキングしたのか……」

「だからあ、お互い様でしょ？それと、これ以上の抵抗は止めてね。僕、荒事は苦手なんだから」

「……だから、何なんだよ、あんた」

「あれ、しらばっくれんのもいい加減無しにして欲しいんですけどねえ」

薄暗い玄関で見上げる侵入者は、背こそ高くないが不気味で威圧的に見える。残念そうな口調も、気味の悪さに拍車をかける。荒事に自信の無い者程、こういった状況で何をしでかすか解からない。

「いや、だから、何しに来たって訊いてるんだよ、俺は」

慌ててそう告げると、人物はやはり少し残念そうな顔で言った。

「まあね、確かに来意は告げちゃあいませんが。その辺は既にお察しの事と思ってましたかねえ」

声のトーンが低くなった。それでも普通に聞けばそこに脅している様な響きも雰囲気も無いのだろうが、気味の悪さは格段に増した。息を飲む。その時、再び呼び鈴が鳴った。

人物はTシャツの裾の下に手を入れると、そこから黒い塊りを取

り出した。それは対象に電撃を与える非殺傷兵器ではなく、傷だらけで不恰好な中国製自動拳銃トカレフ 殺傷兵器だった。銃口をこちらに向けると覗き窓から外を伺い、そのままドアを開ける。

「こんにちはあ、ピザラットですう」

配達員の軽い声が聞こえる。人物は無造作に対応している様に見えるが、外からは、銃はおろか、玄関に転がったままの自分もドアの影になっっている。人物は笑顔でピザを受け取りつつ、片目と銃で巧みにこちらを牽制している。支払いはカード引き落としなので、財布を出す様な手間も無い。

「どうもありがとーございましたあ」

人物はにこやかにドアを閉じ施錠すると、受け取った荷物を掲げて見せた。

「さあ、届いたよお」

もう片方の手には、拳銃を持ったまま。

「どう、ちよつとは落ち着いた？」

人物は憐れむ様な眼でこちらを見る。

「今、僕はピザ屋の兄ちゃんに素顔を晒しました。解かるよね？ここで君を殺すつもりなんて無いんだよ」

無言で肯く。何度も、激しく。

「でも、この銃が玩具かどうか試そうなんて思わないでね。撃つつもりは無いんだけど、ほら、不慮の事故ってあるでしょ？」

それは尤もだ。肯くことしか出来ない。

「じゃ、会食といこうか。お互いに親睦を深めるためにも」

5 b

「みつからないなあ、どういうことだっけきてんだよお！おおッ！？」

怒声が響き、テーブルが舞う。それは床に打ち付けられて轟音を経て、ジャンクフードの欠片や袋、飛沫と転がるビールの缶等と共に

に、荒んだ部屋、荒ぶる住人の精神を演出するオブジェとなる。

これは一種の呪いの儀式^{まじな}。

空気は氷結、かつ帯電する様な緊張感に飽和し、その場に居る者達は皆、己が不徳不明を恥じ、眼を泳がせ、おろおろと謝罪の言葉を口にしなければならぬ。だというのに、皆、しらけた眼で呪いの主を見ていた。

「ンだあてめえら、わかつて」

「やめましようや、力也さん」

さらに虚勢を張ろうとする男の言葉を、取り巻きの一人が遮った。「俺らあんたの部下でも舎弟でもねえ。元々命令される謂れなんざあ無えンすよ」

「お坊ちやまがよお。いつまでもパパの脛齧って、他人に尻拭いさせてンじゃねえよ」

苦笑、失笑、嘲笑、下卑て粗野な嗤いがその場を満たす。

男は解かつていなかった。もう随分前から自分が疎まれている事を。否、昔から疎まれてはいたが、今程ではなかった。根が小心者故に、周囲の人心の変化には敏感だった。今は、いつからそうなったのかも解からない。

「駄目だあ、力也君ヤクやり過ぎなんじゃあねえのお？」

「ああ、脳が溶けちまってんなあ」

解からない男は尚も暴れようとする。それが自分の正当な権利だと主張する様に。

「ちいいいくうそおおおおがあッ！」

だが、そんな権利は既に無い。

「うぜえ」

一人が男を蹴倒す。

「簀巻きにして転がしとくか」

一人がそんなことを言う。

「それがいいかもな」

一人はそう言って、転がる空き缶を蹴り上げた。空き缶は弧を描

いて男の頭に当たる。

「なあ力也さん、あんたの御父上はもう、あんたの行状は勘弁ならんときさ」

男は涎を垂らし、犬の様に荒い息遣いで取り巻き達を睨み付ける。

ちくしよう、ちくしよう、ちくしよう。

探している。ずっと探している。見付からない。いつまで経っても見付からない。大切な物が無くなった。大切な物が奪われた。

あいつがうばったにちがいない。

唯一、手掛かりと思しき者が居た。そいつの事は子供の頃から知っていた。嫌な奴だった。弱くて、口ばかり上手くて、そのくせ言う事を聞かない。嫌な眼をした奴だった。

おれのまわりは、むのうばかりだ。

迂闊には手が出せないと、取り巻き達は言った。得体が知れないと、そいつは信管が露出したまま動き回る地雷の様な奴だからと。そいつが雇われている組織も問題だと、輪を掛けて得体が知れないと。だからずっと監視していた。付かず離れず。何と温くまだるこしいことをする奴等だと男は思い、罵った。そしてそいつは消えてしまった。とろ臭い事をしているから逃げられたのだ。

まったく、やくたたずばかりだ。

悔しくて情けなくて、涙が出る程お粗末な展開。男は自分が涎どころか涙と鼻水まで垂れ流していることも判らない。

ちくしよう、なんでみっちゃん、あんなやつを

「ああ、やつてらんねえなあ」

「ほんと、勘弁して欲しいツすねえ」

口々にそんな言葉を残し、取り巻き達は部屋を出た。御丁寧に照明まで消して。男は独り暗い部屋で、芋虫の様に身体を丸めた。

怨嗟と憤怒が呪詛の様に体中を駆け巡り、内側から蝕んでゆく

しね、しね、しね、しにやがれ！クソジジイも、クソオヤジも、おにまるぐみのバカどもも、みんなしにやがれクソやろう！しなねえならおれがころしてやる、おれがおれがころしてころ

してころして

「 さ…… キヤさん」

男の閉じた思考に割り込むモノがある。

「あの、力也さん」

目を向けると、上から覗き込む様にしてこちらを伺う者が居た。

「力也さ……、 いてますか」

取り巻きの一人、一番若い、三下のカス。カネモトとか呼ばれて
いたか。

「 ず屋が見付かりました。俺その 」

男は手を伸ばし、カスの襟首を掴んだ。

「おれが、じきじきにつかまえてやる。ほかのやつらはやくたたず
だ。つかえねえ。おれをあのクソのところへつれられていけ。おれが
つかまえる。おれが 」

枝葉 3

枝葉 3

薄暗い、人気の無いオフィスに陽気な声が響く。

「初当選以降一〇期連続当選！趣味はゴルフと読書……」

ホームページに記載されたプロフィールを、飯尾蔵人いいくらんどは失笑気味に読み上げる。

「民慈県政会所属。大合併による選挙区変更も乗り切った古強者。議会の途中解散は無かったから、議員生活もかれこれ四〇年。人脈の広さ深さは推して知るべし、ですね」

飯尾の机は一般社員用の階に在り、退館時間を過ぎると節電のため、照明は落とされ、空調も切られてしまう。部屋の中にはパソコンの唸るような冷却ファンの音と、熱がこもっていた。

九月も終わりに近付いてきたが、この土地の夏はまだ、終わっていない。

汗の滲む手が、ブラウザの別のタブを開く。そこにはウェブ百科事典の地方議会の頁が表示されていた。それによると、この県の議員定数八八名。その内、政府与党の民慈党に所属する議員は四一名。「本人は県土整備委員会と少子・高齢化社会対策調査特別委員会に所属。が、所属外の委員会でも、根回しは出来ますからね。こりゃ警察の腰掛キャリアや、県教委の御偉いさん方と仲良しになるのも、また必然ってヤツですかね」

飯尾はタスクバーにポインターを動かし、ブラウザの上に別のファイルを表示させた。

「憶えてますか、八津の中学のいじめ自殺。ええ十七年の。あの時質疑の調整をしたのが ええ、まったく反吐が出そう や、こりゃ失礼しました。あ、無論中央への太いパイプも持ってますよ。」

国政に携わる同郷の先生とか。……はは、そうですね。確かに仕事はちゃんとしてますな。だからこそ実績を以って対立候補を抑え込んでくれた。ですが最近の子飼いの連中の質が落ちた様でしてね。手抜き工事が露見して、ええ、これは次の統一地方選までに手を打たないと」

一端ブラウザを最小サイズにたたみ、別のファイルを開く。

「別人名義だけど、手広いなあ。実家の料亭なんてステイタス以外の意味はありませんね。飲食店だけでも五件、焼肉屋まで持ってやる。ホテルにゴルフ場、建設、造成造園業に、街金も二件程抱えてますね」

言葉を切った飯尾は椅子の背もたれに体重を預けた。凝った首をぐるりと回し、机の上の煙草に手を伸ばそうとする。が、その手は途中で虚しく宙を掴み、そのまま戻された。流石に電話越しでも、仕事中に啜え煙草で話して良い相手ではない。代わりに、封を切った五〇〇mlのペットボトルを取り上げ、緑茶を口中に流し込んだ。「え、息子の方？取り立てて見るべき経歴は持ってませんな。それともこいつの華麗なる……でしょ？聞くに堪えないと言うか、私は口を上すのも嫌ですよ。ええ、この男に関して言えるのは、どうしようもない屑ってこと、くらいですな」

PCのモニターに目を戻し、ファイルに記載された文章をスクロールしながら、飯尾は侮蔑の表情で顔を歪ませる。

いや、俺達みたいな屑に言われるってことは、こいつは屑以下だな。

「こいつは放っておいても遠からず自滅します。でも自滅の仕方次第じゃ、父親は共倒れ。それじゃ困ると思う人間は、少なくともいますよ。中には、『じゃあ、具体的にどうしようか？』と考える者も当然出てきますな。彼等にとっても死活問題でしょうから」

電話の相手は短く問いを発し、飯尾はその度に相槌を打つ。語るのには主に飯尾だが、その様子から、意思の疎通に支障は無いことが判る。

「そうです。多少強引な手段を採っても、彼等は我々を拒めません。いや、むしろこの土地ではその強引な手段の方が馴染みがよく、理解も速いでしょう。何せ、当の先生自身がその力を使ってきたのだから。……いやいや、連中の様に泥臭い遣り方は。ええ、より、スマートに」

モニターの淡い光を浴びて、飯尾の汗に濡れた顔も照り返しを放つ。

「ええ、確かに。確かにその通り、なんです。今回の件、おそらくは彼の名前の一人歩きが原因で、それも元はと言えば、ウチの仕事で実績を上げ続けてきたからだ、私は思ってますよ。それは取りも直さず、彼の優秀さの証明、とも思ってますね」

淡く冷たく光る飯尾の顔に、深く刻まれる陰影。その口元の影が、吊り上った。

「私達がこの地に根を下ろし三年。そろそろ、枝を広げ、葉を繁らせても良い頃合じゃないですかね」

四章 1

四章 1

「はい小澤 ああ、うん、うん。どうもどうも、ありがとねえ。いや後は仕込みだから。うん、そんな事ないって。今度のは全部僕の奢りって事で一つ。でもホッシーには内緒ね。はは、あ、それとミハルツチにも宜しく言つといて。うんじゃ、毎度お」

携帯電話の通話を切り、小澤は煙草を啜え、火を点けた。風に流された紫煙に弄られ、思わず目を瞑る。

道端で煙草を燻らせながら再び携帯電話を取りだし、画面を開く。橙色の陽射しに濃く長い影が路地を彩る中、待ち受け画面を睨む。

ふん、脅しが足りなかったかな？

舌打ちして画面を閉じようとした時、メールの着信を告げる振動が手に走った。送信者を確認し、メールを開く。セブンスターを貼り付かせた唇がニタリと笑みの形を作った。

「三下が一丁前にじらしてんじゃねえよ」

ぱちりと音を経て携帯電話を閉じ、小澤は夕暮れの路地を歩き出した。

狭く入り組んだ路地を抜けると、風浜海岸の堤防が見えてくる。

潮の匂いが鼻をくすぐり、潮騒が耳を撫でる。

傍に建ち並ぶ安アパートの一つ、その一階の扉の前に立ち、鍵束を取り出した。

解錠し、部屋に入る。

室内の空調は効いていて、肌寒い程。狭い部屋には数多の電子機器がひしめいていて、その殆どが通電、または稼働していることを示す光を点している。そして今は、複数のディスプレイが映し出す光が部屋を仄かに染めている。それらの前に陣取る部屋の主が、回

転椅子を回して振り向いた。

「何ぞ用？」

一之瀬葉菜はブリックパックのコーヒー牛乳をストローで啜りながら訊いた。

「ん、ちよいとお誘いに」

そう言つて小澤はコンピュータの山、ハツカーの巢を眺めた。この部屋中を埋め尽くす機材とそれらを詰め込む什器は、葉菜が得体の知れない通販や、自らジャンク屋に赴いて厳選し、集めたものだ。アパートの二階、ちよどここの部屋の真上にある葉菜の居住用の部屋の鍵は小澤は持つていない。しかし、借りたばかりの頃の部屋代と莫大な電気代は小澤の払いだったため、今でもこここの鍵の所有を許されている。ケープルや工具が散らばり、ろくに座るところも無い部屋だが、小澤はガラクタを足で払い除け、床に胡坐を掻いた。幾つモノ空冷ファンが低い唸りを上げ、部屋の中は重く低い騒音に包まれている。

お誘い？何の？と、気怠げに葉菜は問いを返す。しかし、

「ああ、そう言えばこの前のあれ、どうなった？」

声のトーンを上げ、別の問いを重ねた。この前のあれとは、小澤が依頼した、心靈動画のアップロード主を調べる件。それ自体は既に終了して、一週間前小澤に報告済みなので、その顛末についてである。

「ああ、それはまだ進行中」

答えてから身震いし、それよりここ寒いよと、小澤は付け加えた。

「そか、じゃ、上に行こか」

そう言つて、葉菜はクッションを敷き詰めた椅子から立ち上がり、大きく伸びをした。そして、先の質問を思い出す。

「ああ、で、お誘いつて何？」

「うん、キツネ狩りにね」

小澤も立ち上がりながらそう答えた。

「キツネって　はあッ？」

「狩りつて言ってもハンティングじゃないよ。ウオッチングね」
開いた口の塞がらない葉菜を他所にそんなことを言い、続けて小澤は、葉菜も一緒に行こうよと、朗らかに笑った。

次の日の夜

「あなたホント暇やね」

運転席の葉菜は助手席で玩具を弄る小澤に向けて、溜め息まじりの言葉を漏らした。車まで出してその暇人に付き合う自分とは、一体何なのだろうと思いつながら。

「はいこれ、葉菜の分」

そんな言葉などどこ吹く風で、鼻唄まじりの小澤は持参の鞆から取り出した物を差し出した。漆黒の表面にはキリル文字と英語の表記。一見小型双眼鏡の様だが、接眼レンズは一つしかない。対物レンズの隣に有るのは赤外線照射装置。それは暗視スコープだった。小澤自身は葉菜のそれより小型でシンプルな、単眼鏡と一目で解かる物を片目に当てていた。だがそれにも赤外線照射装置は付いている。どちらも、結構な値のする精密光学機器。葉菜に渡されたものはビデオ出力端子を持ち、撮影にも使える。電源を入れると星明り程度の光源で、モノクロではあるが克明な画像を映し出す。光源の無い真闇でも、赤外線照射により視力を得る事が出来る。

こんなところを絶対他人には見せられない。交通違反も事故も、絶対におこせない。世間に恥じる様な行爲をしてなくとも、そんな物を持って夜中にうるついている時点で十二分に怪しいのだ。窃視症で盗撮癖のある者と思われても仕方ない。警官の巡回にで出くわそうものなら職質間違いなしで、しかも言い逃れは難しい。

デバガメカップル

不意にそんな低俗誌の冴えない見出しの様な言葉が浮かび、葉菜は悪寒を覚えた。

小澤はこの手の小物を何処からともなく仕入れてくる。ただその

殆どは自分の持ち物ではなく、借り物らしい。

本業の実入りは不安定で、常に小博打で糊口をしのぐ経済状況のくせに、不思議と顔は広く、物品の調達には不自由しない。それに葉菜もこの手の機材を弄るのは嫌いではない。だからいつも呆れはするが、それなりに楽しんでもある。今も内心興味深げに暗視スコープを眺めていた。

「それで、どの辺流すの？」

暗視鏡をグローブボックスに入れ、小澤に訊ねた。そして、フォルクスワーゲン VW Type 2（仕様の国産軽）のアイドリングを上げる。

「そうだね、けづく川沿いに箕都竹山まで行ってみようか」

ん、と頷き、葉菜は車を発進させた。厄介な道筋を辿らされるかと思っていたが、小澤が指定したのは、何の事はないドライブコースだった。

箕都竹山は頂上展望台に到るまで、車なら二筋のルートを選ぶことができる。一つはけづく川上流、近隣の水源たる「いづきダム」と、そのダム湖を一望する「みつづきのうみ公園」を周る道。もう一つは「みつづき山霊園」を周る道。

「ダムの方？」

自他共に認める怖いもの好きの葉菜だが、自ら心霊ポイントを巡るまでの事はしない。季節を問わず、夜のドライブに墓地の傍を通るなど考えたことも無かった。だが小澤は、

「いや、今の時期ならお供え物なんかあるよね？霊園の方にしよう」「はあ？」

「だから、これは動物ウオッチングなんだって。お供え物の饅頭をタヌキが食べに来るとか良く聞くでしょ？」

さも当然の様に小澤は言った。

これは幽霊ウオッチングの間違いではないのかと葉菜は思ったが、口にするに本当に出そうな気がして言えなかった。実際、本物を見たいとは全く以って思わない。

つくづく自分の付き合いの良さに呆れる。後で何か奢らせようか

と思おもするが、こんな訳の解らない事をしている男の財布はあてに出来ないことも解かっている。

「そう言や、今月仕事は？」

葉菜の知る限りでは、小澤はここしばらく金にならない事ばかりしている。それでいて葉菜に低価格とは言い難い依頼をしたり、こうして機材を借り出してきているのだから、いつもの事ながら少し気になる。

「ノルマは達成済み」

小澤は自慢げに鼻を鳴らした。どうせまたパチスロだろう。麻雀パチンコから競輪競馬。小博打で小さくこつこつと中で、それを公共料金の支払いに充てる。一回の稼ぎこそ少ないが、ある意味博徒と言えなくもない生活。本業にむらがあるので仕方ないとも思うのだが、これでノルマが達成出来ないと葉菜の部屋に転がり込んでくるのだから始末に負えない。口さがない者は小澤と葉菜の関係を、ヒモと情婦と言う。実際には全く違うのだが、そう見られても仕方が無いとも思う。

はッ、ホント腐れ縁やね。

隣でセブンスターに火を点けた小澤に、葉菜はあたしもと、催促する。啞えていたそれを、小澤は葉菜の唇に運んだ。自分はよれたソフトパックから新たに一本抜き出して火を点ける。

腐れ縁で、始終呆れさせられてはいるが、この男の隣は意外と退屈しない。

肺一杯にニコチンの煙を吸い込み、葉菜は盛大に吐き出した。

「あんたさ、怖いのが苦手なくせに、こんな夜中に山中の墓場とかは何とも無い訳？」

小澤は一二度瞬きして不思議そうに、何でさ？と、問い返す。

「肝試しじゃないんだし。あの手のは、仕込みだつて解かっているから余計に恐いんだよね。出るの確実だからさ」

照れ笑いを浮かべながら答えた小澤に、葉菜はゆっくりと頭を振った。

「あなたのそのじいじい、」時々ちょっと感じるわ

四章 2

2

車は街並を抜け、道は直線からワインディングへと変わってゆく。ガードレールと反射板リフレクター以外には、道路照明灯と自動販売機、そして時々畑の中でライトアップされた看板がぼつんと浮かび上がるだけの田舎の夜道。周囲の田畑は闇に沈み、丈高く居並ぶ竹や杉の枝葉は、道に覆い被さる様にして星明りを隠す。対向車線に車影は無く、行過ぎるカーブミラーも、葉菜の車のライト以外は映していない。だが、夜更けにも拘らず蝉の輪唱合唱は止まず、じわじわじいじいと実に喧しい。寂しい夜道という感じはない。

「でも夏も終わりかねえ。カエル鳴かないし、この頃は族ヤンもおとなしいし」

小澤は暗視スコープを通して、車窓の景色を横に後ろに眺めながら言った。

「まあ、静かで良いけどさ」

「うん、馬鹿がいないと快適」

こんな山中を走っているとここで出くわせば、それこそ目も当てられない。限度知らずで籬の外れた馬鹿どもに車を囲まれるなど、絶対に御免だ。

葉菜は外の音を聞くために、運転席側の窓を半分下ろした。途端冷たい夜気がどつと流れ込んでくる。だが、それは夜気だから冷たいのではない。箕都竹山は標高こそさして高くないが、それでも街中とは格段の温度差がある。それは昼日中でもはっきり体感できるのだから、夜は尚更だ。

エアコンを切り、オーディオのヴォリュームを落す。小澤も助手席側の窓を下げ、冷たい風が髪を弄るにまかせる。心地好さ気に目

を細めたその顔は、子供の様で猫の様で、偶には夜のドライブも悪くないと、葉菜は思った。が、目前に迫った場所を思い出し、気分はすぐに萎えた。

山の南斜面に広がる、市立みつづき山霊園。総敷地面積約五万坪の広大な墓場は、やはり三桁台は停められそうな程広い駐車場を擁している。しかし、山中でも夜間不届き者に勝手に入り込まれるのを良しとしないのだろう。その入り口は鎖を渡され閉ざされていた。葉菜と小澤は車を大分手前の路肩に停めて、門前まで歩いた。ちなみに正門の方はスライド式の鉄柵で閉ざされ、施錠されている。時間外の来園者を頑なに拒む姿勢だ。

「今時墓荒らしなんていないだろうに」

門柱に貼られた警備会社のプレートを眺めながら、小澤は呟いた。「荒らしはいるんじゃない」

葉菜はその脇で煙草をふかす。

「こんな山の中で？」

問いながら、膝のポケットから携帯灰皿を取り出し、蓋を開けて葉菜に差し出す。葉菜は肺一杯に吸い込み、一息で煙草の残りを灰にして、それを小澤の手の上の灰皿に落した。そして盛大に煙を吐き出す。

「ほら、さっき言った族ヤンとか」

成る程と、小澤は相槌を打つ。暴走族ならそんな罰当たりなこともしかねない。墓石だろうが平気でペンキを吹き付けそつだ。

「で、どうすんの？」

門が閉ざされている以上、良識ある大人としては入るべきではない。それ以上に好んで入りたい場所でもない。葉菜はそう思ったが、「ん、まあ中に入る必要は無いしねえ」

小澤はスコープを右目にあてると、柵に沿って歩き出した。葉菜は肩を竦めながらも片手に提げていた暗視スコープの電源を入れ、後続く。

「でも、こんな場所で警報鳴っても、すぐには駆け付けて来れんでしょうに」

場所柄か、車を降りてからの葉菜は自分でも不思議に思いながら小声になっていた。小澤もやはり雰囲気からか、囁く様に返す。

「そりゃそうだ。墓守っていうか、管理人くらいは居るのかも知れないけど　一人じゃちよつとね。通報は警備会社経由で警察にも行くんだらうけど、どちらにしる余裕で逃げられるんじゃないかな。危なくなっても山の中に逃げ込んじまえば、翌朝明るくなるまでは、まず山狩りもされないだらうし」

「余程の事じゃなきゃあ、山狩りとかせんでしょ」

「そりゃそうだ。まあ現行犯逮捕は狙ってないんだらうね」

管理人だつて麓からの通いだらうしねえと、小澤は笑った。残されたビデオ映像などを元に捜査するつもりかもしれないが、防犯目的のはずが随分後手だなど、葉菜は思った。

「カメラ、動体検知かな？動物とか入り込んで、センサー反応するんかいな？」

「場所が場所だしね。人間の背の高さに合わせてんじゃない？匍匐前身なら無問題とか」

「試す？と、問う小澤に、」

「あたしは御免。あんたがする分には止めんよ」

「僕だつてそんな泥塗れは御免だよ」

御免と言えば、夜中に山中の墓場の周りをうろつく事自体、本当なら御免なのだ。

確かに怖い。が、こうしてその場に立つと面白いと言えなくもない。葉菜は前に行く小澤の姿をモノトーンの世界に追いながら、忍び笑いを漏らした。

霊園周囲の道は緩い傾斜の遊歩道になっていた。細い丸太が数十センチおきに階段状に並べられている。その脇に並ぶ木々も原生のものではなく、斜面を削り、整地した後に植林したのだらう。どの木の幹も細い。まるでどこかの公園やキャンプ場の様だ。反対側、

高い鉄柵とそれを包むように植えられた垣根の向こうには、整然と墓標が並んでいることを忘れてしまいそうになる。

「つても土葬なら兎も角、火葬して納骨だし、ここで人が死んだ訳じゃなし、お化けの出そうな場所じゃなくなってるよね。今日日の日本の墓地って」

悟った様に言う小澤に、葉菜は軽く噴き出しそうになった。

「あんたが見たのは実際人が死んで、そのまま骨になったとこやもんね。そりゃ恐かる」

「だから、そんなもん見てないって」

「さよけ」

「あ、そこ、足元気を付けて」

言われた途端、葉菜は足を踏み外した。左足が地の底に吸い込まれる様な感覚に、一気に総毛立つ。だがすぐに小澤が腕を取ったので転倒も転落もせずに済んだ。

「危ないなあ、何のための暗視鏡だよ」

見ると、歩道の一部がごっそり抉れ、脇の並木も無残に薙ぎ倒され山肌を露にしている。どうやら植林の後、根付きが悪かったらしい。その向こうは急な下り斜面　と言う以上に、既に崖になっていて、原生の森林の中に消えている。葉菜はあらためてぞっとした。「これ、足元見難いやん。懐中電灯の方がよっぽど」

照れ隠して悪態を吐いている最中に、葉菜は言葉を失った。小澤は少しの間訝るが、はっとして葉菜の視線を追う。そして、固まった。自分達が歩いてきたその道、肉眼では闇に吞まれてしまったその向こうに、見慣れぬものが浮かんでいた。

蛍火の様に揺れ動く、淡い光の玉。

勿論蛍ではない。この近く、ダム湖下に在る小川では蛍の放流が行われているが、成虫が舞うのは初夏で、今は晩夏。それに、その光は蛍にしては赤味が強く、遠目にも大きい。

違う、大きく成ってるんだ。

変化に気付き、葉菜の全身の肌はまたも粟立った。ゆらりゆらり

と揺れながら、確実に大きくなり、形を変えてゆくそれは
ひとがた

小澤が固唾を呑む音を、葉菜は聞いた。

あれは何かと訊こうとして、葉菜は口を塞がれた。小澤は葉菜の
身体を引き寄せ、耳元に押し殺した声で早口に囁く。

「あれを見るな。足元に気を付けて、行く手にだけ集中しろ」

再びスコープを目にあて、小澤は殆ど小走りに歩き出す。葉菜の
腕を強く引くその手は、微かに震えている。その震えは、葉菜には
悪寒として伝染した。

原初的で純粹な感情が沸き起こる。今までの興味本位なものでは
なく、逃げ出さずにはいられない、本能的なもの。

山中異界 そんな言葉が不意に頭に浮かぶ。ドライブコースが
あり、ハイキングコースもあり、小さいながら温泉地でもある慣れ
親しんだこの近所の山も、やはり異界なのだと思ひ知らされた気が
した。

胃を中心にじわじわ痺れる様に広がる不安。全身の皮膚をちくち
く刺しながら滲む汗。涙が滲み霞む視界。後ろを振り向き確認したい
が、小澤の言葉が心に楔の様に打ち込まれ、それを許さない。丸太
の段に爪先をぶつける。積もった落葉に足を捕られる。何度も、何
度も。足元だけを見ていようと思ったが、それもままならない。小
走り同然の早歩きは、いつの間にか疾走になっていた。

駆ける。ざくりと落ち葉を蹴って、みしりと丸太を踏みしめ。

駆ける。はあはあひいひいと、荒く獣の様に喘ぎ。ふつと、鋭く
吐いた息の音も、自分のものか同行者のものか判らない。

いやだ、いやだ、いやだ。あんなもの知らない。あんなもの見た
くない。

葉菜は兎に角その場を離れたい一心で、もがき、あがいた。だが、
気が急ぐばかりで身体は思った様に動かない。そして遂に足を取ら
れた。上体が大きく泳ぐ。何かに縋ろうと伸ばした左手が、ぐいと
掴まれ引き寄せられる。小澤はそのまま葉菜の身体を抱える様に腕

を回し、倒れる様に地に伏せた。葉菜はまた小澤の手に口を塞がれる。

その時、悲鳴が夜闇を貫いて響いた。

四章 3

3

「人魂 いや、差し詰め狐火つて奴かい」

「藪金」の店主は太い腕を胸の前で組み、興味深げに訊いた。

キツネ狩り霊園ドライブ翌日の夜の蕎麦屋。客は小澤と葉菜の二人だけ。カウンターのの上には徳利が数本に、枝豆、豆腐、蕎麦搔に天ぷらなど肴が数品。

「あはは、上手いねおっちゃん」

小澤は力なく笑い、冷奴を口に運んだ。隣の葉菜はうんざり顔で、笑い事やないよ。兎に角この世のものとは思えんかった」

「驚いたね、御前さんでも怖がりたりするんだな」

「昨日はもつと可愛かったんだよ」

「うっさい黙れ」

店主は呵々と笑い、カウンター越しに常連客二人連れを眺めた。

「そのなんだ、暗視鏡ツてので見てみりゃ良かったじゃねえかよ」

小澤は疲れた笑顔で酒を呷り、

「そんな余裕、全然無いよお」

ゆっくり溜息を吐き、自分のぐい呑みに酒を注ぐ。小澤の手にある二合徳利は器を満たす前に空になり、葉菜は自分の傍にあった徳利を手に取り、それに注ぎ足した。

皺深い顔に苦みばしった笑みを浮かべ、店主は空いた徳利を下げると新たな酒を出す。

「珍しく二人揃ったかと思やあ、相変わらず面白いことしてんな、御前ら」

「これと一緒にせんで」

葉菜は心底嫌そうに小澤の肩を押し、小澤はやめてえと、情けない声をあげる。

「で、悲鳴つてのは何だったんだよ」

小澤はへらりと笑い、葉菜は一層苦い顔をして、箸でちぎった蕎麦掻を口へ放り込んだ。

「ツたく、聞いた瞬間死ぬかと思ったわ」

「葉菜、足滑らせてね、掴まれたままだったから腕が抜けるかと思っただよ」

「それ、あたしが重いって言いたい訳？」

葉菜は拳で小澤の肩を殴った。

「今朝方 いや、もう昼かな？ 霊園下の崩落した斜面で、動けなくなってる鳥海力也が保護されたんだって」

小澤のその言葉に、店主と葉菜は文字通り目を丸くした。

「何かヤク中で脱水症状だったり、打ち所が悪かったりで大変なんだったさ」

「おいおい、鳥海の馬鹿ぼんかよ。何やってんだ、そんな所で」

「さあ？ 僕らそのまま逃げたから。元来た道は恐くて戻れないから、ぐるっと廻って」

小澤は宙に指で円を描き、ぐるりを強調してみせた。葉菜もうんざり顔で頷く。

「あのただっ広い霊園をひたすらね」

何の罰ゲームかと、葉菜は小澤を睨み、ぐい呑みに口を付けようとして手を止めた。

「で、トリウミって誰？」

店主は、ああ知らねえだろうなああと、包丁を使いながら鳥海力也について掻い摘んで説明した。そして、二人の前に新たな皿を追加する。

「へえ、あの料亭のお。でも、ホントあんなとこで何してた訳？」

「さあ？ 僕らみたいな趣味人とは違うし」

趣味人ねえと、葉菜は呆れ顔で受けながら、「でも、あの遊歩道の地滑りは酷いねえ。危うくあたしらがそうだったのかも」

植樹された木が根付かず、ごっそりと道を抉って崩れていた様と、

そこに足を取られた時の感触を思い出し、葉菜は改めて怖気を震った。

「てことは、そのナンタラも 見た訳？」

「さて、見て驚いて足を滑らせたのか、単に足元不如意で落ちちゃったのか。本人まともに話せる状態じゃないらしいし。いや、怪我もだけど、ヤク中の方で随分なとこまでイっちゃってるって」

「何だよ足元不如意って」

「おっちゃん、突っ込んだら負けよ」

刺身を摘み、酒を一口啜って葉菜は小澤に目を向けた。

「でもだつたらさ、悪いことしたかな」

「何が？」

「そのナンタラ。あたし達が気付いてれば大事にはならなかったんじゃない？」

小澤が目を丸くし、珍しく殊勝な事言うねと言つと、その脚を葉菜は蹴った。

「仕様が無いじゃん。あそこに僕ら以外の誰かが居たなんて知らないし、ほら、行きに葉菜の車の前後は麓から壺園まで、一台も走ってなかつたツしょ？壺園に着いてからだつて、停まつてる車は無かつたし、人の気配だつて無かつたし」

それもそうかあと、葉菜はカウンターに頬杖を突き、ぐい呑みを口に運ぶ。

「ヤク中ツてンなら真つ当な奴じゃないんだろうし、巻き込まれるのも嫌だし、あれで良かったのかもね」

そう言った葉菜は、一瞬だが見透かす様な眼で小澤を見た。

葉菜にしても店主にしても、小澤が鳥海力也の話をどこから仕入れてきたか訊こうとはしない。小澤が情報源を正直に明かす事はないと知っているからだ。それは探偵の職業倫理などではない。そうでなくてはその道で遣って行けないからだ。

自称パチプロの池から、ゴト師、鬼丸組の三下と辿り、鳥海力也

を探った小澤は、力也が殆ど隔離、軟禁と呼ぶべき状態にある事を知った。力也が一族からも疎まれていることは以前から噂になっていた。そして、違法薬物にはまっつている事も。どんなに隠しても、人の口に戸は立てられない。

鳥海力也が病を深めたのは、七月初め頃の事。元々言動は怪しかつたらしいが、それが本当に意味不明なものになった。『ゆうれいだ』でもおれじゃない』と繰り返し、怯え、時に暴れる様になった。だが軟禁とは言え、預けられた鬼丸組も無下には出来なかつたとみえ、ガードは駄駄甘だった。しかも鬼丸組に於いてでさえ、力也はお荷物扱いだった。

鬼丸組の三下 かねもと 金本はゴト師との連絡役の一人だが、その上納金を着服し、さらには兄貴分の女にまで手を出していた。以前から池は知り合いのゴト師に泣き言を聞かされていたのだが、小澤が少し突付いただけでそれらの事が明らかになった。小澤も池も金本の前に名前も姿も晒してはいない。兄貴分の携帯電話のメールアドレスを偽装し、露見した悪事を送り付けただけでこの三下は墮ちた。鳥海力也は幽霊を見ている。

そして、化けて出られる憶えがあつたからこそ恐怖に憑かれた。だからもう一度、幽霊を見てもらうことにした。

餌は二つ。

一つは力也が服用していた合成麻薬 元はオランダ製とも云われる、中国から密輸されてくる錠剤。本物である必要は無い。同じ外観に偽装した、薬事法に抵触しないサプリメントを用意した。プラシボー効果か、短時間だが心持ち幸せになり、思考も心持ちはつきりしたらしい。その短い時間で充分だった。

もう一つの餌は小澤逸郎。力也の所在を探った際に、何故小澤が付き纏われているかも一応解かった。より正確には、鳥海力也の訳ありな所持品が消え去り、鬼丸組はその搜索に駆出されたのだ。そして、その嫌疑は小澤に掛けられていた。それが世に出ると、鳥海力也だけではなく一族が甚大な損害を被る事になる。無論、小澤に

は身に覚えの無い傍迷惑な話。鬼丸組は情報屋「おず屋」の尾鱈背鱈の付いた噂を耳にしていたらしく、いきなり拉致される事態にはならなかった。何より、小澤の事を怪しいと言ったのは錯乱して軟禁中の力也なのだ。これ程あてにならない証言も無い。下手を打って大事にしたくはなかったのだろう。しかし、子供時分の顔見知り、他者を見下す事しかしない力也はそんな噂で手を拱いたりしない。無理矢理だと梃子でも動かないが、それが自らの望みであれば何があっても動かすにはいられない。鳥海力也とはそんな男だ。

鳥海力也を唆して連れ出し、小澤が指定した場所　みつづき山霊園まで送り届けたのは金本。力也が幽霊を見た後どうなるかまでは小澤は与り知らぬところとし、放っておいた。金本が力也を放って逃げ出す事もまた、関知するところではない。

みつづき山霊園という選択は、半ば小澤の思い付きである。平山美貴の遺体は茶毘に付され葬儀も済んでいるが、納骨はまだだ。この霊園との縁の有無も定かではない。そこに目を付けたのは、造園したのが鳥海征一郎の息のかかった業者だったから。霊園周囲の遊歩道もその管轄で、遊歩道の崩れは手抜き造成の現れだった。

みつづき山霊園は市立。その造園は公共事業であり、業者の選定は入札で行われた。だが、そこに不正があつたらしいと、平成の大合併で生まれたばかりに等しいこの市の市民オンブズマンがささやかながら動いていた。そして、造園を請け負ったその業者は、材料費を浮かせ施工期間を短縮するために手抜きを行うと、悪い噂が立ち始めている最中にある。使わない手は無いと思った。

その場に一之瀬葉菜を伴ったのは、女連れの方が鳥海力也を警戒させないだろうし、それと同じくらい重要な事として、葉菜に幽霊を見せたかったから。幽霊を見るとはどういう事か、葉菜には是非にも解からせたかった。普段虐められている分、ささやかな復讐だ。

まあ、結局見抜かれてるっぽいし、奢らされてるけどなあ。

隣で平然と酒を呑む葉菜の横顔を盗み見て、小澤は肩を落とした。

「描けん」

依藤謹悟は弛緩した顔で、呆然と呟いた。

十二月には個展が控えている。その実務運営をしてくれる画商には、目玉として一〇〇号サイズの新作を少なくとも二点描き上げるように言われている。

何を、何のために描けと？

依藤は絵を描く事以外に能が無い、否、自分の絵が評価されていること自体、何かの間違いいではないかと思っている。依藤の絵は自身の心の葛藤や、軋轢から生じる叫びを線と色彩で画面に現したものである。常に何かから逃げ、まともに壁を乗り越えた事がない、何も出来ない駄目人間と自分のことを思い定め、そんな自分の描くものが何故評価されるのかも理解出来ない。

絵を描くことは好きだ。描いている間は無心でいられる。言葉に出来ない思いを画面にぶつける事で、声にすることなく叫ぶことが出来る。心を責め苛むあらゆるものから解放される。そんな自分だから、絵描きとして食って往く道を与えてくれた画商達には感謝している。だが、現実逃避の工程が、今改めて自分を束縛している矛盾とも自業自得とも言える現状に、依藤の精神は悲鳴を上げている。

こんな思いをしてまで、俺は何を描こうとしてるんだ？

倦み疲れた思考を追い出す様に激しく頭を振り、立ち上がる。アトリエを出ようと体の向きを変えると、空のソファァーが目に入ったのは当然だが、ここ数日は悪友の寢床として、夜から朝までは占有されていた。その悪友が、今日は帰りが遅い。昨日は昨日で夜明け頃に帰ってきて、昼頃まで寝ていたのだから、さして気にすること

も無いとは解かっているのだが。

遊んでいる様で、あいつも額に汗して働いてるんだよな。

悪友 小澤逸郎は、お世辞にも堅気とは言えない職に就いているし、そのせいか些か倫理観に問題が有るが、その仕事振りは真面目と言える。今やっている事は誰かの依頼ではなく幽霊がどうかで、どうにも金になりそうにないが、何か、小悪党は小悪党なりに退けない矜持の様なものが有るらしい。今にも倒れそうな顔色のまま積極的に動き回っている。それは、本当に何かに摂り憑かれている様にも見え、危ういものを感じさせもするのだが。

母屋の冷蔵庫を覗いて、買い置きのスポーツ飲料が切れている事を思い出した。水を飲んで我慢するかも考えたが、もう何日も家から出ていない事も思い出し、少し歩きたくなつた。食生活と筋トレで余計な脂肪がつくことはないが、流石に足腰が萎えそうな気もしてくる。

筋力トレーニング、柔軟体操はここ数年来の習慣で、睡眠障害を患った際に、身体を虐めて疲れさせれば、少しでも眠ることが出来るのではと、藁にも縋る思いで始めたのが切っ掛けだ。それまでは長身で骨太ではあつたものの痩せ型だったが、気が付けば全身みっしりと鎧の様な筋肉で覆われていた。禿頭も睡眠障害と同じ筋トレが原因で、全体に剃らないと無様で醜い脱毛症が露わになるから日本に戻り、故郷に帰ってきて、現在の俵藤にかつての姿を見た者は一人もいない。実の両親ですら、直接会って話を交わすまで信じてくれなかつた程だ。アトリエに籠っている間も、行き詰まると筋トレをしてしまう。ボディビルダーも見惚れる身体だが、自身の肉体美に酔っている訳ではない。俵藤の筋トレは、一種の自傷行為に近い。肉体を酷使し、負担をかけていないと不安に襲われる。自分でも理解し難い罪悪感に囚われるのだ。

財布をズボンのポケットに突っ込み、サンダルを履いて外へ出る。

近場の自販機で済みますか、坂を下りて少し歩かなければならないがコンビニまで行くか思案していると、ジージーと響く庭草の虫の声に、僅かだがリンリンと、鈴を転がす様な音色が交ざっていることに気が付いた。夏の緩やかな終わりが既に始まっていることを告げていた。夏の終わりは、四季の移ろいの中で最も切なく物悲しいと日本に戻って俵藤は思うようになった。渡欧中は生きる事、それを描く事に懸命だったので、そんな感慨に耽る余裕は無かった。

そうだな、テーマからは外れるが、この季節感を描いてみるか。

画商側から申し渡された（表向き俵藤と打ち合わせて決まった事になっていて）今回の個展の主題は「融」。ミーティングで散々小難しい説明を聞かされたが、正直言って、何が何だか解からない。詰るところ、テーマなど有って無きが如し。理屈付けは向こうで勝手にやってくれるだろう。半ば投遣りにそんなことを考えながら夜道を往く。

ちょうど長い下り坂に差し掛かった時、五〇メートル程離れた坂の下の十字路に動く影を見た。街灯に照らし出されたその姿は、居候中の悪友、小澤逸郎のものだった。小澤もこちらに気付いたらしく、小さく手を挙げた。

異音　タイヤとアスファルトの路面が擦れて経てる、悲鳴じみた軋みが響く。

十字路を渡り終えた小澤の背後に、突如一台のバンが滑り込む様に現れた。車は停止することなく、車体横のスライドドアが開いたかと思うと中から複数の腕が伸び、小澤は頭から袋を被せられ、車中に飲み込まれた。即座にドアは閉まり、車は加速して走り去る。その間、約一秒。あまりの唐突さに見事とさえ思ってしまう、水際立った拐取だった。

バンの中には運転手を除いて四人の人間がいる。内一人　小澤は頭にキャンバス地の袋を被せられ、腕は後ろに回され、手首と足

首を梱包用のフィルム粘着テープで巻かれて転がされている。被せられた袋も、頸を　特に声帯を圧迫する様にテーピングされている。運転手を含む他の四人は、何れも無言で顔を引き攣らせていた。小澤だけが呻き、もがいて身体をバタつかせていたが、取り囲んで座る男の一人がその腹を蹴ると、小澤も身体を丸めておとなしくなった。

「手間あ掛けさせんじゃねえ」

低く静かに男は呟き、袋越しに小澤の頭を踏み突けた。

車は時に激しく揺れながら、夜の闇を縫う様に走った。

車が停まり、エンジンが切られる。ベアリングの軋みとダンパーの押し殺した溜息の様な音、そして振動で横腹のスライドドアが開いたと解かる。

「起きろ」

男の声がして、小澤はシャツの襟首を後ろから掴まれた。力任せに引き起こされるが、両足首を括られている上、両手首も後ろ手に縛られている。バランスを保てずに倒れてしまった。

「手間掛けさせるなど言つたらうが」

再び手荒に引き起こされるが、男はそのまま小澤の体を放り倒し、車外へ蹴落とした。衝撃に苦悶する暇も与えられず、小澤の体は蹴転がされ続けた。しばらくして、またも襟首を掴まれる。今度は跪く形で起こされた。そして、頸に巻かれていたテープが剥がされ、被せられていた袋を筆り取られる。その途端、強い光が眼を刺した。手で遮ることが出来ないで顔を背けるが、髪を掴まれ、無理矢理顔を光源に向けられた。それは、バンのヘッドライトだった。視界を黄色く染める強烈な光の中に、影が蠢く。小澤を拐取し、車に同上してきた男達。

「カスが、いい様に遣つてくれやがる」

「影でこそ動き回るしか能の無い奴が、ちよつと頑張り過ぎなんじゃねえか？」

「馬鹿が調子に乗るからよう」

「喋れる様にしてやったんだ。何とか言えやコラ」

男達は口々にそんな事を言う。頭髪を掴まれ跪く小澤を、完全に馬鹿にしきっていた。だから、それじゃあお言葉に甘えてと、強い光に目を細める小澤が言った時には、誰もが言葉を失った。

「そこに御出でんなるのは若中頭の辰野さんたつのじゃありませんか。てえ事は、鳥海先生御本人は兎も角、”代わりの方”が御出でになつてンじゃありませんかね？」

男達に動揺が走り、小澤の背後の男は握っていた頭髪を引き上げ、その背中　腎臓の付近を爪先で蹴り上げた。

光の中で一番端に居た　辰野と呼ばれた男は、小澤に振り掛かる暴力を制止し、

「何故ここに居るのが俺達だけじゃないと」

「僕をここまで連れてきた車にはドライバー以外じゃ、三組分の腕しか乗ってなかったでしょ？ 咄嗟でもそのくらいは解かりますよ。辰野さんは別の車ですよね」

「それだけか」

「僕としちゃあ連れ込まれるのは、もつと平和的解決が出来そうな場所が良かったんですけどね。ま、料亭は無理として、とりつみ先生なら幾つかセーフハウスをお持ちでしょ？ 鬼丸さんの組事務所だつて

それじゃ流石に先生のところの方が出入りしにくいですか？ 一応表向き関係無い　」

頭髪を掴んでいた男が、小澤の頸に刃物をあてた。それは刃渡り二〇センチを超えるハンティングナイフ。細かい傷が無数に入ったブレードが、ぎらりと光を反射する。

「何が言いたい」

「先生はお知りになりたいんでしょう？ 僕が何を、どこまで掴んでいくかを」

四章 5

5

「糞野郎が、大した度胸だな」

辰野は前に進み出て、小澤の顔を靴底で蹴った。ぼたぼたと鼻血が零れ落ち、柔らかい土の地面に吸われた。

「だがな、てめえの口を割らせるのに大した手間あ掛けるつもりは無えんだよ。痛い目に遭わせるのも、そのためじゃねえ」

猫が捕らえた獲物をいたぶる様に辰野は言う。周囲の男達も嗤いを漏らし、小澤を見下ろしていた。しかし小澤は場違いに明るい声でそれに応える。

「クスリでも使いますか？バルビツール酸系とか？ありやあ、まともな情報は引き出せませんよ。それがどんな物か知ってる奴に使う場合は、特にね」

精神科の医師は、睡眠鎮静薬を用いて心因性や解離性の健忘症の治療を行う事がある。この工程が、告白誘導に悪用される。しかし、薬剤を使った告白誘導は使われる側が対薬物の処置、訓練を積んでいる場合は万全とは言えない。秘密と定めた情報を吐かせるには、施術者は被術者をリラックスさせて、慎重かつ巧みに誘導しなければならぬ。そうでなければ、情報を被術者ごと破戒してしまう。

「時間と労力の無駄を省きたいってんなら、僕はお勧めしませんね」「てめえ、何様のつもりだ」

拉致されておいてその立場を弁えない振る舞いに、男達は怒気を膨らませて行く。それでも小澤は態度を変えず、言葉を続ける。

「僕は情報屋です。情報で商売してんですよ。ビジネスはスマートにツてのが信条で」

辰野は鋭く舌打ちし、小澤の首を刈る様に足の甲で蹴り、その顔

を地面に打ち付けた。後ろの男は慌てて握っていたナイフを退いたが、僅かに遅く、皮膚が裂け、血が迸った。

「やったか？」

退屈そうな辰野の問いに、後ろの男は慌てて小澤の傷を覗き込む。

「いえ、この程度なら」

辰野は倒れたままの小澤の頭を踏み付ける。

「聞いたか？良かったな。その程度なら、まだ死なねえとよ」

「良かったのはそちらさんでしょう」

半ば顔を土に埋めたまま、小澤は言う。

「迂闊ですね。僕が何の手も無く捕まると思いましたが？まだそこまでの評価は得てないってことですかね」

「何だと」

「僕に何かあったら、鳥海先生も終わりって言うてンですよ。地方議員としての権力は失われ、社会的にも抹殺状態。そうなたら大きな後ろ盾を失う鬼丸組さんも 推して知るべし、ですよね」

「待て、それは困る」

「あんたは黙ってる」

光の外から響いた声を、辰野は遮った。

「俺らは俺らで、この餓鬼に訊きたい事があるんだよ。それが終わるまで口出しは止してもらおうか」

「しかし」

「口車に乗せられてんじゃねえ。こいつが先生の致命的な情報を掴んでるって確証はまだ出てねえだろ？ブラフで踊らせるのがこいつらの手口なんだよ」

六番目の男は尚も抗議を続けようとしたが、辰野はそれを黙殺した。

「成る程、商品サンプルを御所望で。県警の福田警視長、県教委の太田教育長に原審議官らとのお付き合いの件はどうです？流石に諳んじる事は出来ませんが、各々引継ぎも含めてここ五年間の記録は、ばっちりですよ」

小澤は流れ続ける鼻血と顔面を圧迫する土で、少し喋り難そうではあるが、それらをものともせず声を上げる。闇の中で驚愕に引き攣る息遣いが聞こえる。辰野はそれに舌打ちをし、小澤の頭を踏む足に力を込めた。

「先生程長くやられてる方は古いのになると時効ですしね。まあそれでも社会的には結構な問題ですが。何ならその金の出所たる企業、団体の方も、あ、集金担当の鬼ま」

側頭部を蹴られ、小澤は呻きで言葉を途切れさせた。

「うるせえ黙れ」

「ちよつと、辰野さん」

闇の中の男の声が焦燥で上擦る。

「言つたろう。こつちにも訊きたい事があるんだよ。たとえば、こいつを雇っている組織だ。どこぞの経済やくざか総会屋の出城なんだろうが」

「しかしそんな事をしては、肝心な事を訊き出す前に死なせてしまつ」

「この位じゃ死なねえよ。余計なお喋りしねえ様に血の巡りを良くしてやつただけだ」

そう言つて、辰野はさらに小澤の頭を蹴る。

「つれないですねえ若中頭。このまま貴重な時間を無駄にするおつもりですか？」

殆ど地中から聞こえる様な声に、闇の中の男はまたも反応する。

「余計な事ばかり、ベラベラと良く喋りやがるな。ああ？がたがた震えながら大口叩いても説得力無えぞ、糞餓鬼」

事実、靴底を通して震えが伝わってくる。辰野はせせら笑い、小澤の頭を踏み躪る。

「そりゃ、痛いのが苦しいのは大嫌いですがからね。こんな扱い受けりゃあビビりもしますよ。でもね、それと仕事は別でしょ？」

「飽く迄仕事と言いやがるか」

「ホントは若中頭も解かつてンでしょ」

「ああ？」

「大の男を四人も手持ち無沙汰で突っ立たせておいて、一番お偉い若中頭が自らつてのは普通無いでしょ？ 僕の商品に価値があると判断してるから、袋にして、うっかり死なせちゃあ拙いとお考えだ」

「口の減らねえ、いけ好かねえ餓鬼だな」

こいつは厄介だ。

辰野は車のヘッドライトに照らし出される、地面に這い蹲った男を見下ろして思った。見た目通りに腕っ節は弱い、暴力に耐性が無い訳ではなく、それなりに腹が据わっている。中々に賢しらで、強かな男だ。配下の者達も、この男の得体の知れなさに中てられつつある。理解し難いものに触れると、まず攻撃対象として捉えるのがこの世界に生きる者の習性だ。気味が悪いからと怯えを見せては付け込まれるし、周りの者にも示しがない。保身のためにあっさり攻撃抑制を外す。

こいつはそれを解かっけていて、周りを煽っけていやがる。

若中頭である自分がそれをさせないと計算しているのだろう。癩に障るがそれは事実だ。

こいつの言う時間が無いつてのも、おそらく本当だろうな。

小澤は鳥海征一郎の県議会議員生命と社会的抹殺を口にした。小澤が一定の時間までに戻らなければ、致命的な情報が暴露されると言っているのだ。緊急の対応を取らせないために、複数の報道機関に送り付けられるのだろう。何より不気味なのは、この男が盗み出したはずの力也の悪行の証について、まだ一言も口にしていない事だ。よもや父親の悪行の方を言い立てられるとは思ってもしないかった。全く癩に障るが、そろそろ、乗っけてやるしかないだろう。辰野はしやがみ込むと、小澤の頭髪を掴み、頭を持ち上げた。

「おい、自分が何でこんな場所に連れてこられたか解かっているのか。ああ？」

「事務所の床を汚したくなかったから、ですか？ それとも心理的効果優先ですかね」

小澤は苦痛に顔を歪め、息を荒げながらも、強気な口調を変えない。

「ここがどこだか解かってるって口振だな。……いや、知っているのか？」

「橘・箕都竹山の炭鉱跡でしょう」

それは橘・箕都竹連山の山間に在る廃墟。採鉱されていた期間は二〇年に満たない小さな炭鉱だが、コンクリートや煉瓦で築かれて残る遺構はかなりの規模になる。

「地元の者でこの事を知らない奴はいませんよ？ガキの頃は探検隊ごつことか言つて、薬莢拾いに忍び込んだりしてましたし。何で暴追キャンペーンの人達はここに来ないんでしょうねえ？ああ、先生の私有地だからか」

小澤はからからと笑つたつもりだったのだろう。しかし、周囲を囲む男達からは、鼻から口から血を飛ばし、時にえづく様に咳き込みながら笑うその姿が狂気に憑かれている様に見えなかった。

「そうそう、ここで銃の空薬莢が拾えるって自慢げに教えてくれたのが鳥海先生の御息でしたよ。力也君、今どうしてますかね」

辰野の拳が走り、それを顔面で受けた小澤はもんどり打って転がった。だが、笑い声は止まない。血と泥に汚れた小澤の顔は、そうなる前から既に凶相の隈取で覆われていた。それに気付いた者はこの場には居なかったが。

「いい加減にしやがれこの野郎」

辰野は小澤の胸倉を掴んで引き起こし、歯を剥き出して唸った。

小澤は笑い疲れたとでも言いたげに顔を引き攣らせて痙攣している。

「いいだろう、茶番は終いだ。おい、てめえの言う時間つてのは後どのくらいだ」

小澤は胡乱な眼を辰野に向ける。

「惚けんな。てめえが戻らなきゃあ仲間が情報を」

「仲間なんていませんよ」

「ああ!？」

「タイマーアップロードって御存知ですか？他人様のブログに勝手にリンクを貼って廻るロボットは？世の中便利になったものですよね。ネット時代様様？」

「何だと!？」

男が叫んで、闇の中からヘッドライトの照明の中に駆け込んでくる。その顔に光る眼鏡を見て、小澤は唇を曲げて笑った。

「おやあ、秘書の田村さんたむら」

枝葉 4

枝葉 4

「僕はね、先生、警察官でも検事でもないんです。根拠、証拠なんて、ぶっちゃけどうでもいいんですよ」

高荷良忠は布団の中で、闇に溶けた天井を見詰めながら反芻していた。数日前に聞いた、昔の教え子の言葉を。

自分の話しは飽く迄主観に基いたもので、裏付け 法的根拠は何も無いと告げた事に対する答えが、それだった。

昔の教え子は、昔と変わらぬ少年の様な面差しに、闇を呑んだ様な暗い瞳をしていた。

「随分と乱暴だな。それではまるで」

「そうですね。僕は連中 馬鹿ぼんや、そのクソ親父が使ってる鬼丸組のクソ達と同じ社会に住んでるんです。だから、連中とまるで同じロジックを持ってたりもするんです」

疲れているのか、憑かれているのか、奇妙に歪んだ薄笑いを浮かべ、そう言い放つ昔の教え子に、高荷は息苦しさを覚えた。

「それで 彼女が浮かばれるためにと君は言ったが、どうするつもりなんだ」

根拠も証拠もどうでもいいと言い切るからには、法の下での裁きを加えるつもりとは、とても思えない。

「数日後か、数週間後か、数ヶ月後かに、身元不明の変死体が出る
かもしれません」

闇の報復 高荷の脳裡を占めたのはそんな言葉だった。

「その死体、僕自身かもしれません」

暗い瞳をして、俯きながそう言った昔の教え子は、やはり薄笑いを浮かべていた。それは少しだけ、愉快そうに見えた。

「何を馬鹿なことを！？やめる！自分を粗末にするな！」

思わず腰を浮かせ、高荷は口走っていた。

自分で言っていて、何と陳腐な台詞だろうと感じた。しかし、それを言わせた相手の思考の方が、余程おかしい。自分の命を危険に晒してまで、犯罪を手段とした復讐を行う。そんな考えが透けて見えた。まるでヒーロー気取りの子供だと思った。狂気が滲んでいる。そんな気がした。

「そんな気違いを見るみたいない目、止めてください。でも、まあ、これ以上は流石に先生に迷惑をかけてしまいます。僕はこの辺で。今日の事は全部忘れてください」

ひょいと頭を下げ、昔の教え子はその場を去ろうとした。本人は何気なさを装ったつもりだろうが、その所作はどこか重く、僅かによろめきが見て取れた。高荷の目にそれは、あまりにも儂く、頼りなげに映った。

「くだらん事を言うな。それより、君が法を犯すことも、君が犠牲になる様なやり方も許さんぞ。他にも遣り様があるだろう」

相手が何を考えているかも解からないのに、他も何も無いものだが、この時は何としても止めなければならぬと思った。

「法に則った制裁ですか？まあ無理ですよ」

「何故だ」

「法手続きを行うって事は、連中に時間と情報を無駄に与える様なものです。第一それが出来れば、先生がとつくの昔にやってたんじやないですか？」

これには、返す言葉が無かった。

「すみません、先生を責めるつもりで言ったんじゃないんです」

責められても仕方ない。確証が無い事を理由に、長い年月口を噤み続けていたのだから。

「まあ、何れにしろ、まだ色々調べなきゃならないですけどね」

高荷の姿があまりに萎れて見えたのか、昔の教え子は、言い訳の様子に呟いた。

「君は、それが自分のためと言ったな」

本当にそうなのか？哀れな平山美貴が浮かばれるため それだけのために、自ら危険を冒すと言うのか。そんな思いから口を突いて出た言葉だった。

「ねえ先生。平山さんは、二二才で、あんな場所で骨にならなきやいけないような罪を、犯したと思いますか？」

思わない。思う訳がない。

「嫌だった、最初は。柵しかいみなんか、作りたくなかった。でも、知つちまった。そうすると、彼女みたいな夢も希望もあつただろうコが理不尽な死を迎えているのに、僕みたいなクソが未だのうのうと生きている事が、堪らなく嫌になる。だからって、もう代りに死んでやる事は出来ないし、実際にそうする程、御人好しでもない。だから、せめて、です」

危うい。暗い瞳でそう言った若い男の危うさに、高荷は訳も解からず圧倒された。

胸騒ぎがする。

高荷は薄掛けをはぐと、布団の上で胡坐を掻き、枕元の水差しを手を取った。温んだ水を一口含む。口中に苦い味が広がる。

若い者に先に逝かれるのは、老いぼれにとって堪らなく嫌なことなんだぞ、小澤。

五章 1

五章 1

光の中に踏み込んできた田村を見咎め、辰野の苛立ちは頂点に達した。だが、それと同時に自分の左腕に違和感を覚えた。それを確認しようとする瞬間、胸から腹に掛けて衝撃を受け、倒れた。この一瞬で辰野が目にしたのは、胸倉を掴んでいた左腕を両手で掴み、跳び上がって両足をこちらに向けてくる小澤の姿だった。

その場に居た誰もが啞然として小澤を見る。小澤は自由になった両手で足の縛めを解き、立ち上がるところだった。その右手には、小さなポケットナイフの刃が光っていた。

「ヒッ」

小澤は悲鳴とも躁じみた笑いとも取れる声を漏らし、身を翻して駆け出す。横跳びに光の輪から抜け出すと、瞳孔が収縮していた男達は、あっさり小澤の姿を見失った。

「糞ッ、逃げられると思っっているのか」

強い光をまともに浴びていたのは、寧ろ小澤の方だ。闇に眼が馴染むまで自分達より余計に時間が掛かるはずだと誰もが思った。こちらは車に懐中電灯を積んでいるし、盲目で走っても、転ぶのが関の山だと、その場の誰もが思っていた。

小澤は闇に包まれた廃墟を駆けていた。その左目に暗視スコープを当てて。

何で持ち物検査をしないかなあ。

小型の折り畳みナイフは何度となく後ろ手に縛られた経験から、用心と気休めで常にベルトや靴に仕込んでいる。暗視スコープは特

に隠すでもなく、ズボンの膝ポケットに入れてあった。

ヘッドライトの前に引き出されてからは、左目は閉ざし続けた。瞼越しに影響は受けるが、網膜の焼付きは防ぐ事が出来る。誰かが後ろに居る間は動き様が無かったが、挑発に乗った辰野がそれも解決してくれた。

やくざつてのは自分達に自信持ち過ぎなんだよな。

だが、これ以上幸運の長続きには期待出来ない。向こうには少なくとも二つ、車載懐中電灯が有ると考えるべきだ。もっと多いかもしれない。引き裂いたシャツの端布を頸の傷に当て、足音を忍ばせて小澤は闇を駆けた。

緊張と興奮が絢交せになって、身体に力が入らない。足首はふわふわと覚束無く、膝はがくがくと震えている。口中では鼻から流れ込む血が鉄臭くぴりぴりと舌を刺す。心臓と胃が抉られる様はずきと痛む。そのくせ、アドレナリンの高揚がまだ続いていて、顔から笑みが剥がれない。吐きそうな程怖いのに、楽しくて脳がちりちりと灼ける。

畜生、この揺り返しはキツイぞ。

きつと、死にたくて死にたくて堪らなくなるだろう。心が鉛の様に 本当に、胸郭の内側に鉛の塊りが詰め込まれたかの様に重く感じるのだ。厄介なのは、それがあまりに重過ぎて死ぬことも出来なくなる事。いつそ、笑っていられる今、死んでしまおうか。そんな考えが頭を過ぎる。その自棄的な思考が隙を生んだのだろう。唐突に、顔の右半分が照らし出された。廃墟の壁が途切れている事に気付かず、遮蔽物の無い場所へ飛び出してしまっていた。その瞬間を、懐中電灯の光が捉えたのだ。

「ははあぁッ！見付けたぞこの野郎！」

凶暴な雄叫びが響く。咄嗟にスコープを下ろし、光を透かして見ると、そこには散弾銃を構え、それに懐中電灯を添えて立つ男の姿があった。

あ、蜂の巣は痛いな。

凍り付く身体に、そんな思考がぼんやりと浮かぶ。どうせなら、即死出来る武器を使って欲しいと思った。

バン　弾けると呼ぶにふさわしい破裂音が、山間と廃墟に木霊する。

小澤はその銃声を、悲鳴を上げ、斜面を滑り落ちながら聞いた。

「野郎！」

「やめろ、殺すな！」

そんな遣り取りが上から聞こえてくる。肋骨を硬い物に打ち付ける衝撃。そこで滑落は止まった。上を見上げると丸い光が二つ三つと現れ、斜面を照らすところだった。その目測からすると、どうやら一〇メートル近く落ちたらしい。

再び破裂音。今度は距離のせいか、少し籠った感じの銃声だったが、それ以上に、ほぼ同時に鳴った着弾の音に驚かされた。一メートルと離れていない場所で大粒の雨が固まって降ったかのような地面を叩く音と、巻き上がる木っ端に土埃。思わず首を竦めた時、ベルトを掴まれ、腰から体を持ち上げられた。何事かと思う間も無く、否応なしに動き出す。咄嗟に暗視スコープ　手首にストラップを掛けていたので落さずに済んだ　の存在を思い出す。それを目に当て赤外線照射のボタンを押し、自分を吊るして、闇の山中を走る者を見上げた。焦点が合わない。だが、モトーンに手ブレでピンボケでも、その正体はすぐに解かった。

「謹ちゃん!？」

「誰がキンちゃんかッ！」

小澤の体を左手に抱え、鬼の様な形相の俵藤謹悟は蔓草の密生する山の森を、巨大な体躯、長い四肢で突き破りながら驀進していた。「止まれ、音で位置がばれる」

小澤は俵藤のシャツを掴み、力任せに引いた。俵藤は解かっていると、唸る様に言い、小澤を抱えたまま斜面を跳び、滑っては走り、また跳んだ。蛇行しながらそれを何度も繰り返す。そして、いきなり立ち止まり、尻餅を突いた。荒い息を無理矢理抑え、俵藤は獣の

様に両手を地に付ける。小澤はスコップを通して周囲を見渡した。そこは風化と植物の侵食を受けてこそいたが、炭鉱跡周辺に点在する廃墟の一部だった。巨大な切り株の根方と、煉瓦造りの竈跡が見受けられる。そして、蔓草に埋もれてはいるが小屋の残骸らしき物も。

「ここ、どこだか解かるか」

「ぜいぜいと喘ぎながら、俵藤は訊いた。

「解かっててここまで来たんじゃないの？」

「走っている内に、方向感覚無くした」

闇の中で互いに溜息を吐く。小澤は俵藤を促し、小屋の方へと向かった。

「それで、何でこんなとこに居るの」

ガラスを失った窓から内部に侵入し、腰を下ろし、壁にもたれてから小澤は訊いた。

「何でもクソも無い。目の前で拉致られて放っておけるかバカ」

聞けば、小澤が車で連れ去られた後、俵藤は道端に止めてあった自転車の錠を素手で破戒し、ここまで追ってきたとの事だった。

「車、スピード出してなかったし、途中から目的地の見当は付いたしな」

交通機動隊の巡回に止められない様に法定速度を遵守したのだから。それに、俵藤も橋・箕都竹山炭鉱跡の噂は聞いていた。子供の頃に何度か訪れた場所でもある。地元で知らない者はいないと言われるその噂とは、この炭鉱跡が鬼丸組の私刑場や射撃訓練所に使われているというものだ。人を車で拐取し、こんな山間へ向かうのは鬼丸組くらいのものだ。

「いや、それにしても、君ン家チからここまでって相当な距離 自転車で？」

見ると、俵藤は裸足だった。踝や爪先には汚れを越して血が滲んでいる。暗くてはつきりとは判らないが、その程度で済んでいる事自体不思議だ。どれだけタフなのかと思う。

「久しぶりに……を思い出したよ」

耳馴れない言葉に、小澤は続きを待ったが依藤はそれについては、もう話さなかった。

「いつから居た？」

「いつからって……辿り着いた途端、撃たれる寸前のおまえを見付けたんだよ」

炭鉱跡に潜り込んでみると、複数の灯りが動き回っていた。依藤は見付からない様に建物下の斜面から廻り込んで動いていたのだが、建物が途切れたところで様子見に覗いてみると、そう遠くない場所に散弾銃を持った男が居た。しばらく隠れて窺っていると、そこに小澤が跳び出して来たのだ。だから咄嗟に足を掴み、小澤を斜面に引き摺り下ろした。

「だがショットガンとはまた物騒だな」

「まあね、場所が場所だから、何か使うだろうとは思ってたけどね」
ライフル ショットガン

小銃と散弾銃の見分けは、銃器と縁の無い人間には付け難い。そして依藤にはモデルガン蒐集や、ガンアクションの映画を好んで鑑賞する様な趣味は無い。やはり何がしかの経験が有るのだろうと、小澤は思った。依藤は東欧を旅していた頃の事を話したがらない。そこに何かあるのだろうと、以前から思っていた。

「ケータイは」

「あるけど、この辺は電波入らないよ」

小澤は携帯電話を取り出し、画面を開いた。暗闇の中に白い光が広がる。

「何だその顔……！」

依藤は照らし出された小澤の顔を見て愕然とした。血塗れで鼻柱は捻じ曲がっている。何って何？と、小澤は不思議そうに訊ねた。依藤は少し考え、小澤の破れて海草の様に垂れ下がるシャツを更に破った。抗議しようとする小澤を制し、

「鼻血止まらないだろ。多分おまえが思っているより酷いぞ」

そう言っただけで端布を渡す。

「丸めて噛み締めろ。声は出すなよ」

依藤は小澤の肩を左肘で押さえ、左手は端布の上から口を押さえた。そしてその鼻を右手の人差し指と中指で挟むと、一気に引つ張る。鼻腔から血が音を経て噴き出し、見開かれた目からは涙が溢れ出す。小澤は身体を仰け反らせ、くぐもった絶叫を上げた。

五章 2

2

「畜生痛かったよ！死ぬかと思った！」

端布で鼻を押さえ、小澤は泣きながら文句を言った。実際、辰野に蹴られて鼻骨を折った時の数十倍痛かった。

「鼻血で溺れたり、失血性ショックになるよりマシだろ」

俵藤はうんざりした顔で血に濡れた手を自分のシャツで拭った。

「他に怪我して無いか？」

「いいよ大丈夫だよ。それより、電話で思い出したんだけど、君一〇番した？」

「あ、いや……その余裕は無かった」

携帯電話が普及した現在、公衆電話はその数を減らしている。俵藤の様に携帯電話を持たない者には勝手が悪くなる一方だ。それに車が信号待ちで停まっている時は、追い付くために必死にペダルを扱がなければならなかった上、目的地の見当が付いた時には、非常電話すら撤去された山中の旧道に入っていた。

申し訳なさそうに詫びる俵藤を宥め、小澤は圏外と表示された携帯電話を眺めた。おそらく、通報はしたとしても無駄に終わっただろう。パトカーや白バイ、機動捜査隊の警官全ては無理だろうが、一一〇番センターの責任者に圧力をかけるくらいの事はしているはずだ。だから仮にこの山に今、善意の第三者が居て、銃声を不審に思っただけで通報してくれたとしても、警察は当分動かない。

「なあ、聞いてもいいか」

俵藤の問いかけに小澤は顔を上げた。

「いいよ。君はもう関係者だ」

「これは、あの幽霊の件の結果か？」

「半分は正解。これは結果じゃなくて、未だ経過だよ」

「ここで終わるつもりは無いって事か」

「勿論」

ああ、言われちゃった。

痛いのは嫌いだ、死ぬ事は怖くない。どの道野良犬の様な人生だ。いつ終わったって構いはしない。だが、こうして駆け付けてくれたお人好しを巻き添えで死なせる訳にはいかない。そしてこのお人好しは、野良犬を死なせないために必死に体を張るだろう。これまで何度もそうだった様に。

「だったら、これからどうする」

重い声で問う俵藤に、小澤は努めて明るく答える。

「ああ、当面はじつとしてりゃいいのさ」

小澤は昨日、同じ山の少し離れた場所で交わした一之瀬葉菜との会話を思い出していた。夜間に山狩りは無理だ。相手は六人。一度に相手にする人数としては厄介だが、山狩り要員としては絶対的に不足している。懐中電灯も人数分は無い。それに、待っていれば

「……しまった。ここに居ちゃ拙い」

「何だ？」

いきなり立ち上がった小澤につられ、俵藤も腰を浮かせる。

「ここは炭鉱の関連施設の跡だよ。さして離れてないんだから、道で繋がっていてもおかしくない。連中が真つ先に探すのは」

その時、窓の外に光が走り、一瞬小屋の中を照らして過ぎった。

「こんな場所か。道理だな」

体を屈め壁に貼り付きながら、俵藤は押し殺した声で後を継いだ。そもそも廃墟周辺の地理は鬼丸組の方が詳しい。奥深い森林に伏せるなら兎も角、小屋の中は拙かったと、俵藤も痛感した。

「居やがったあ！ここだッ！」

窓の一つから光線が射し込み、男の影が現れた。その影は右手に四角い塊りを持っている。小澤はそれが自分の方に向けられるのと同時に、隣で風が巻くのを感じた。俵藤はその巨軀全身を弾機ばねにして跳び、男の両腕を掴んで小屋の中に引き摺り込んだ。その際、男

が右手に持っていた物は破裂音を発し、瞬く様に火を噴いて小屋の中を明るく染めた。男は俵藤の肘を顎に喰らい、昏倒する。

「俵藤!?!」

俵藤は身体を起こすと、男の右手から奪った物を小澤に振って見せた。

「大丈夫だよ。それよりサブマシンガンたあ、どこまで物騒なんだ」

小澤は拾い上げた懐中電灯の光量を絞ってそれに当てる。イスラエル製UZIの中国版デッドコピー。交換弾装も二本、ズボンのポケットから出てきた。

「アオツ! どうした!?!」

外で声が響く。小澤は灯りを消し、俵藤はアオと呼ばれた男の腰からベルトを抜き取り、前屈状態にして両腕両脚を纏めて縛った。

「さて、敵はすぐ傍まで迫っている。武器とライトが手に入ったが、どうする」

「僕はこの物騒な物使えないよ」

「そりゃ残念、俺もだ」

「アオツ! 返事しろッ!」

焦燥に駆られた怒鳴り声。

小澤と俵藤は暗闇で耳をそばだて、外の気配を窺った。足音らしきものは聞こえるが、近付いて来る気配は無い。

「向こうは他に何人いる」

「五人。内一人は県議の秘書」

「ケンギノヒシヨって……あ、鳥海のか?」

銃声 それは唐突で乱雑な重奏だった。爆竹や癩癩玉を連発で鳴らす感じに似ている。そして、無数の銃弾が朽ちた木製の板壁を貫く音。二人とも慌てて床に伏せたが、延々舞散る木っ端に生きた心地がしなかった。

「小澤あゴラアツ! 聞こえるかアツ!」

それは鬼丸組若中頭辰野の胴間声。

「てめえ、青木を殺りやがったな!」

生きてるよ。今の流れ弾が中つてなきや。

誤解かつ理不尽な言い掛かりだが、暴力団員が相手な事を思い出し、言うだけ無駄だと小澤は諦め、黙っていることにした。

再び銃声　盛大に木屑が舞う。それが止むのを見計らって、小澤は壁に開いた穴の一つから外を覗いた。

「三人しか居ない！」

背筋に冷たいものが走り、素早く俵藤へ告げる。内一人は眼鏡が光って見えたので秘書の田村だ。では、やくざ残り二人は

俵藤は小澤の暗視スコープを受け取って、小屋の隅に埃まみれで転がっていたジューズの空き瓶らしき物を数本拾い、反対側の窓へ向かった。右手の入り口は入る時に確認したが、南京錠と鎖で施錠されていて、蹴破ろうとするとそこにだけ穴が開きそうな感じだった。窓から外を窺うと、懐中電灯の絞られた灯りが近付いて来るところだった。暗視スコープで見ると、及び腰の男が二人。武装は一人が散弾銃、もう一人は自動拳銃らしい。拳銃持ちの方が懐中電灯を携えている。俵藤は指の股に瓶を挟み、スナップを効かせて二本を同時に放った。

「ぎゃッ！」

空き瓶の一本は拳銃の男の顔に当たった。もう一本は、散弾銃の銃身に当たって硬く甲高い音を経て。散弾銃の男はその感触と相棒の悲鳴に驚いて、大仰に銃を逸らし、

「うあッ!？」

発砲音　絶叫。

「どうした原口、小野おッ!？」

それは暴発だった。トリガーは弾みで引かれた。拳銃の男　原口は、両足に至近距離から鉄の散弾を撃ち込まれ、倒れ、もがいている。筋肉も血管も骨も、ぐずぐずになっているはずだ。俵藤は顔を顰め、吐き気を堪えた。俵藤にとつては、相手を追い払い、近付かせないために放った礫でしかなかったのだ。

「辰野さんやられた!原口が撃たれた!」

「小澤あッ！」

小澤は釈明したい衝動に駆られたが、今は黙っていた方が相手が混乱してくれそうなので、やはり静観する事にした。

小野と呼ばれた男は自分で撃った相棒を引き摺って、辰野達の下へ戻って行く。辰野の傍らに居たもう一人が、その手伝いに駆け出す。引き摺られる原口は狂った様に悲鳴を上げ続けている。

「ためえもぎやあぎやあ煩えぞッ！いつまで泣いてやがる」

激怒した辰野は当り散らす対象を選んでいない。半泣きの小野は狼狽の態で、おろおろと原口をかばう。

「辰野さん、俺車取ってきます」

「ああッ！？何言ってるんだためえ！？」

「こいつ、早く病院に連れて行かないと」

「ふざけるド阿呆！トウシロウに撃たれる様な間抜けは放っておけ！」

「でも」

小野は辰野に蹴飛ばされ、転がった。

「ためえら、あのトウシロウの糞野郎になめられてんだぞ！？落とす前も付けずに引下れるか！」

「でも若中頭、こりや確かにヤバイですよ」

もう一人の男も取成そうとするが、沸点を超える勢いの辰野はそれを受け付けない。いや、別の意味で辰野は冷めていつていた。手にした短機関銃を原口に向け、その場の誰もが止める間も無く引金を絞った。数発分撃がった銃声が止むと、沈黙が降りる。原口はもう、苦痛を訴えなくなった。

「うわあああああああッ！！」

叫んだのは田村だった。辰野は弾装を交換し、初弾を薬室に送り込むと、その銃口を田村に向ける。

「あんたもぎやあぎやあ煩えなあ」

低く静かな辰野の言葉に、田村は後退りし、尻餅を突いた。だが、おとなしくはなった。辰野はそれに満足し、三人を睥睨する。

「原口を殺つたのは小澤だ。そうだろう」

誰も何も答えなかったが、その沈黙を肯定と受け取って、辰野は凶暴な笑みを浮かべる。

「さあ、覚悟しろ糞野郎」

銃声は花火の様に鳴り響き、小屋の壁を穴だらけにしてゆく。

辰野は傍らに置いてあったバッグから丸い物を取り出す。米軍M67型の手榴弾。勿論正規品ではないが、そんな事は問題ではない。リングの付いたピンを抜き、大きなモーションでそれを投げた。空中でクリップの外れた手榴弾は小屋の窓に吸い込まれ、ほんの一瞬、周囲は小屋から溢れた閃光に染まった。散々銃の発砲音に晒されていた耳に、音はさして大きく感じられなかったが、爆圧、爆風は衝撃的だった。小屋は大量の粉塵を周囲に放出する。だが、山間の闇ではそれも見えない。舞い戻った静寂の中で、辰野だけが獣の様に荒い息を吐いていた。

「おい、中あ見てこい」

部下に指示を下す。だが、動く気配が無い。再度感情が激発しそうになったその時、肩に手を置かれ、喉元に冷たい感触が走った。「いい加減満足だろう」

辰野は頸に当てられた刃物の感触をもともせず、振り解き暴れようとした。しかし、すぐに押し倒され、両腕を後ろに固められる。周囲が仄かに明るくなる。辰野は漸く気が付いた。複数人の者がライトを点けて、自分を取り囲んでいる事に。

「お疲れさん。いや、本当に御苦労様」

飯尾の労いの言葉には答えず、小澤は短機関銃と拳銃を差し出した。拳銃は原口が小野の散弾銃に撃たれた時に落としたものだ。

「指紋べつたり付いてますから、そのまま警察の手に渡るなんてのは無しですよ」

ヘルメットに暗視ゴーグルを装備した男がそれを受け取る。飯尾

はスーツ姿だが、他は皆黒尽くめの野戦服。

「それと、小屋の裏に男を一人転がしてますから、そっちも宜しく願います」

小澤と俵藤は、辰野が部下を殺したのを見てすぐに、小屋の裏側の窓から脱出した。気狂いには付き合っていられないと思った。退路を断った訳でもないのに、自分達の事に掛かり切りになる時点で正気ではないのだ。こちらには銃もあった。その時反撃されていたらどうするつもりだったのか。そんな事も考えられない程、辰野は怒りに狂っていた。

狂わせたのは、俺ただけだよ。

気が重い。原口が殺された時、飯尾達はすぐ傍に居て、事態を見守っていたのだ。もう少し早く出てきてくれていれば、あの男はあんな死に方をせずに済んだだろう。

いや、どうなるかなんて、知れたもんじゃないな。

放心の態で座り込む田村と、後手に縛られ、猿轡の上、頭から袋を被せられたやくざ達を見て、小澤は感傷を止めた。小屋を逃げ出す時にアオと呼ばれた男を連れ出した事すら、骨折り損に終りかねないのだから。

「じゃあ、後の事はお任せします」

小澤は飯尾に頭を下げ、踵を返した。

「ああ、送って行くよ。御友人も」

飯尾は言いかけて、止めた。小澤の背中中は明らかに拒絶を示している。いつもなら言葉を繕って体よく断るだろうが、今はその余裕も無いらしい。

「部長に何か、伝えておく事は？」

追い討ちを掛けるとは、我ながら人が悪いと飯尾は自嘲の笑みを浮かべた。

「いえ、僕からは特にありません」

小澤は背中を向けたまま、硬い声で答え、歩き出した。

「実の兄弟なんだから、もう少し仲良くすれば良いのに」

本当に人が悪いな、俺は。

立ち去る小澤の背中に眩き、飯尾は悔いた。

ふと、小澤が立ち止まり、こちらに駆け寄ってくる。流石に怒らせたかと思つて身構えたが、小澤は頭を掻きながら、

「すみません、何か上に羽織る物と、ヘルメット一つ貸してもらえませんか」

「済んだのか」

黒いシャツを羽織り、ヘルメットを抱えて戻つて来た小澤に、飯尾は疲れた声を掛けた。俵藤は朽ちた切り株に腰掛け、巨体を闇に沈ませている。この場所は、飯尾達の居る小屋の前からは死角になつていて、たとえ明るくとも、お互いを視認する事は出来ない。

肯いて、小澤は疲れた笑みを浮かべた。二人ともやくざの持ち物だつた懐中電灯を手に行している。

「結局、どういう事なんだ」

小澤は携帯電話を取りだし、振つて見せた。

「GPS機能だよ」

飯尾達は小澤の携帯電話の位置を追跡していた。事前に申し合せておいたのだ。山間で電波が途切れても、相手が鬼丸組と判つていれば場所の察しは付く。俵藤自身、そうしたのだから。

「最初から最後まで、おまえの仕込みか」

俵藤の声は、暗く、重く、澀んでいた。

「そつでもない。やおいかんもんさ」

「俺は、人を死なせちまつた」

「俵藤」

「あの二人は怯えていた。当然だ。仲間を一人やられ、銃を奪われているんだからな。だから、少し脅かせば逃げ出すと思つた。近寄つてはこないだろうと思つた。それが」

「お人好しも大概にしる」

吐き捨てる様な小澤の声に、俵藤は言葉を切つて固まる。

「殺したのは辰野だ。あんなやくざの罪を被るなんざあ、お人好しにも程がある」

「俺がお人好しなら、おまえは何だ。自分を餌にしてまで滅私奉仕か。自殺願望かよ？あいつらはおまえに何を求めている」

小澤の言葉は俵藤の憤りに火を点けた。あいつらとは、無論飯尾達のこと。飯尾とその組織の存在は一応俵藤も知っている。飯尾とは何度か顔を合わせた事もある。だが、その組織の実態はさっぱり解からない。様々な面で高度に訓練された民間の、営利目的の非法団体。その程度の事しか解からない。そして、訊いても小澤は絶対に答えない。

「今回はね、僕のミスでクライアントを怒らせちまつたんだ。損失補填で訳じゃないけど、それなりに片を付けとかないと、この世界じゃ遣って往けないからさ」

「おず屋の沽券に関わるってか」

「違う、そんなもんじゃ」

「その貢物は何だよ。鬼丸組か？県議の鳥海か？それとも、おまえの命か？」

ある意味そのどれもが正解だった。小澤が自ら餌にならなければ、飯尾も組織を動かさなかった。その結果小澤が死んだとしても、それは組織の関知するところではない。

「俺に――〇番の事を訊いたのは、通報されてちゃ困ると思ったからだな」

もし――〇番通報が入れば、鳥海が圧力を掛けていても、市民の訴えを完全に握り潰す事は難しい。だから――〇番センターの責任者は、形だけのものとして、全てが片付いた頃合を見計らって警官を調べに向かわせることになっただろう。そうなると、警官と飯尾達が鉢合わせする危険性が高くなる。

小澤と飯尾達の仕掛けにとって、俵藤は完全に、そして大きなイレギュラー要因だった。

「おまえはお人好しと言うが、俺は　俺は自分が、余計な手出し

をした拳句、人死にを出した間抜けとしか思えない」

「君が来なくても、人死には出てたよ。真っ先に死んだのは、まあ間違いなく僕だ」

俵藤は小澤の顔に目を向けた。お互いに懐中電灯は暗く絞って足を照らしているだけなので、その表情を窺う事は出来ない。

「また、君のせいで死に損なった」

溜息まじりの小澤の声は明るかった。本当に可笑しく思っているのだと、俵藤は感じた。

「……清々しく言う事が馬鹿」

俵藤は立ち上がり、鬱蒼と生い茂る樹木の枝葉に覆われた夜空を見上げた。暗くて何も見えはしないが、夜空がそこに在る事だけは判る。

「なあ、落ち着いてからで良いんだがな」

「何？」

「平山美貴 だったか。その娘の事、おまえが関わり、調べた限りで良いから、ちゃんと教えてくれないか」

小澤は肯き、持っていたヘルメットを差し出した。

「近くに僕のカブが置いてある」

「……あいつらが持って いや、まさか前もって隠してたのか！？」

「さ、男と二ケツはぞつとしないけどね」

秋は緩やかな進行を始めているが、夏が終わるまではまだ間がある。夜明けはもう、遠くなかった。

「さて、参りましょうか」

男は朗らかに言った。田村はゆっくりと顔を上げ、そちらを見る。銃器こそ持たないが、素人目にも軍用と解かる装備の一団の中で、その男だけが仕立ての良いスーツを着ている。四十がらみの固太りの男。おそらくこの場の責任者なのだろう。辰野が言っていた、小澤の背後に在る組織の者。

「私を、どうするつもりだ」

傍らを、ブルーシートとガムテープで梱包された死体が運び去られて行く。拘束された鬼丸組の男達は、ろくに抵抗も出来ずに連れ去られた。それをただ呆然と見送るしか出来なかった田村に、今更ながら、恐怖が憑く。

「少しお話をさせて頂きますが、ちゃんと先生の下へお返し致しますよ」

訝る田村を、男は穏やかに見下ろす。

「我々としても、先生にはもうしばらく、頑張って戴きたいと考えていますから」

五章 4

4

頭上 高架線路を電車が引切り無しに通過して行く。橋脚を埋める様に積み上げられたドラム缶に腰掛け、小澤は都市環状線の奏でる音に聴き入っていた。

鼻に手をやると、痛みで全身に緊張が走る。顔面に包帯は目立ち過ぎるので止めたが、鼻柱はまだベージュ色のテープで固定している。粘着面がむず痒くて仕方ないが、触ると痛い。

フェンスで囲われ、関係者以外立ち入り禁止の札が貼られた高架下。しかし錠は壊され、30n3のゴールポストが持ち込まれ、家電製品や粗大ごみの不法投棄場にもなっている。昼でも陽が差し込まず、騒音も激しい。加えて柄の悪い連中の溜まり場になっているので、付近の住民もあまり近付かない。そんな場所に、小澤は一人ぼつんと座り、待っていた。

鬼丸組に連れ去られたあの夜から、一週間が経っていた。

フィールドジャケットのポケットに手をつ込み、痣だらけの顔を顰める。その時、砂利を踏む音がして、小澤は顔を上げた。

「やあ、自己紹介はいらぬいよね」

現れたのは男女三人。見た目は小澤の方が若く見えるが、実年齢は皆、二十代半ばから後半といったところだろう。一人は女。小柄で根元の黒くなった金髪をおさげに結び、黒とピンクの悪趣味なジャージを着ていて目付きが悪い。一人は男。痩せて背が高く、神経質そうな緊張感がある。この男がリーダー格らしい。もう一人は栄養過多で運動不足な体形。小澤はこの男とは面識があった。

「相変わらずピザラットばかり頼んでる？食生活はもうちょっと考えた方がよいよ」

その男は脂肪ののつた丸い顔を紅潮させて小澤を睨んだ。だがすぐに目を逸らす。

「御活躍だったそうだな、おず屋さん」

黒ピンクの女が言った。男言葉だが、蓮っ葉で妙に艶のある声。

「銃を持ったやくざ五人、まんまと罠にはめて、二人殺ったそうじゃないか」

「酷い目に遭ったよ。満身創痍でまだ床上げしたばかりさ。顔だつて御覧の通りで、ね」

実際、硬い枝や熊笹で全身傷だらけになり、風呂に入るにも一苦勞な程だ。俵藤の方は、腕も脚も白く引つ掻いた痕が付いただけで、足の傷も絆創膏で済む程度だったのに。

「呼出しには応じた。何の用だ」

背の高い男が斬り付ける様に言う。

「まあまあ、お互い、もう仕事は済んだんだし、気楽にいこうよ」

「俺達を用済みにしたのはあんただ。それに、まだ終わってないんだろう」

「わざわざ君達のホームまで出向いて来たつてのに、随分な言い種だね……」

小澤は左手で首に巻かれた包帯に触れ、無機質な、鮫の様な眼で三人を見詰めた。

「調子こいてんじゃあねえぞ、小僧ども」

ピザ好きの太った男は小澤の眼と静かな声に竦んでいた。だが他の二人はふてぶてしく睨み返してくる。小澤は眼はそのままに、口元にだけ薄く笑みを浮かべた。

「まさか同業社に仕掛けられるとは思ってなかったよ。幽霊騒ぎに監視、PCのHDDまでまるっと抜かれるなんてねえ」

女と背の高い男は顔を顰める。

「幽霊はまあ、何とか上手くいったがな」

「謙遜してんの？監視だって、途中までは悪くなかったよ」

彼らの仕事は情報屋小澤逸郎の監視から始まった。行動パターン

や嗜好を調べ、どんな状況でどう仕掛けると効果的かが検討され、実行に移すまでに三ヶ月を要している。少なくともその間、小澤はまったく気が付かなかった。そして、幽霊を見せられたのだ。

「幽霊の仕掛けはピザ君が懇切丁寧に教授してくれたよ。畑違いだけど、中々感心させられた。僕も簡易版でやらせてもらったけど、思いの他上手くいったしね」

それは蛍光塗料とブラックライトを使った古典的な仕掛けだが、それ故に簡単で、出現と消失のタイミング次第で、かなりの効果を発揮する。先にその仕掛けで力也に幽霊を見せ、恐怖を植え付けたのも無論彼等の仕事。

「鳥海力也は頸椎損傷と聞いたが」

自分達を棚に上げて非難めいた眼をする女に、小澤は大仰に肩を竦めて見せた。

「因果応報自業自得でしょ。そうそう、あいつの蒐集品、今どこに在るか知らない？」

小澤が目を眇めると、女は憎らしげに笑い、

「おたくの部屋の天袋。羽目板外してみな」

鬼丸組に家捜しさせる計画まで組んでいたのだろう。だが肝心のやくざ達は、肝心な時に慎重過ぎて、小澤に近付こうとしなかった。「僕のHDD、認証画面は突破出来たかい？もう大分時間が経つけど」

不快な視線に追われる様にして部屋に戻ったあの日、小澤は自分のPCに細工が施されている事に気が付いた。だからこそ、部屋に監視装置が仕掛けられている事、ひいてはそれまでの視線の正体が尾行監視だという事に気付くことが出来た。この監視は流石に巧妙で、鬼丸組のそれとは比べ物にならず、気付いてからも手を焼かさされた。

「欲張り過ぎたね。PCに手を出さなけりゃ、もう少し気付くのは遅くなつてただろ」

溜息まじりに指摘すると、背の高い男は舌打ちをした。

「あんたのツレが組んだプログラムか。得体の知れない女だとは思ってたが」

彼等は小澤のPCのHDDを取り外し、中身をコピーするとその複製をPCに戻し、オリジナルを持ち去った。この複製HDDは毒入りで、認証画面にパスワードを入力すると、ネットに繋がった際にその情報を転送する様になっていた。葉菜のプログラムは認証画面上に、不正処理が加えられたと警告を表示したのだ。所有者のみに解かるアイコンとして。

「もう気付いてるかもしれないけど、あれには君らの置き土産と良く似た仕掛けがしてある。あんまり頑張らない方が吉だよ」

無理に解析しようとする、その仕掛けは動き出す。解析機をネット接続していなければそのマシンのデータを破壊するだけだが、接続されていれば、小澤の使っているサーバーにデータを転送して元データを破壊する。

「それで思い出した。あの心靈動画、何で流したの？あれで君らの正体ばれたんだよ」

「理由はPCと同じだ。あんたのツレがハッカーと解かっていけば、しなかった」

動画を流出させた時点では、一之瀬葉菜の存在は、あまり重要視されていなかった。大量の複製が遍在するネットの中で、オリジナル最初の一つを特定し、さらにそれを発信した人物をあっさり突止める技術と感性の持ち主が、そんな所に居るとは思わなかった。

「かもしれないけどさ、それ以前に、僕は動画を見て、やらせだつて解かったんだよ」

小澤はそのジャンルに明るくないので判断は難しいが、葉菜と藤の感想からすれば、あの心靈動画の完成度は高い。だが、小澤はその劇中の人物。それが見た目の効果、雰囲気を優先で変造されている事にすぐに気付いた。動画は携帯電話で撮影された様に装われていたが、それだと撮影者は小澤から近い所に居た事になる。酔っけていても、知覚出来る範囲にそんな人物は居なかった事は解かる。

女と背の高い男はピザの男を睨む。ピザの男はばつが悪そうに目を逸らし、

「まあ、あんたを追い込む一環としてだったが、良い手じゃなかった事は認める」

女はピザの男の脚を忌々しげに蹴る。

「この馬鹿が調子に乗って勝手に上げちまったんだよ」

「だが元はと言えば、あんたが死体なんざ見付けちまうからだ」

背の高い男は吐き捨てる様に言った。

「あの時は監視　されてなかったよね？」

「……恥ずかしながら、失尾していた」

それで尚更腹が立つのだろう。平山美貴の白骨死体が発見された事で、彼等とその依頼主の計画は大きく狂ってしまった。

「ま、君達の依頼主も、間抜けの鬼丸組を抑えきれなかったしね」

鬼丸組と、この悪徳探偵達の連携が取れていたなら、小澤はもっと苦しい立場に追い込まれていただろう。

「ところであの幽霊役、君らのお仲間？」

はあ？と、女は当惑の表情で声を上げ、次いで顔を赤らめ仲間の男二人を交互に見てから、睨むように小澤を見た。

「あれ、あたしだけ？」

「……へえ。じゃあ、キツネはどうしたの？」

「狐？何言ってるんだ？」

三人の怪訝な眼に嘘は無いと小澤は感じた。何より、今更ここで嘘を吐く意味が無い。

「……OK、じゃ、君達から質問はある？」

「俺達の依頼人の事は、訊かないんだな」

背の高い男が確認する様に問う。

裏社会のこの手の業種でも、拘束力は強くないが、掟の様なものは在る。最初からカモにする気なら別だが、依頼主を裏切ってはならない。小澤がここで彼等に訊いた事は、取り方にもよるが一応裏切りには当たらない。裏を返せば、裏切りでさえなければ、意外な

程口の滑りは良くなる。

「お互い仕事の上の事、恨みっこ無しにしよう。前回もだけど、協力的で助かったよ」

小澤はドラム缶から飛び降りると、ポケットから手を出した。その手には、黒星^{トカレフ}が握られていた。これと、やくざ殺しという凶暴で真新しい情報があつたから、ただでさえ居所を突き止められていた三人は小澤の呼び出しに、応じるしかなかったのだ。

「これ、今回のお礼。受け取って」

呆気にとられた三人が、唐突に手渡されたそれが、巧みに加工された玩具^{モデルガン}だと気付いたのは、それからしばらく後の事だった。

五章 5

5

十月某日

雨の音。障子を開けると仄かに煙る海が見えた。波頭を立てずにうねる海面は、鉛色。

「『秘書が勝手にした事で私は知らない』を、地で行ってますからね」

席に戻り、徳利を手に取って差し出す。飯尾は杯を空けて小澤の酌を受けた。

「知らぬままなりに、納得して戴いているよ。ウチは鬼丸組とは違うつて事にも、慣れてもらっつかないね」

注がれた酒を一口含み、飯尾も徳利を手に取る。小澤も器を空け、酌を受ける。

「田村がフォローしてンでしょ」

「一件を仕組んだ張本人だからね。これであの男の野望も一応達成された訳だ。先生も田村に引き継ぐまでは頑張つて戴かないと」

飯尾は醤油を付けた白焼きの鰻に、山葵を少量のせ、口へと運ぶ。小澤は重箱の蓋を開け、甘く香ばしいタレの香りを吸い込んだ。

「あ、これ報告書の最終版になります。田村の管理してた裏帳簿も同封しときました」

小澤は鞆から大判の封筒を取りだし、卓の上に置いた。飯尾はそれを取り上げ、それでは拝見と、杯を片手に中身に目を通す。

鬼丸組の辰野らに拐取された際に小澤が商品サンプルとしてちらつかせた鳥海征一郎と、県警、県教委幹部との癒着に関しては、あの時点では殆ど調べは付いていなかった。単に噂の表面を舐めただけ。辰野の指摘通りのブラフ。だが、事実上それで充分だった。第

一版の報告書を待つまでもなく、県議会議員鳥海征一郎は早々に折れていた。

「イソミタール購入履歴　裏が取れたね」

飯尾は添付された資料を見て眉を顰める。

「馬鹿ぼんを操った方法が謎だったんで、調べてたんです。伝聞判断ですが、バッドトリップぽかったし。そしたら例の悪徳探偵の一人があっさり教えてくれましてね」

イソミタールとはバルビツール酸系の睡眠鎮静剤。田村はこれをネットで購入し、自白剤として鳥海力也に使用していた。蒐集品に関する事を聞きだし、それをどう使えば効果的かを探るために。その過程で、混沌の中にあつた力也は平山美貴に纏わる者として小澤の名を挙げたのだ。ただし、それは子供の頃の事。よくも現在の「情報屋」にまで辿り着き、利用しようとまで考えたものではある。「田村は君の事を見誤り過ぎたんだなあ。体のいい噛ませ犬と思っただらうけど」

小澤が辰野に尋問を受けた時に薬の事を挙げたのは、その場に事情を知る者が居ると読み、揺さぶりをかけるためだった。鳥海征一郎の悪行を並べ立てたのも同じ理由。

「にしても、主家の嫡子を排斥して御家乗っ取りですか。嫌な世界ですね」

「嫡子だったって、アレじゃあね。どうも馬鹿ぼん、田村のことも虐めてたらしいし。奴さんにすれば自分が引き継ぐ前に身代食潰されたり、不祥事露呈で地盤ごと失う様な事になる前に、何とかしたかったんだろ」

田村が鳥海力也排除を決意したのは、力也が毒牙にかけてきた女性達からの戦利品を保管している事に、偶然気付いてしまったから。多恨多情のくせに執念深い力也は、多くの女性に付き纏い、襲っていた。蒐集品は几帳面にもパッキングされ、本来の持ち主の個人情報を書いたラベルまで施されていた。そして調べた結果、持ち主の現在の所在が特定出来ない物が一組だけあつた。その持ち主は、

ラベルの日付の日時に失踪していた。

「そう言や、馬鹿ぼんの容態は？寝たきりなんですよね」

「うん、もういけないらしいね」

薬物汚染で疲弊しきった体に頸椎損傷。しかも山中に半日放置されていた鳥海力也は、漸く限界を迎えようとしているらしい。

「警察の方は、どうなりました」

「ああ、君の項目は改竄済み。今は良く似た名前の別人。調書も指紋も取られてないし、後は”杜撰な資料管理”に任せとけば良い」

「いや、まあ、それもなんですけど」

「無事、遺族の元へ返せたよ」

鳥海力也の蒐集品となっていた平山美貴の遺品を遺族に渡すために、鳥海征一郎の力を利用した。笹ヶ丘の地下壕跡から、再調査で発見された事にしたのだ。長らく土中に埋まっていた様に劣化を偽装までして。本来なら、そんな危険は犯すべきでは無い。だが、小澤はどうしても家族の元に遺品を返したかった。なるべく、穏やかな形で。

「その位の事はさせても罰は当たらんさ。ついでに遺族への見舞金も出させた」

実家が所有する土地から死体が出ただけでも聞こえが悪いと言って、司法解剖を行政解剖にさせた拳句、その報告の提出までゴネて遅らせた鳥海征一郎である。見舞金を出したとは言え、それで平山美貴が浮かばれる事もなく、遺族が癒される訳でもない。

「死因はやはり、不明のままですか」

「落盤による窒息死って事で、決着が付くそうだね」

その日の夜

開け放ったアトリエの窓から、庭木を打つ雨の音が聞こえる。小澤はソファーに沈み込み、手にしたロックグラスを揺らした。俵藤は一〇〇号キャンバスを相手に、ペインティングナイフを振るって

いる。使っている絵の具は油彩ではなくアクリル。使い勝手より、乾燥の速さを優先していた。

「それで、思い出したのか」

俵藤は滴る汗を拭いもせず、ナイフを使いながら訊いた。ざしざしと音を経て、ドンゴロスの画布に斬り付ける様に絵の具をのせて行くその様は、まさに格闘。

まあねと、力なく答え、小澤はグラスの縁をなぞった。それは箕都竹高校に高荷を訪ねた時の話。小澤が平山美貴とは一面識も無いと言つと、高荷はそれを否定した。小澤は戸惑い、何を根拠にと、笑った。

「では、何故君は平山君の事を　話が見えなくなつた」

高荷は困惑と猜疑の眼で小澤を見た。このままでは死者を食い物にしようとしていると誤解されてしまう。全てを話しても信じてもらえる確証は無い。否、余計に疑われかねない。だが迷つた末に小澤は話した。見得も打算も無く、こちらの手の内を全て晒し、言葉を尽くすしか信用は勝ち取れないと判断した。高荷は失われた環を埋める重要な情報を持っているとの直感だった。

「彼女が浮かばれるために必要な事……そういう事だったのか」

高荷の眼から、少なくとも猜疑は消えた。

「私は幽霊の存在を信じていない。今の話も普段なら一笑に付した
だろう」

普段なら？と、小澤は慎重に訊ねた。

「普段ならな。だが、今はその話を信じてても良いと思つている。しかし、この期に及んでも君の言う根拠を開示する事は出来ない。それでは彼女が報われない。思い出してくれ。平山君と君には」
「その口振りから、高荷は平山美貴の口から小澤の事を聞いた事があるのだと悟つた。」

それだと、俵藤は重ねて先を促す。小澤はスコッチを一口含み、ゆっくり飲み下した。

「小学生の頃、探検隊ごっこが流行ってさ。その中に一人、女の子がいたんだ。別のクラスの友達が連れてきたコで、みっちゃんで呼ばれてた。僕はあまり話した事、無かった」

それはまだ、男子女子の体格差、体力差が目立たない頃の事だ。女子の中には稀に男子に交じって遊ぶ事を好む者がいる。みっちゃんはそんな子だった。一緒に笹ヶ丘丘陵で遊び、橘・箕都竹山炭鉱跡へ遠征にも行った。そして、それが発覚して自治体から探検隊ごっこ禁止令が出され、隊は解散を余儀なくされた。場所が場所だけに当然ではある。それ以来、みっちゃんと遊ぶ事は無かった。

中学も同じだったのだが、その頃になると学年の違う男女は接点を持ち難い。成長期は人の面差しを大きく変えもする。小澤は、みっちゃんを忘却の彼方に埋もれさせてしまった。だが、みっちゃん平山美貴は、イツロー君 小澤逸郎を忘れてはいなかったらしい。彼女がいなくなってしまうた今、それを知る者は老教師一人だけ。そして彼は口を噤んでいる。

「結局、彼女は何で地下壕に？」
「さて、ね」

今の鳥海力也には、懺悔や迷惘をする気力も体力も無い。田村は力也からある程度の事は訊き出しているが、それも薬物による譫妄状態での発言。真実か否か、判別し難い。

駅から彼女の家までの途中で、力也は車を使って接触した。事に及んだ場所は河川敷。そして、そこから彼女は逃げ出し、力也は見失った。少なくとも本人はそう言ったそうだ。この先はもう、推測する事しか出来ない。

パニック状態で路上に上がった彼女は、人に助けを求めるより、力也から身を隠す事を優先し、幼い頃の記憶から、近くの笹藪から入ったその先に、地下壕が在る事を思い出し、彼女はそこに潜り込んで

「落盤は偶然だったと言うのか」

実際に体験した小澤にはそう思えた。小規模な崩落だったはずだ

が衝撃で気を失い、酸欠で目覚める事が出来なかったのだろう。

「幼い頃の記憶、か」

鋭い擦過音を経てながら広い画面を駆逐して行く俵藤は、少しの間手を止め、呟く。

「切ねえな」

小澤は目を瞑り、グラスを額に当てた。

平山美貴の想いも、鳥海力也の妄執も

「僕には、重過ぎて 痛ましい」

末節

末節

天を仰ぐと覆い被さる竹林の影を透かし、十三夜月が見える。細く硬い落ち葉を踏んで、小澤は立ち止まった。

白い丸木の鳥居と石造りの稻荷の祠。

覆いを付けた蠟燭を二本立て、火を点す。周囲が仄かに明るくなつた。

傍らに置いた荷物の中から五合瓶を取り出す。栓を抜き、瓶の口を指で軽く塞ぎ、祠の上に酒を振り掛ける。そして持参した湯呑に注ぎ、折り詰めの稻荷寿司と共に狛狐の前に供え、拍手を響かせた。^{かさわで}
「礼儀作法を弁えぬ不届き者では御座いますが、しばし、彼女と話をさせて下さい」

荷物の中からコスモスの花束を取りだし、お供え物と並べて置く。「神前に仏花は無いだろうって思ってたさ。色々迷ったけど、ちょっと地味かね」

祠の前の地面に直に座り、自分の分の湯呑に酒を注ぎ、呷る。

「さて、漸く一段落付いたよ」

色々であった。しかし、総体として何かが大きく変わったという事もない。

変わったと言えば、町から古参の暴力団が一つ消えた事くらい。その縄張りや利権を巡って争いも少しあったが、今はそれも治まっている。最大の景品、土地の大立者の後ろ盾は、椅子取りゲームの席には無かつたからだ。

県議会議員の鳥海とその秘書田村は、公的には、やはり何事も無かつたかの様に過ごしている。法的にも社会的にも、彼等を咎める者は無い。しかし今後、この二人が我が世の春を謳歌する事も無い。

そして変わった事と言うより、ちょっとした珍事が一つ。先日、繁華街の紺夜ヶ辻で大捕り物があった。派出所の警官と消防署員の共同作線により何とか召し取られ、騒ぎを聞き付け、勝手に出張ろうとした地元猟友会は虚しく立ち去ったと言う。お縄になったのはキツネ。それはローカル局のその日の夕方のニュースでも報じられた。小澤はその動画データを斯波涼子に見せて、訊ねた。

「斯波さんが見たキツネって、こいつ？」

「あ、そうそう。黒靴下の、このコ」

ケージの中で萎れているキツネの画像を指して、涼子は断言した。映像中、アナウンサーも言っているが、耳の先と足の先の黒いそれは、キタキツネ。飼い主は不明のままだが、ペット化されていたものが逃げ出したらしいとされている。だが、小澤が見たキツネは耳の先も足の先も黒くはなかった。

まだその辺に居るのか、それとも……

自分の膝に肘を突き、拳に顎を乗せ、小澤は酒を呷る。そして、笑った。

「お狐さんか君かは兎も角、巻き込まれたって、ずっと思ってた」
巻き込んだ者は確かにいた。

田村の計画は、その構造自体は極めて単純。小澤を噛ませ犬にして、力也を一族からも鬼丸組からも切り離し、排斥する。

力也の悪事が外に漏れては拙いので、田村がそれを明かしたのは鳥海征一郎と、鬼丸組の一部の幹部だけ。辰野はその一人。力也の処置は生涯座敷牢に軟禁。しかし、噛ませ犬の方は、端から死なせるつもりだったはず。

何故力也だけでなく、小澤が幽霊を見なければならなかったかと言えば、周囲にはそれにより小澤を挙動不審に見せ、小澤自身に対しては平山美貴の事を思い出させる下拵えが必要だったから。迂遠に見えるが、幽霊仕掛けには力也で実績があった上、仕掛けの使い回しも利く。何より、事前の調査から小澤は心霊現象の類が苦手だと解かっていたから、ほぼ確実な効果が望めた。

幽霊を見せた後、一ヶ月という効果の浸透と準備の期間を経て、計画は次の段階へ移行するはずだった。小澤に平山美貴を思い出させる決定打と、こそ泥の恐喝者に仕立て上げるための仕上げ。それを頓挫させたのが、平山美貴の死体発見。見付けたのは他ならぬ小澤で、場所は鳥海一族の私有地。

田村と彼が雇った悪徳探偵（彼等は小澤が情報屋を名乗るのと同様、何でも屋を名乗っている）は、平山美貴を幽霊に仕立てておきながら、他の被害者と同様に、彼女もどこかで生きているのだろうと思っていた。

匿名の通報を受けた報道各社は、その真偽が定かではないが故に、土地の所有者に許可を得る事無く笹ヶ丘丘陵の地下壕跡へ出向き、死体発見を報じてしまった。勿論この事は後に問題にされたが、既成事実が出来上がってしまった。場所が鳥海の土地である事は伏せる様に指示が出されたが、隠そうとして隠せるものでもない。世間の反応に、県議会議員鳥海とその秘書田村は焦りを覚えた。迂闊に小澤に手を出す事も出来なくなった。

小澤が反撃に転じると、それまではひたすら影に徹していた田村も、鳥海征一郎にせつつかれて表に出ざるを得なくなった。

連鎖する崩壊を、食い止める術は無かった。

小澤は自らを餌に、クライアントまで担ぎ出して底引き網さながらに獲物を浚い上げた。

何とか事は治まったが、謎のまま残ってしまった事も幾つかある。

何でも屋の黒ピンクジャージの女は、自分が幽霊役を演^やったと言った。だが、女は化粧で変わる事くらい重々承知の上で、全くの別人としか思えない。そもそも身長が違う。何でも屋の女は小柄で、大きめに見積もっても一四〇センチ。小澤の見た幽霊は少なくとも一五〇センチ以上あった。ヒールなど履かず、素足だったことも憶えている。そして、失踪当時家族が作ったビラによれば、平山美貴の身長は一五五センチ。

何でも屋の話で不思議な事がもう一つ。小澤が白骨死体を見付けたあの日、彼等は失尾　つまり尾行に失敗して小澤を見失っていたと言った。アパートを出た時は無論監視下にあったはず。その後はコンビニに寄って虫除けスプレーを買い、上皿尾の笹藪に向かっただけ。見失う様なポイントは無い。言い訳なら幾らでも出来るだろうが、リーダー格の男は、はつきり失尾と言った。この業界で、それは口外したくない、恥ずべき失態なのに。

あの時監視が付いたままだったら、通報でマスコミが来た時には、死体は既に片付けられていただろう。さらに、小澤を陥れるために、非道な使われ方をしたかもしれない。

「結局何だかんだで、随分と君に守られていたんじゃないかな」
そうでなければ、かなりの頻度で偶然に助けられたことになる。

小澤は自分を運に恵まれた人間だとは思っていない。

最も偶然を疑ったのは、箕都竹高校に高荷を訪ねた時。高荷はそこで小澤に話す事が自分に課せられた運命とでも言う様に、有りつ丈の情報を曝け出した。あれが無ければ早晚、田村達の計略に封殺されていただろう。

湯呑を乾し、酒を注ごうとしたが、瓶にはもう殆ど残っていないかった。気付かずに随分重ねてしまっていた。

「だと言うのに、僕は君の最期をきちんと掴む事が出来なかったよ」
鳥海力也が逝った。

結果的には小澤が殺した事になる。明確な殺意があった訳ではないが、それで死ぬ可能性は考えなくもなかったし、死んで当然の奴だとも思っていた。言うなれば未必の故意。

だが、そんな事はどうでも良い。

自分の役割は終わったので、田村とは炭鉱跡の夜以来会っていない。鳥海征一郎とは顔を合わさず終い。若中頭辰野を筆頭とする鬼丸組の面々がどうなったかも知らない。何れも小澤が知る必要の無い事だ。背景、事情、経緯など、知った事ではない。だが、息を引き取る前に、力也の口だけは割らせるべきだったのではないか。

その想いが拭えない。

仕事の術としてハツタリはかますが、推理憶測の類であやふやな事を言うのは嫌いだ。だと言うのに、彼女は何故地下壕にと問う俵藤への答えは、推理憶測でしかなかった。

この結果を知れば、小澤を信じて託した高荷はどう思うだろうか。

こんな事じゃ、君も浮かばれんよね。

そして、何より遣り切れない気持ちにさせるのは、平山美紀との関係を高荷に指摘されるまで思い出せなかった事。その時のシヨックが今も忘れられない。思い出した今でさえ”みっちゃん”の記憶おもいでは臃げなまま。

きつと彼女の中でも、小澤の事は殆ど忘れ去られた遠い思い出に過ぎなかったはず。

そうは思うのだが、恨んで出られても仕方ないとも思えてしまう。

さりっ 落ち葉を踏む幽かな音。

思考に沈み込み、固まっていた。どのくらいそうしていたか解からないが、気が付くと、祠の左手、そう離れていない場所で、双眸が灯明の火に煌いていた。

魅入られて、身体が硬直する。強烈な緊張感で全身、歯まで痺れる。視線を合わせてはいけないと本能的に焦点を外す。

そっ さりっ 可聴領域ぎりぎりの音を経て、それは小澤の前へと進み出てきた。

狐。

頭を低くし、細長い鼻面を向けて、しばらくそれは小澤を見詰めていた。しかし興味を無くしたのか向きを変え、供えてあつた稲荷寿司の匂いを嗅ぐと、ぱくりと食い付いた。がふがふと遠慮の無い咀嚼の音が聞こえる。

笑いの衝動が不意に込上げてくる。小澤はそれを必死に堪え、狐の食事を見守った。

何故か、御苦労さんと、労われた気がした。

そうだ、もう一つ伝えとく事があつた。

目を閉じ、描き上げられたばかりの俵藤渾身の逸作を脳裡に浮かべる。絵の題は、狐月。繊細に幻想的に描かれた、月下の女の立ち姿。

少しして瞼を開くと、既に狐の姿はどこにも無く、ただ灯明の火が揺らいでいた。

末節（後書き）

あとがき

はじめまして、天津三夏です。

この度は拙作「狐月ノキツネツキ」に最後までお付き合いくださ
いまして、真にありがとうございます。

カテゴリーをファンタジーにしておいて、

「はあ？これのどこがファンタジー!？」

と、思われた方も少なくない（それ以前に、最後まで読んでく
ださった方自体が少ない）と思います。

が、一応、ファンタジーとしてのオチは付けられたんじゃないか
と自負……すみません、自負なんてありません。

これ以上書くと愚痴になりそうなので、この辺で物語の補足を少
々。

舞台となっている「わたつみ市」は架空の街です。しかしモデル
はあります。九月末くらいまで平気でセミが鳴いている、夏の長い
所です。年によっては十月頭でも鳴いてます。そして、発砲事件が
わりと頻繁にあります。

本作は続編を前程に作つてあるため、人物、組織は、若干ぼかし
気味に描写しています。一応、単作として成立するように書いては
いますが、読みづらい、解かり難いと思われることもあるかと思
います。単純に私の力不足故かもしれませんが。

最後に、御意見、御感想など頂けましたら幸いです。

それでは、次回作にて、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4470r/>

狐月/キツネツキ

2011年4月24日15時40分発行